

昭和二十年八月十五日

あの頃わたしは

少女たちの戦争証言

はじめに

「昭和二十年八月十五日」、あの時、あなたは何歳でしたか？まだ生まれていなかったあなたは、ご両親やそのまたご両親は何歳でしたか？

あの日から、「七十年」です。

多少とも戦争の記憶のある人は、社会では「高齢者」と呼ばれる年齢となりました。日々元気に意欲的に暮らしていると自負している私たちも、七十年という時間は、自ずと来し方をじっくり振り返る歳月でもあります。一昨年あたりから、同年輩どうしの日常の会話の中に、「そういえば、あの頃」とか「戦時中は」などの言葉が、よく聞かれるようになりました。その一人ひとりの七十年前の思い出話は、単に少女時代のエピソードであるだけでなく、現在のその人の原点でもあり、またその時代の記録でもあるように思われました。こんな雑談の中から、終戦七十年特別企画『昭和二十年八月十五日 ああの頃わたしは』

が生まれました。そして、ここに東京支部会報『ともしび』特集号として発行することになりました。

手記も紙上インタビューの回答も、お寄せくださったのは、昭和二十年以前に生まれた会員がほとんどでしたが、皆様から寄せられた声は、期せずしてあの頃の少女たちの戦争証言となりました。主張する明確な言葉をまだ知らず、それでも全身で戦争を受け止めていた少女たちが、今こうして大学女性協会の会員として活動していることは、けっして偶然ではないように思います。今にして思えば、もっと大先輩たちにお話を伺っておけばよかったと悔やまれます。

このささやかな文集が、次の世代へ戦争を語り継ぐきっかけになることを願っています。手記や紙上インタビューの回答をお寄せくださった皆様、そして聞き取りにご協力くださった皆様に、東京支部委員一同厚く御礼申し上げます。

『ともしび』特集号発行まで

大学女性協会東京支部委員会は、2014年12月に全支部会員263名に「『ともしび』特別企画 ご協力のお願い」の文書を送付しました。手記寄稿者および紙上インタビュー回答は、2015年4月末に締め切り、その後、委員による編集作業を経て、2015年7月に発行となりました。

編集の方針

- ・手記は、全寄稿者の全文を編集して掲載しました。
- ・紙上インタビュー自由記述欄は、手記に含めました。
- ・紙上インタビューは、全員の回答を抜粋し編集して掲載しました。
- ・寄稿者および回答者氏名は、本人の了解を得て実名表示としました。

- ・掲載写真は、本人から提供されたものです。(禁無断複写)
- ・掲載の順番は、生年の早い順としました。
- ・地名表示は、当時のものもあります。
- ・戦争前・中・後の年数表示は、昭和(西暦)に統一しました。昭和を省略した箇所もあります。
- ・漢字・用語は、原稿を尊重しました。

はじめに 2

第1部 手記

(紙上インタビューの自由記述欄を含む)

惜別 山崎倫子様	11	青木 怜子	58
丸山 庸子	16	児林 英子	74
五十嵐康子	20	辻 英子	79
加藤 恭子	25	廣田 里子	87
坂井 英子	31	藤谷 堯	91
島美喜子	35	東山セツ子	92
奥津 成子	40	海老根静江	101
宮島 茂子	49	平野 和子	106
野瀬久美子	50	中山 正子	109
望月 浪江	52	武内 道子	111
		佐伯 邦子	115
		向後紀代美	118
		坂上栄美子	119

木村 和子	125
河井 尚子	127
鷺崎 千春	129

第2部 紙上インタビュー

紙上インタビュー用紙	132	青木 怜子	185
中村 道子	136	辻 英子	196
坂井 英子	143	廣田 里子	210
島美喜子	148	藤谷 堯	217
宮島 茂子	155	東山セツ子	223
野瀬久美子	161	中山 正子	233
望月 浪江	170	佐伯 邦子	238
阿部 幸子	174	小澤 紀子	239
齊藤 智恵	180	向後紀代美	243
		坂上栄美子	247
		木村 和子	251
		河井 尚子	254
		鷺崎 千春	257
		後記	260

第1部

手記

手記寄稿者

会員 26名 会員外 1名（男性）

終戦当日の年齢

20歳以上	1名
19歳～15歳	6名
14歳～10歳	6名
9歳～5歳	10名
4歳以下	4名

惜別 山崎倫子様



大学婦人協会（現大学女性協会）元会長（1980年～83年）山崎倫子さんが、去る5月29日に96歳にてご逝去されました。深い感謝とともに、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。山崎さんには、3月に今回の企画に際しご寄稿をお願いしたところ、入院中でご無理とのことでした。それでは、20年前の『ともしび』の記事を、再掲載させていただきたいと申し上げましたら、快くご承諾くださいました。ところが、突然の訃報に接し、残念ながらご霊前にこの一冊を捧げることになりました。

このお写真は、昨年3月のお誕生日に撮られたもので、4月にご親族からお送りいただきました。

2015年7月 中山正子

故 山崎倫子さん

(終戦当時26歳 居住地…ハルビン)

『ともしび』第18号(1995年7月1日発行)では、武蔵野市立北町高齢者センターで山崎倫子所長のお話をお伺いし、記事として掲載しています。改めてご紹介します。

「高等教育と女性」

―その社会的還元シリーズ①― 山崎倫子さん

「ともしび」第六号に続き、編集係はセンターに先生を訪ね、今回は激動の昭和史と重なるような、その人生を語っていただいた。明るい日差しのセンターの中には、ピンクの制服のボランティアたちと談笑する大勢のお年寄りの楽しそうな姿があふれていた。先生に会った瞬間「あっ、秋篠寺の伎芸天!」、温かく優しく頼もしく、ふっと肩の力が緩むのを感じた。

先生は一九一九年のお生まれで、夫君と共に診療に携わる一方、大学婦人協会会長、国連総会政府代表代理、日本ユネスコ国内委員、海外移住審議会委員、日本女医会会長、日本汎太平洋東南アジア婦人協会会長等を歴任され、五月七日には国際女医会名誉会員に選ばれるというFAXが届いたばかりとのこと。

国際的な活躍もそのはず、英、仏、独、ロシア、中国語を話される。戦前戦中まさに「敵性語」を聖心語学校で、また十三歳でハルビンに渡ってからはブリティッシュ・ハイスクールで学ばれたという。「どんな人とも話せば解りあえる」という父上の教育方針が、実際に倫子先生を育んだ土壤だったのだろう。

東京女子医専に進む時、「日本人が満州人にひどいことをしているのを見かねて、卒業したら満州に帰って医者をやろう」と思い、昭和十八年から二年間ハルビン医大付属市立病院に勤務された。その間には奥地のひどい環境のロシア人疎開地を馬で巡回往診もされた。乗馬を始めて間もない頃、興奮した馬に一〇〇メートルも引きずられ死ぬ思いをしながらも、翌日にはもう乗ったという先生には、乗馬往診がむしろ楽しかったとのこと。

そして、二十年八月九日、ソ連の侵攻。敗戦とともにハルビンは無政府、無秩序の街と化し、悲惨な姿の在留邦人が集まってきた。誰もがわが身を守ることさえ困難な状況の中、二十五歳の先生はソ連占領軍司令部とひるむことなく毅然と交渉し、街の中央部に国際病院を開設された。地獄のような飢えと病氣と屍の中、日本人だけでなくソ連人、中国人の

ためにも分け隔てなく診療し、危険な地域にも度々往診に行かれた。ハルビン国際ホテル社長であった父上も命を賭して難民救済会の会長の任に当たっておられた。父上は「人間はひとりでは生きていくのではない。生きていくかぎり人の役に立つように」と教えられていたという。

この間の阪神大震災にも、女性医師十二人と駆けつけ奮闘された由。医療の方面のみに留まらず、様々な方面での先生のご活躍の底には、人間として何が大切かを見極めた大きなエネルギーがたぎっているように思われた。

二十八年に共に国立公衆衛生院に在籍されていた山崎浩氏と結婚され、吉祥寺に山崎医院を開業された。その後、多くの国際的な場で活躍している間に老人福祉に関心を持ち、ご自宅の土地二三〇坪を市に寄付され、今日のセンターを設立されたという。多くのボランティアや来所のお年寄りとの、さながら大家族のような日々を幸せと語られる。軍医だった夫君と共に「生きて日本に帰れたこと自体が不思議、第二の人生は人の役に立つこと」が信条とのお二人のもとには、共鳴する多くのボランティアが集まる。先生は「性善説を信じます」さらに「それに少しの勇氣と一歩踏み出す決断とが必要」と断言される。ずしりと胸にしみる言葉であった。



大学婦人協会会長時代のエピソード(全国セミナーを始めたこと、国連総会で青木怜子現会長との心温まる交流など)も聞くことができ、また協会の前進、発展を願う先生のお気持ちも強く感じられた。

庭の緑のまぶしい部屋で紅茶とクッキーを頂きながら、先生のお話に聞き入っているうちに二時間が過ぎていた。われに返り、自分の中に新しい何かがあふつと湧くのを感じつつ、道に迷わないかと心配してくださる先生に見送られて帰途についた。

●写真

武蔵野市立北町高齢者センターを訪問されたダイアナ妃と山崎所長(1995年2月7日)。左は『ともしび』18号。

●山崎倫子著書

『回想のハルビン―ある女医の激動の記録』牧羊社(1993)
『命を見つめて―魂に寄り添った女医の物語』ランダムハウス講談社(2005) 構成・岡山徹



丸山庸子

(終戦当時17歳 居住地…長野県小淵沢疎開先)

あの日私は、長野県小淵沢、浅間山を望む、ある精密会社の社員寮に居ました。天皇陛下のお言葉を聴いたのはその寮の前庭だったと記憶しています。前もってそんなうわさも無く、不意打ちでした。皆で畑づくりをし始めていたその庭に、皆うなだれてじっと聞いていた情景が記憶に残っています。：戦争が終わった。陛下の、やや高い静かなお声は、そのことを伝えておられました。

私たちは女子高等師範学校(学制改革後 お茶の水女子大学) 1年生に入学したばかりで、その頃空襲の激しかった東京を避けてこの小淵沢で、8月1日入学式を挙げたばかりの新入生だったのです。17歳でした。この年から女学校4年修了で大学受験が許可になったのです。食糧不足に備えて畑の耕作時間と、女子工員寮での授業が2週間ほど始まったばかりでした。北は札幌、青森、岩手などから関西、九州、愛知など殆ど全国から集まっていたのです。たまたま、フランスに留学されておられた湯浅年子先生が帰国されて、私たちの授業に参加してくださっており、何か今までにない新型爆弾のようなものが使われ

たらしいということをお話しくださったのを覚えています。物理の時間だったでしょうが、湯浅先生の少し興奮されて口早に、一点を見つめて、少し紅潮されたお顔をよく覚えています。

私たちはその後一応解散となり、夫々の国許へ帰り、再び東京大塚の本校所在地に戻り、しかし暫くは学年毎、学科毎に交代で変則的な授業を受け、常態に戻るには半年近くかかったように記憶しています。

女子高等師範学校入学前、私は桜蔭高等女学校4年生に在学していました。ここでは週の半分くらいは学校工場と称する動員時間に割り当てられており、ある時期は鐘紡製糸工場で、織機1台ずつを受け持ち、軍服を織る仕事を手伝い、あるときは中央气象台で暗号文らしい数字に関わり、またある時は軍靴の底の部分の厚みの点検に参加するなど、私たちの生涯の前後にない珍しい経験をしました。友人には旋盤を受け持った人もいたようです。

しかし、これらはつらいという経験ではなく、今思い出しても面白かったものとして記憶されているのです。鐘紡で1日どれだけ織れるかの競争をし、横糸の箆を上手に止めて、糸の交換時間の短縮を競うことなど、結構工夫があって楽しかったです。しかし、

おませな班長は、各人のメータを見回りながら驚きと、何が面白い？と冷ややかな笑みを残してゆき、いまま折々懐かしく思い出されるのです。

授業も少しずつ、最低限は課せられていたのですが、あまり覚えていません。世田谷に住んでいましたが、空襲に遭いました。家では両親と私だけ、弟妹たちは九州に疎開していました。焼夷弾でした。それは省線電車のすれ違う音、グオーツという大きな音をたて、天から降ってくるのです。地面に到達するや否や油が飛び散って点火し、それは童話の世界の点在する鬼火のようで、間違いなく一瞬美しいと思いました。その庭の一隅の光景は終世忘れ得ぬものです。

学徒動員では色々の経験をしましたでしたが、こうした異常な体験をもたらした戦争について、語られることはひとつもありませんでした。何のために、誰のために、どういう未来のために戦っているのか、話し合われることはありませんでした。私は家の書棚の漱石全集などを読み続けていました。

解散になって九州に帰省したとき、途中、どこか忘れましたが、鉄橋が破損していて、流れを下に見て枕木を徒歩で渡るといふ経験をしました。もう周りは薄暗く、上から電球が諸所に照らされてはいましたが、かなり高い所のその枕木に復員兵の方々が大勢並んで、

乗客の手送りをしてくださったのです。誰も無言でした。月が出ていたのです。私はこみ上げてくるものを感じ、何故か敗戦ということの一端を具体的に感じ取りました。

列車は予定より遅れ、私は九州の入り口で1泊しました。その時宿で出された夕食は赤飯のような赤ご飯で、ともかくも無事の祝いかと勘違いしましたが、これが当時一般に出回っていた、高粱ご飯なのでした。蔓だの茎だのが混ざっていましたが、案外おいしかったのを覚えています。

翌日早く、母や弟妹たちの疎開先に行き、女子高等師範学校からの通知に従って、私たちの戦後が始まりました。

五十嵐康子

(終戦当時16歳 居住地：福岡県浮羽郡福富村疎開先)

風船爆弾作成に関わって

私は昭和3年に生まれました。満州事変、日支事変を経て、12歳の時、大東亜戦争に突入しました。既に戦時色は濃く、母が制服に憧れ入学させた雙葉高等女学校も、昭和16年(1941年)4月から全国共通国民服となり、女学生は紺色のスフで白いヘチマ襟、おまけにボタンは左前の制服を卒業するまで着ることになりました。女学校3年では夏休み返上して陸軍衛生材料廠で錠剤の包装に従事しました。その後空襲はますます激しくなり、スカートをズボンにはきかえ、ゲートルを巻き、寝る時もそのまま、枕元には鉄カブト、非常食(大豆やお米を炒めたもの)を置き、空襲警報が鳴ったらすぐに防空壕に飛び込めるように準備しました。

19年(1944年)7月には学徒勤労動員の範囲を国民学校高等科、中等学校低学年にまで拡大することが閣議決定され、女学生、中学生は、軍需工場へ動員されました。私たち4年生は風船爆弾を作るために宝塚劇場が職場となりました。なぜ劇場が工場になったかといえば、この風船は直径10mで、満球試験のために柱のない広い作業場が必要だった

のです。そのため19年2月第1次決戦措置法によって、全国の19の大劇場を接收して作業場としました。東京の作業場は宝塚劇場、日本劇場、国際劇場、両国国技館と有楽座。宝塚劇場では1階の座席を取り外し、舞台と同じ高さに板を敷き、満球試験の準備ができていました。華やかな娯楽の場とは思えない有様でした。もちろん、この兵器は秘密でしたから『ふ』号兵器と呼ばれ、家族にも話してはいけないと言われました。風船爆弾の材料は和紙と蒟蒻糊。和紙は、最近、ユネスコの無形文化遺産として登録された「細川紙」で、埼玉県小川町から馬車で毎日運ばれてきました。

私たちは10人1組になって劇場2階のロビーに座布団を敷き、横1列に座ります。右端の人が長さ5m、幅50cmほどの半紡錘形の一片を左端まで投げます。もう1枚を同じに投げて重ね、全員が蒟蒻糊を掌いっぱいにつくい接合部に置き、糊代を折ると中腰になり、体重をかけ両指先を左右に動かして接着させるとともに、余分の糊を押し出し、指で取り除き捨てます。折り目に2cmの「かすがい」を貼りしつかり糊付けをして上の一片を手前に開き、継ぎ目に3cmの「かすがい」を同じ要領で貼ります。この作業が終わると全員で「一、二、三ー」の掛け声で前方に送ります。60枚張り合わせてやっと一個の風船の上半球が出来上がります。その重いことと言ったら…。上半球に用いる原紙は5枚の断片からで

きていたので、5断片と呼ばれ、下半球は3断片、天頂と排気口を取り付けた風船の重量は、約95kgだそうです。満球試験では送風機で空気を送り、半球くらいになったところで、中に入った人が穴や疵がないかチェックし、見つけると風船の内と外から蒟蒻糊で原紙に絆創膏を貼るようにして補修します。たまに疵を見落したまま膨らませると、バーンものすごい音で破裂して劇場中地震のように揺れました。食糧難の中、毎日の重労働でしたが、お国のためと一致団結して頑張っていました。

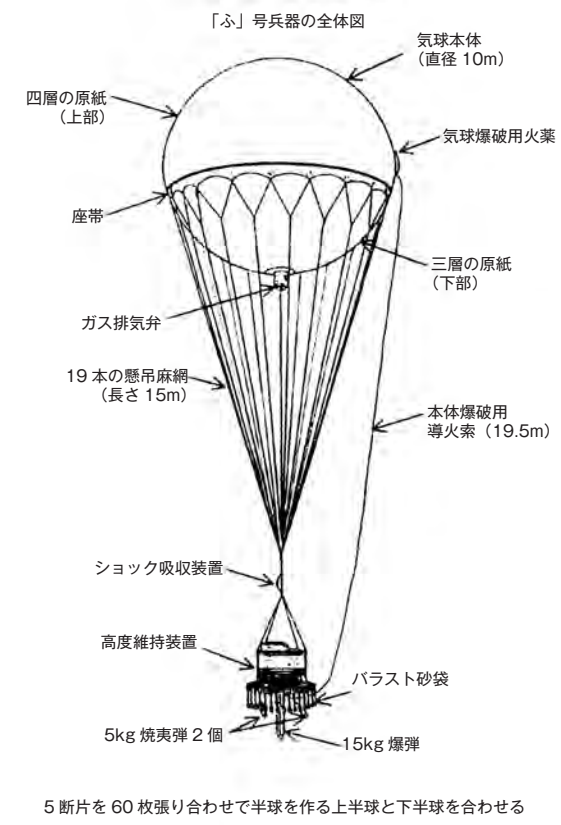
一方、東京への空襲はますます激しくなり、20年（1945年）1月27日午後2時ごろ、いきなり空襲警報が鳴り響き、先生の誘導で地下の食堂に退避しました。地下に降りるとき、ふと窓の外を見ると、道路を隔てた向かいの山水楼という5階建ての中華料理屋の屋上に、5、6人の男性が不安げに空を見上げているのが見えました。地下に降りた途端に近くに爆弾が落ちたようで、地下室は停電になり、キャーッという叫び声が上がりました。その時風邪のため朝から声が出なかった先生が「静かに！」のひと声、地下室は静かになりました。警報が解除になり、恐る恐る、上の階に出てみると、さっき窓から見た山水楼は跡形もなくなっていました。地下室に降りる前に見た屋上の男性たちはどうなったか心配でした。宝塚の窓ガラスも爆風で粉々になり、先生の言いつけに背き、作業場に残って

いたクラスメートたちは頭からガラスの破片を浴びていましたが、幸いけがをした人はいませんでした。その後先生の誘導で外に出ると、その朝、小川町から原紙を運んできた馬車の馬が爆風で倒れて死んでいました。私たちは蒟蒻糊でごわごわになった座布団を抱え、一旦近くの三信ビルに集合し、自宅の方面ごとに別れ、帰宅しました。私は原宿に住んでいましたから、電車が不通だったのでお堀端を歩き、赤坂見附を通り過ぎ、青山1丁目まで歩いて来たとき、やっと都電が動き出したので2駅乗ってやっと自宅に帰り着きました。その日の空襲では山水楼が直撃で木端微塵、隣の帝国ホテルの防空壕は直撃弾を受け、退避中のコック5名が亡くなったそうです。宝塚の後ろの現在の日生劇場と日比谷公園の間の電車通りにも、爆弾が落下して大きな穴が開きました。後になって私たちは九死に一生を得たことに気づきました。3月に入って『ふ』号兵器の生産は突如中止となり学校へ戻りました。自宅は5月の空襲で焼けましたが、私たち家族は危険を逃れ、3月末に福岡に疎開し8月15日を迎えました。

風船爆弾は19年11月7日から20年3月まで、福島県勿来、茨城県大津、千葉県一宮の3基地から放球されたとの記録が残っています。風船は偏西風（ジェット気流）ののって太平洋を横断し、8000km先のアメリカ本土を目指しました。報道によると約9300個

が放球され、そのうち900個から1000個がアメリカ本土に到達したとのことです。

「ふ」号兵器



風船爆弾の図

加藤恭子

(終戦当時16歳 居住地…東京都世田谷区)

十五歳の私たち

私の生年月日は、昭和4年7月8日、今年何と86歳の齢を数える。自分の年齢を考えると、あまりの高齢に信じられない思いと、この過ぎ去りし年月のあまりの早さに感無量の思いである。

昭和12年(1937年)、小学校2年生の時、日中戦争(支那事変)が勃発した。この日本の中国侵略戦争は長期戦化して、16年(1941年)12月8日の真珠湾攻撃、のちの太平洋戦争に発展していった。

戦前の日本には、昭和の年号のほかに、第1代神武天皇の即位を皇紀元年とした紀元の年号もあり、昭和十五年(1940年)は紀元二千六百年にあたり、国をあげて紀元二千六百年式典の行事が執り行われ、奉祝記念の二千六百年国民歌まででき、国民は日の丸の旗を振り、提灯行列をして日本国のいや栄えに酔った。

太平洋戦争(第二次世界大戦)が始まった16年12月は、私は小学校6年生だった。翌年小学校を卒業すると、戦前の教育制度である5年制の高等女学校である東京府立第十一高

等女学校（後の都立桜町高校）に入学した。東急の玉川電車を乗り継いで桜新町の学校まで通った。有原校長先生の教えは「又日新」だった。

女学校生活の1年2年は異常なかったが、太平洋戦争の戦局がだんだん悪くなり、3年生では鬼畜米英の言語である英語が時間割から消えた。体育館は学校工場となり、授業時間は削られて、運び込まれた軍需品の勤労奉仕が始まった。私たちの班は白衣のボタン付けと、その穴かがりをさせられた。3年生の途中からは軍需工場へ勤労動員されるようになった。

東條内閣は初め、中学校（旧制）・高等女学校以上の学生・生徒は、一人当たり年間30日以内の勤労動員を行うと決めたが、19年（1944年）以降になった頃では通年になり、授業はなく、私たちは蒲田の田村硝子工場に動員された。田村硝子は夜空の飛行機を照らすサーチライトの凹面鏡と、飛行機の風防硝子を作製していた会社で、私の級は凹面鏡の工場へ配属された。工員さんと同じカーキ色の作業着上下に、足にはゲートルを巻き、「必勝」の鉢巻きをして仕事に就いた。ゲートルは家を出る時、念入りに巻くのだが、工場へ着く頃にはゆるんでしまい、その巻き直しに苦労している私たちを見て、家庭科の先生が脚絆の型紙を作って下さった。以後手作りの脚絆で足を包み、おさげ髪で肩からは防空頭

巾を下げて工場へ通った。

凹面鏡の研磨はフェルトに弁柄（酸化鉄）をつけ、機械を左右に動かしてレンズを磨くのだが、私たち2人に女子工員が1人ついて作業をした。1週間に1度、朝近くの神社の境内に生徒たちが集まり、教頭先生からの訓示を聞き、時には軍歌を歌って各工場へ散った。

20年（1945年）3月10日の東京大空襲で蒲田一帯の工場地帯は完全に焼失した。やがて学校からの連絡で女学校の校舎に集まった級の友達は、地方への疎開などで半分の人数になっていた。



昭和20年15歳 万が一のため
一人ひとり写真を撮った

20年3月の工場焼失の時は、私たちは3年生（15歳）だったが、その年の3月末、上級の4年生、5年生が、同時に卒業となり、4月私たちは4年生で最高学年となった。

戦果は日増しに悪くなり、やがて日本国土上空にB29爆撃機が襲来するようになり、警戒警報、空襲警報のサイレンで私たちは手作衛生材料廠や東條英機総理の私邸があり、B

りの防空壕に逃げた。桜町高女の周辺には、

29から狙われていると言われていた。

やがて私たちは校舎を火災から守る仕事につくことになった。毎日約10名の生徒が交替で夕方学校に集合する。

料理教室で家庭科の先生と一緒に夕飯を作る。食材は学校の用意の他、生徒が家庭にある物を持参したりしたが、乾物類が多かった。カボチャの茎もご馳走であった。男の先生方も含めて20名くらいの会食は粗末ではあったが楽しかった。すぐ校庭に出られる教室に作法室の畳が運び込まれ、そこが私たちの寝室になった。着の身着のまま、私たちは寝る時間も惜しんでいろいろなおしゃべりに夢中になった。私たちは小学校6年生の時に戦争が始まったため、翌年の卒業前に予定されていた関西への修学旅行は中止になってしまった。戦争の気配はまだ感じられない頃だったので、私たちはがっかりした。防衛宿直は危険な仕事にも拘わらず、修学旅行の代わりのように思われて楽しい時間だった。

たまたま私が宿直の日、夜半、警戒警報が鳴った。皆校庭の一隅にある防空壕に入った。やがて空襲警報に代わった。防空壕のフタは卓球台の板であったが、そのフタを少し持ち上げて外を見ると、真っ黒な夜空の西方からB29が編隊を組んで飛んできて焼夷弾を次々に落とした。

焼夷弾は赤い火となって黒い空から雨のように降ってきて、ブスブスツと音をたてながら校庭の土に突き刺さった。体育館の屋根に落ちたがすぐ消され大事には至らなかった。あとの話では、あれは東條さんの家(学校から200mくらい)を狙って落としたのが、風に乗って来たのだろうとのことだった。しかし、真暗な夜空から降る赤い火は恐ろしさより美しい光景だった。丁度私の宿直の夜のこの出来事は、生涯忘れることができない。

その年の昭和20年8月15日終戦の日を迎えた。私たちは9月過ぎから学校に戻り、4年生の授業が始まった。国語の神藤先生は「今日は皆さんに、新しい言葉を教えます」と言って、黒板に「民主主義」と書かれた。初めて耳にした「民主主義」という言葉だった。翌春の進学受験を目指して組まれた補習授業では、津田の緑色の英語の教科書を“*This is a pen.*”の1年生から復習した。

町の中にアメリカの進駐軍の姿がよく見られるようになった。隣組の回覧を通してDDTを受けるよう進駐軍からの通達があった。当時はシャンプーがなかったのか、髪の毛にしみがついている人がいるとかで、私たちは所定の場所で殺虫剤のDDTの散布を頭上から浴びた。

DDTを浴びたあと自宅で私は妹とほろくで大豆を炒っていた。突然玄関の開く音が

して茶の間へ続く廊下をコツコツと歩く靴の音がした。2人はびっくりして戸が開くのを見ると、2人のアメリカ兵が土足のまま部屋に入ってきて何やら言ったが、私たちは驚きのあまりはだしのまま庭へ跳んで逃げた。母が近所のおばさんと立ち話をしている所に逃げていくと、いり豆をポリポリ食べながらアメリカ兵が近づいてきて、私たちの頭をさわろうとした。

母は娘たちの前に立ちはだかって、アメリカ兵の手を振り払ったりした。険しい顔の私たちに閉口したように、アメリカ兵はニヤニヤしながら去って行った。頭にさわろうとしたのはDDTを受けたかと思われていたらしかったのだが、言葉が理解できなかったのと、アメリカ兵に対する恐怖心で、あとになれば笑い話のような一幕だった。

私たちは万が一のために写真屋へ行き、一人ひとりカメラの前に立った。その写真で着ている工場支給の作業着のカーキ色は、軍服や戦車と同じで今でも嫌いな色だ。

ひめゆりの塔で悲惨な生涯を閉じた沖縄の女学生も私たちと同年であった。私たちは疑うこともなく一生懸命時局に従って生きた。

誰も経験することがないであろう15歳、16歳の日々が記録されることは喜ばしく思い、この企画に感謝している。

坂井英子

(終戦当時16歳 居住地…長野県木曾郡榑川村 現塩尻市)

今何をなすべきかを問いつつながら

日中戦争、太平洋戦争、そして敗戦、激動の中を生き抜いてきた自分は今何をなすべきかを自らに問いつつながら、学ぶべきかけがない青春の時を失った過去を掘り起こそうとしている。

小学校6年(昭和16年(1941年))12月8日、太平洋戦争が始まり、長く、暗く、あてどない苦しい時代へと入っていった。

私の生まれ育ったのは長野県木曾郡榑川村(現塩尻市)で、駅まで徒歩30分、中央線で1時間かけ木曾福島の女学校まで通学の毎日であった。

学生生活をそれなりに楽しんだのは入学後1年間であった。2年生になると厳しくなっていく戦争の大きなうねりの中に、否応なしに巻き込まれていった。

悪化する食糧事情に対応するための開墾動員で、木曾駒ヶ岳の麓の果樹園のリンゴの木を切り倒したり、ブドウの棚をこわしたり、ゴルフ場の芝をはがし耕すのであった。その時の力仕事の辛かったことは、言葉では言い表すことの出来ない重労働であった。今にし

て言えば、学校も男なみの仕事をよくやらせたものだと思う。

次に「木曾御岳」山麓の水力発電所開設の労働者のための飯場に、昼夜2交代で当番に当たったこと。想像もできないくらいの大竈で薪を焚くので、火加減がむずかしく煮えなかつたり焦げついたりで、炊事経験のなかつた身には、苦労は並大抵のものではなかつた。しかし、そうした中でもささやかな楽しみもあった。それはダムの近くの旅館の風呂にいくことで、先生も生徒も一緒に入浴し、連帯感みたいなものを味わったことである。また、直径2mもある竈の周りに皆で輪になつてのぼり、余熱の残っているうちに焦げついた御飯に醤油をかけ、握り飯を作つて食べたことである。その美味しかつたことはいまだに忘れられない。ここには食糧不足はなかつた。早番の時の寒い朝、眠い目をこすりながら外に出ると、凍りつくような星空のもとに山頂までカンテラの光が連なり、作業員が登っていくのがいまだに目に焼き付いている。

次に石川島芝浦タービン木曾工場へ、往復3時間かけ木曾の北から南まで通つた。帰りが遅い時は父が駅まで迎えに来てくれた。仕事は円形の鋼鉄に歯車を刻むのであるが、歯車の数を割り出す計算は難しかつた。当時としては唯一の数学の勉強であつた。汽車の中の時間が長かつたので、乗車する人々の変化を身をもつて感じた。それは軍人の移動と小

笠原の住人の疎開である。戦争も末期に近づいて東海道線が危険になり、中央線の混雑が目を追つてひどくなり、郵便車、貨物車、石炭の上に乗つた。外から見えない郵便車の中で、海軍の将校たちから、当時としては貴重なキャンディーやチョコレートなどをもつたことを思い出す。

女学校4年になり、学校に三菱電機中津川工場が疎開してきて、電動ミシンで電熱服を縫う事があつた。ミシンの踏み方の練習から始めた。世の中に布も糸も無い時にここだけは別であつた。最初は新しい材料を豊富に使い飛行服を縫い、その中に電線を縫い込んでいたが、そのうちに材料も不足しがちになり、弾丸の当たつた箇所が切れて血痕のついたものが多くなつてきた。それらを修理して箱に詰めて出すのであつた。戦闘機に乗つていて撃たれたのか、それがどのように回収されたのか、いまだ疑問である。このようにして学校が工場と化して、生徒以外の人々の出入りが多く荒れていった。しかし学校であるが故に、授業が短時間でも交代で行われたことは、ありがたいことであつた。その時読んだ『太平記』は今でも忘れられない。その夏の昭和20年(1945年)8月15日、ちょうど配属将校に軍事訓練の後の訓話を聞いていた時に、終戦の詔勅が下つたのである。その時は事実を認識することさえできず、ただ呆然としていたことと、その時の将校が腰の

軍刀を納めて悄然と帰って行く後ろ姿が印象的であった。

時は移り戦後70年を迎え、国の内外は今もお激動が続いている。民族の対立、宗教の混乱、経済格差と、これらに如何に立ち向かっていくか、どのような生き方をすべきかを問われている。今日一日を平和であれと祈るのである。86歳の今日までの事を振りかえりつつ。

八十路越ゆ今宵静かに菊の酒

英子

島 美喜子

(終戦当時16歳 居住地：東京都目黒区下目黒自宅)



昭和14年10歳 弟(成郎)と

終戦当時の年齢、学校のことなど

戦時中の昭和20年(1945年)3月、私は桜蔭高等女学校の4年で、本来は5年生で卒業するはずが、この年、急に5年生と4年生が同時に卒業することになった。終戦後の21年(1946年)4月に東京女子高等師範学校(現お茶の水女子大学)理科に進学する

までの1年間を、都立女子専門学校(前年度に創立された学校で数学科と理科の2学科のみ、後に都立大学に吸収された)に在籍することになった。新しい学校であったが、若い優秀な先生を講師に招いたりして、戦時中も戦後もまともに授業が行われたことは幸いであつた。

東京女高師の方は20年4月からの戦時中も8月以後21年3月に至る戦後も、全く授業が行われなかったようである。

終戦直前のこと

8月15日は偶々家にいて、母も不在であったので、一人で正午のラジオで終戦の放送を聞くことになったが、敗戦の悔しさより、明日をも知れなかった日々から漸く解放されるという思いが強かった。

戦中戦後のこと

昭和16年（1941年）12月、日米開戦の時、私は桜蔭高女の1年生で12歳であった。何のための戦争かということもよく分らないまま、戦争は次第に烈しくなり、3年生になると学校の授業は全く行われず、女子挺身隊として工場に動員される生活になった。亀



昭和16年12歳 桜蔭高等女学校入学

戸の鐘紡の紡績工場で軍服の布地を織る紡績女工、学校工場では軍靴の底革を膠で貼り合わせる作業等、学業とは全く無関係になり、工員のような生活であった。通勤電車の中で、数学の問題を解いたりして、気を紛らしたりしていた。

その内、戦争はますます烈しくなり東京も度々空襲を受けるようになった。3月10日、十万人の民間人が亡くなったとされる東京下町の大空襲のことも忘れられない。自宅の屋根の上から眺めると、下町方面の空が火災で真赤になっていたことを記憶している。私の住んでいた目黒区も度々焼夷弾の投下を受けるようになったが、当時16歳という幼さのせいか、あまり恐怖を感じることは少なかったように思う。中学生の弟と2人、屋根の上から焼夷弾が照明弾とともに落下してくる様子を花火のように眺め、風に流されるので家は大丈夫と思ったりした。しかし、ごく近所まで火災が迫ってきた時は輻射熱が凄まじく、被っていた防空頭巾が熱くなり、火の粉が落ちれば燃えそうな気配で、寒い時期ではあったが、水を被らねばならなかった。避難する場所としては、元競馬場の広い空き地が家からごく近くにあったことは、非常に幸いであった。焼夷弾による火災が烈しくなるにつれ、家の前の通りは荷車やリヤカーに様々な荷物を積んで避難する人々の列が絶え間なかった。火災が家のすぐ近くまで迫り、避難せざるを得ない状況になったことも一度だけあった。防空壕に、使っていない寝具まで入れ、蓋をし、土を被せて、待機したが、幸い、危ういところで類焼を免れた。ただ、跡始末は母と弟と3人で大変であった。空襲の際、父は直ちに勤め先の研究所に行かなければならないので、いつも不在であった。

昭和20年8月15日、終戦のラジオ放送を聞いた時、敗戦の悔しさより、明日をも知れなかった日々からやっと解放されるという感慨の方が強かった。だが、戦後の日常生活は食料の極度の不足、電気、ガス等が屢々止まる等、戦時中にも増して最悪の状況であった。

一面が焼野原となった東京の街の様子や焼跡の小屋で生活していた人々のことも忘れられない。銀行預金も封鎖され、とに角、焼け残った骨董品等の道具類や衣類等を売って、闇市で食料に代えるなりして暮らすより致し方のない時代であった。衣類等も殆ど手に入らない時代で、家を焼かれた人たちの生活は本当に大変であったと思う。

私は戦後の21年（1946年）4月、東京女子高等師範学校（現お茶の水女子大学）の理科に進学、初めて未来を夢見ることの出来るようになったことが、何よりの喜びであったと思う。ただ、戦後の復興は徐々に進んでいたが、生活の貧しさはかなり長く続いた。東京女高師卒業後、25年（1950年）4月、私は旧制度最後の東京文理科大学化学科に進学したが、大学も戦時中に供出したまま暖房設備はなく、冬にはオーヴァーを着たまま授業を受けたが、非常に寒かったことを記憶している。また、その当時は現在と異なり、女性の社会的地位は低く、化学科の学生も3学年を通じて女性は2名だけであった。28年（1953年）、当時3学年になると研究室に配属され、卒業研究を行うことになるが、そ

の頃から漸く研究に専心できるような雰囲気になっていったように思う。私は大学院に進み、その後も大学で、アメリカおよびイギリスへの留学も含め、40年余を研究（高分子物理化学）と学生の教育に過ごすことになった。

奥津成子

(終戦当時16歳 居住地：埼玉県秩父郡安戸村疎開先)

私の8月15日

私は昭和20年(1945年)8月15日は、埼玉県秩父郡安戸村に居た。

数か月前の3月11日の早朝、深川に住む遠縁の中年の夫婦が、命からがら炎の中をかくぐって、よく助かったなと思えるほど無残な姿で我が家に辿りついた。それを見た時、私は前夜の空襲がいかに凄まじいものであったかを、改めて感じた。

当時我が家は、東京の郊外と称された多摩川に近い田園調布から2駅目の大井町線の尾山台にあった。

開戦後間もなくの17年(1942年)、東京空襲の第一波かと思われる爆撃機が、帰りがけに落としていった焼夷弾が、多摩川べりのこの辺りにパラパラと落ち、我が家の座敷にも、不発弾と庭の立木の間に花火のようにちらちら燃えている散弾が落とされた。幸いにも座敷には誰も居らず、木の周りの火は火はたき(木製の大きなはたきのような物で、各家庭に消火用として備えてあった)で、難なく消していて、周辺にも大きな被害はなかった。20年から空襲が激しくなっても、警報のサイレンでたたき起こされて、冷たい防空壕

にもぐるその辛さはあっても、空襲そのものには、まだ恐怖感はあまりなかった。ただ壕に入ってもラジオの近況からの判断で穴から抜け出し、周辺や空を見回しはしていた。3月10日の夜も、庭から眺める下町と思える方の空は、真っ赤でその上空のB29の数の多さと、いつものように強大な戦艦のようなB29にカトンボのような特攻機が体当たりするが、敵機はゆらっともせず、ただ特攻機が地面に叩きつけられるように急降下して落ちていく光景に、胸を痛めるだけだった。

11日の朝の知人の「子どもがいなかったから助かった」との言葉は、弟はまだ6歳足らず父は3度目の応召中の母には、厳しいものだったと思う。

尾山台には、12年(1937年)、母の姉と隣りあって家を建て楽しく暮らしていたが、姉は夫が引退し岡山の郷里に前年に疎開をかねて移り、父は立川の陸軍航空燃料補給省が応召の任務地となったので、郊外の安全と思っていたこの地から疎開することを、母は決断したようだった。

東京都立桜町高等女学校の3年生を修了した私は、埼玉県立小川高等女学校の4年生として、20年の4月を迎えた。桜町高女は東條英機の別宅のすぐそばにあり、初代校長が時流に乗り軍国の女学校だった。当時の皇族や陸海軍大臣やら有名人が、見学にしばしば訪

れ、その度に極寒でも世田谷区の島の真ん中の、霜柱が3、4cmも立っている校庭で、裸足の分列行進をさせるといふ校風だった。中等学校生に学徒動員令が下される半年前のまだ2年生の夏休みからは、学校工場と称する教室で薬のレットル貼りをやらされ、3年生の5月正式の動員令が出ると、250人いた3年生は3つに分けられ、私たち150人は、多摩川べりの日本通信工業という会社に配属され、マイカコンデンサーというものを組み立てることとなった。



昭和19年15歳 通勤もこの服装だった

マイカとは雲母なのだが、その薄い4、5cmの長方形の雲母を重ね合わせてコンデンサーを作るのだが、悲しいことにマイカの薄板が粗悪品で、作り上げた製品は3分の1も完成品とは成らなかった。朝8時半から午後4時まで昼の約40分の休憩を除いて、私語は一切許されず、13、14歳の女学生が声を立てて笑うことすら許されない緊張しきった空気だった。ただ桜町の生徒は、工場とは別棟の校舎のような建物で独立して仕事をしていたことは、教師の目は届きすぎたが、良

い面もあったと思う。美人の同級生に憲兵が目をつけても、別棟には力が及ばなかった。このような状態で、翌年の3月末には同級生も3分の1は、疎開または疎開予定となり、こんな東京での生活ならどこへ転校しても同じこと、ただ夜中に寝たい、警報に脅かされたくない、それが私の疎開への一番の願いであった。

3月の末日、父が選んだ疎開地へ、家財を積んだ覆いかぶされたトラックの荷台に、母、弟と叔父たちと、やはり埼玉県の大河原村に疎開する母方の祖父とが、砂埃の舞う街道を空襲にもあわずなんとか行き着いた。それが秩父の安戸村の大きな菓子問屋、”小松や”だった。

祖父母の代から東京に住み、いわゆる田舎と称するものなかった我が家だが、この地は、父の任務先にこの家の長男が応召されており、高崎、八王子間を結ぶ八高線沿線の小川町から3、4kmのところ、八高線は父の任地の立川飛行場の一角の拝島を通っていたので、父としても全く縁のないところではなかった。それで、ここを家族の避難場所としたのだと思う。

安戸の疎開先、”小松や”は、一帯の大きな菓子問屋で、街道に面していたが、回りは低い山に囲まれ、現在は有名なこの辺りの小川町和紙を漉く音くらいが、人の動きを感じ

させるような山村で、あの恐怖の空襲のサイレンは、ただの1度も鳴らなかった。学校は東京から格好の疎開地のため、生徒数は倍近くになり、もちろん授業などはなく、大きな体育館で近隣の飛行機工場の製品の機体の一部を削ったりしていた。私の疎開は、要するに東京の電気工場から埼玉の飛行機工場に、未熟な女子工員が一人移動したということにすぎなかった。あまりにも生徒数が増え、学校としても収拾がつかず、生徒はなんとなくただジュラルミンの板に取り付いているだけのよう有様だった。厳しい規則尽くめの都立から来た私には、東京の様々な女学校のカラーを持った同級生との交友は、ほんの短い間ではあったが楽しかった。父上が当時の正金銀行の行員でドイツからのいわゆる帰国子女の北村さんという友は、帰国後東洋英和に転入し、修身の時間に教育勅語を言わされ、「朕思ふに吾が皇祖皇宗（こうそ、こうそう）国を始むること云々」というところを、「ちんおもうにわがこそこそ、と言っちゃって怒られたわ」と、けろりとして言った時、桜町だったらいかなる罰を下されたかと思ひながら、笑いあった。

疎開第一の私の願望の、夜中に警報が鳴らないということは達せられたものの、更なる安眠妨害は蚤の大群の襲来とは全く想像も出来なかった。布団が温まるにつれ耐え難い痒みが体を襲い、もがきながら睡魔が勝ってやっと寝入るといふ毎晩だった。DDTの存在などは、夢想も出来ず、蚤、しらみなど虫には特別に弱い日本の女の子には、敗戦間際の壮絶な戦いだった。

8月14日、明日は重大放送があるから各人家に待機してそれを聞くようにとの学校の指示により、私は母、弟、小松や“の御主人夫妻、使用人たちと、15日の正午階下のラジオの前に座っていた。上官の一家を預かった菓子屋としては、離れの客間の上下3部屋を私どもに提供していたが、この日は全員店先の大部屋に集まっていた。重大放送があるという知らせが前日からあり、山里の我々は様々な憶測はしてみたものの、結局は戦況は不利にはなってきたが、最後まで勝利を信じ戦い抜けという天皇の励ましの言葉くらいなのだろうと思っていた。

放送が始まり、天皇という人が、一本調子で何やら述べていたが、私をはじめそこに居た全員には、全く意味の分からない御託宣だった。敗戦の詔勅と解つたのは、数時間たって近隣の人々の情報からだだった。今でも時々あの日の放送がドラマなどで再現されることがあるが、性能の悪いラジオで、前もつてのインフォメーションもなかった国民のどれくらいが、あの放送を聞き取れたかと思う。ともかく戦争が終わったと知った時、私の中にあった最大のものは喜び、全く即物的な喜び。すなわち今晚から電気をつけられる、明る

い電気で蚤退治が出来るというものだった。

すぐには学校も始まらず、この後私が敗戦の混乱の中、行ったことは、アメリカ兵が来たら軍人の父はどうなるのか、職業軍人でもなく位も尉官ぐらいでどうなることもないとは、母も思っていたようだが、疎開地から近くにいた父の、今後の安否を確認するため、8月末日、切符の手配などはどのようにしたかはまったく覚えてはないが、敗戦の東京の街を通り抜け、父の宿泊していた立川の福生の民家へ母の代理で向かった。その家は立川一帯の陸軍の将校の宿舎の一つらしく、学徒出身の特攻隊員も数人いて、ひしひしと切迫した雰囲気を感じた。

敗戦後の敵国が進駐してくるほんの短い空白状態だった8月末日の東京と、日本陸軍の解体寸前のあるほんの一断面の空気を吸ったことは、私の生涯の中の決して忘れられない記憶の一つとして残っている。

父は無事10月除隊してきた。

東京の女学校に続々引き上げてゆく友達たちに取り残されないように、空襲もない、蚤もない東京の桜町に戻りたく、10月には母と弟は安戸からまだ引き上げなかったが、私は東京の中野の伯母の家に寄宿することになった。

蛇足ながら、明治38年生まれの民間人であった父が、昭和12年（1937年）の中国との開戦から20年（1945年）の敗戦の8年間、特別候補幹部生（兵の中から旧制中学校以上の学歴を保持する志願者を選抜し、兵科および各部の将校または下士官に登用するシステムで、大学の経済、法律を学んだ者は主計将校となった）であったため、どのくらい軍に召集されたか、軍歴をここに記すことによっては、あの戦いが物量も兵力もあらゆるものが開戦当時からいかに不足していたか、いかに無謀な戦いであったかが推察できる一助ともなれらばと思う。父は、陸軍少尉から8年間の間に大尉にまで昇進してしまった。



昭和16年12歳 父3度目の応召の日

軍歴

昭和4年(1929年)2月 幹部候補生として歩兵第1連隊入隊
11月 主計将校に任官除隊
昭和12年(1937年)9月28日 臨時召集(同年7月支那事変勃発)陸軍航空省勤務
昭和16年(1941年)2月5日 召集解除
7月18日 臨時召集 新京(中国東北地区満州国首都)の連隊勤務
昭和17年(1942年)10月10日 召集解除
昭和19年(1944年)10月29日 臨時召集立川陸軍航空省勤務
昭和20年(1945年)10月5日 召集解除

父は33歳より、17年から2年間を除き、終戦まで軍隊に召集されていた。この6年間の働き盛りの空白は、後の我が家には様々な負の影響をもたらした。

宮島茂子

(終戦当時13歳 居住地…長野市疎開先)

戦後70年というので、色々な思い出が書かれたり、語られたりします。私は自分の経験を大変なことと思っていましたが、それ以上の方が沢山いらっしゃるのを知りました。家族が全員無事だったことは幸運としか言いようがありません。

あと半年戦争が続いていたら、沖縄の次に宮崎に米軍が上陸し、同じような悲劇が起ったでしょう。7月1日までの宮崎市は、航空母艦が沖に近侍し、毎日のように機銃掃射に見舞われ、負傷者が赤江空港(現宮崎空港)から病院に運ばれていました。危険が迫ったので、長野市に再疎開することになり、宮崎から59時間かかって東京に帰り、1、2泊してすぐ長野市に行き、中学1年に編入、8月半ばまで、僅か10日間くらい通学、9月には東京で中学に編入、中学1年生で3つの学校に行ったことになりました。

不思議と皆が大変なので、自分が不幸だとは思いませんでした。戦争とはそういうものです。これから先、そういう事が起こらないよう祈ります。

野瀬久美子

(終戦当時12歳)

居住地：父の任地

朝鮮京城

現韓国ソウル市からの疎開先

教育の感化について思うこと

太平洋戦争が始まって、激しくなるにつれ、「鬼畜米英」という言葉が盛んに聞かれるようになり、戦果があがると派手に報道され、戦意高揚の雰囲気を感じ上げていた。米英を良く評価することなどは、当然もつてのほかで、「非国民」呼ばわりされた。そのような環境の中で、母は、キリスト教フレンド派の女学校の出身で、学生時代に米国人の先生から聖書や英会話や洋裁、洋風料理など習っており、先生方に強い敬愛の念をいつも抱いていたので、「米英の人たちが、そんなに悪いはずはありません」と述べており、「人に聞こえると危険だから、言わないように」と、周囲から注意をされていた。

母の心からの思いを、身近に聞いて育ったので、自分自身の中にも、戦争は憎いが、相手の国の人々まで憎む気持ちは起こらなかった。そのような環境にいたので、終戦を迎えた時には、ほっとしたのを覚えている。

けれども、戦地で身内を亡くしたり、空襲で家族が亡くなった方々の気持ちはどうだろうか。経験をしていないので、想像するのみでわからないが、自分が育った環境や受けた

教育の感化が、いかに大きいかを考えさせられている。

望月浪江

(終戦当時12歳 居住地…山梨県甲府市郊外疎開先)

地理、歴史の教科書を墨で塗りつぶした。その後、地歴の本を、小学校の校庭に持参し、焼却処分した。思い出すのも辛いことだった。

書物は大事にすること(畳の上に活字の物は置いてはいけない)、明治時代に医学書で学んで医者になった祖父に厳しく言われていた。

齊藤智恵

(終戦当時11歳 居住地…山形県東置賜郡宮内町自宅 現南陽市)

国民学校のこと

国民学校3、4、5年は、同じ先生が担任でした(女性)。非常に軍国主義的というか全体主義的な先生で、何かというと、並んで軍歌を歌わされました。私は背が高かったので、いつも前に出て手拭いを振る役でした。すぐに厳しく叱る先生で、ちょっとした事でも班や級全体の責任ということで叱られました。他の人たちはすぐ涙をこぼしていました。私は簡単には泣きませんでした。心の底に理不尽なことで叱られている思いがあったように思います。生意気な子供だったのでしょう。何かというと、非国民という言葉で叱られました。

当時4年生になると、臨海学校と称して夏休みに学年全員で海に行くことになっていましたが、私たちが4年になった時は5年以上に変わり、5年の時には戦局の悪化で取り止め、6年の夏に終戦の時を迎えたのです。

松根油のための勤労奉仕の他に、繊維を取るためということ、青麻という山などに自

生する植物を取って来ることになり、山に行ったものの少ししか集められず、級の中で一番束が小さく、誰が持って行ったのか分からないものの、これしか集められなかった人があると言われ、恥しい思いをしました。

また、稲刈り近頃の頃、農家も人手不足だったので、いなご取りもやらされました。家に持って帰って煎り、味付けをして食べた記憶があります。

当時「千人針」というのがあって、白いサラシの布に千の標がぼつぼつとついていて、一人一針赤い糸で玉結びを作って千人の女性が縫って、戦地に行く人に渡す習慣がありました。それを身につけていると鉄砲の弾よけになるといって。迷信もいいところですね。ただし、虎は千里を行って千里を帰るといので、寅年生まれの人には自分の年の数だけ縫えるということで、私の母は寅年生まれ、随分大勢の人から頼まれていました。小学生も縫ったのです。

叔父のこと

戦争中は、家族は祖母、父母と私たち姉弟4人、それに父方の伯母と従妹1人、同じく叔母と従兄弟2人、父方の叔父の妻と従弟2人、使用人女性1人、計16人でした。父の姉

妹弟は仙台、東京、西宮に住んでいたもので、戦況が悪化した時点で伯叔母たちと子供は全員疎開して来ていて、子供は私より1歳年上の従兄を頭に9人おりました。

当時、父の末弟はまだ早稲田大学の学生でしたが、戦況が悪化するにつれ、すでに徴兵検査を済ませた文系の学生は召集されました。—いわゆる学徒動員—叔父もその一人でした。祖父を病気で早くに亡くし父親の顔を知らないで育った弟を、私の父は親代わりで育てたせいもあって、祖母共々非常に可愛がっていたのです。私もその叔父には大変可愛がってもらい、帰省するときはいつもおままごと道具などをお土産に買って来てくれたことを思い出します。

召集された叔父は幹部候補生として少尉に任官、南方戦線に送られました。初めの頃は行った先々から葉書が届いていましたが、それも途絶え、ニューギニア、ラバウル方面に送られたということが辛うじて伝わってきました。その後は情報は全く入らず、昭和19年（1944年）、戦死の公報が入ったものの、祖母も父もどうしても信じられなかったようです。

戦後になって遺骨を受け取りに来るようにとの知らせが入り、父は当時女学校に入っていた私を伴って、近くの町の大きなお寺に向き、同じように集まった大勢の人たちと一

緒に合同慰霊祭に臨み、そこで白木のお骨箱を渡され、私がそれを首から下げて帰宅いたしました。箱はとても軽く開けて見ると、中には戦死した場所の石だという説明の紙切れと一緒に石が1個入っていただけでした。

父も祖母も諦めきれないようでしたが、それで漸くお葬式をする気になって、わざわざ本山からお坊さんに来ていただきお葬式をいたしました。

でも、父はどうしても諦めきれなかったようで、確かラバウル会といったと思いますが、同じように肉親をニューギニアで亡くした人たちの集まりに出席していました。

たまたま私のすぐ下の弟が商社に勤めていて、オーストラリアのパースに駐在していたのを幸いに、昭和54年（1979年）、父母、弟も一緒にニューギニアのポートモレスビーからまたヘリコプターに乗って、叔父の終焉の地といわれているアイタベという所を訪れました。

弟の話によりますと、小さな慰霊碑が草に覆われていたのを、現地の方たちにお願ひして綺麗にし、そこに日本から持って行ったお酒やその他のお供えを捧げてお詣りし、そこで漸く父の戦後が終わったと弟は感じたとのことでした。

そこから眺めると空港のあるポートモレスビーは遙か彼方、ジャングルの向こうで、と

ても攻めることなど不可能な場所だったそうです。これでは全滅するのは当然で、内地にいて現状も知らない机上の作戦を立てた上層の人たちは、何を思っていたのかとあきれたと話していました。当然兵站線は伸び切っていて、制海権は全くない状態で、食料は現地で調達せよなどといっていたのですから、派遣された人たちは毎日が飢餓との戦いだったのでしょうか。

ですから、父は生前靖国神社に叔父が祀られているなどとは考えたくもなかったようです。

これは余談ですが、偶々夫が知り合った方が、ニューギニアから生還出来た数少ない生き残りの一人でいらしたそうで、食べられそうなものは何でも食べた、みみずも食べたが、それが美味しかったと話されたそうです。

以上長々と書いてしまいましたが、現在の安倍首相はじめ戦争のなにかも知らずにことを進めていく人たちに、戦争の悲惨さをもっときちんと把握してもらいたいと、切に思います。

青木怜子

(終戦当時10歳 居住地…神奈川県藤沢市自宅)

少女の時代―戦争に翻弄されて

私が小学校に入学したのは昭和16年(1941年)。その年の暮れ、日本は太平洋戦争に突入した。すでに開戦以前から、日本では、あたかも戦を予告するかのようになり、挙国一致体制が布かれ、教育の場でも、全国のすべての小学校がその年度を期し、国民学校と呼ばれるようになっていた。国家主義の風潮は一段と強まり、日本人の生活もまた、怒涛の渦に呑み込まれるかのように、平和時から様相を一変した。やがて国民学校5年生の時、私たちは終戦を迎える。翻って見れば、私たちの小学生時代は、そのほとんどの年数を戦時下で過ごしていたことになる。

国民学校に呼び名を変えた小学校では、その年次から、時代を象徴するように、教科書をも刷新した。1年前の年までは、「サイタ、サイタ、サイタ、サクラガ サイタ」の言葉で教科書は始まっていた。「サイタ、サイタ」は、「ハナ、ハト、マメ」に次いで、長いこと、日本の教科書の定番として出てくる常套句であった。美しく、長閑な風景の中、奥ゆかしい日本のイメージを描き出していた。

これに対し、新しい教科書の冒頭は、「アカイ、アカイ、アサヒガ アカイ」と声高な響きで呼びかけてくる。桜のイメージよりも遙かに強烈で、躍進的で、挑戦的でさえあった。しかも、穿った説をとれば、日の出は全国津々浦々、変わることなく共通したイメージを宿している。

その点、桜は列島の地域によって異なる気象環境から、4月入学に合わせて開花するのは東京など関東一円のことであり、九州など関東以南の地区では、すでに桜は散り始めている。一方、北海道などでは、まだ固い蕾の花が、開くにはほど遠い。「咲いた、咲いた、さくらが咲いた」は、実は地方によっては、「散った、散った、さくらが散った」であり、あるいは「咲かない、咲かない、さくらが咲かない」となったりする。それでは、挙国一致体制の意気が挙がらないのではないか、というのであった。

新しい教科書では、「アカイ、アカイ、アサヒガ アカイ」に次いで、「コマイヌサン、アツ、コマイヌサン、ウヌ」と進み、さらに「ススメ、ススメ、ヘイタイサン ススメ」と続いていく。だれが書いたのだろう。語呂もよく、時世を描くに、うってつけの名文句であったかもしれない。

教科書と並んで、通信簿の表記も変わっていった。1年前の学年では、甲乙丙が成績の

順位を表したが、私たちの学年からは、優良可がその表記となる。一方で、兵役の志願者が区分される評価の基準は、甲種合格、乙種合格であったから、もしかして、このことに限っては、軍事と教育は一線を画すべく、学校での成績評価は、優、良、可と定められたのであろうか。



昭和14年5歳 ロス・アンジェ
ルス自宅前にて メリーちゃん

私が入学した小学校は、神奈川県片瀬にある湘南百合学園の前身、乃木高等女学校付属初等科であった。校名の由来は、元陸軍司令官で学習院長であった乃木将軍が、毎年、学習院の生徒を連れて水泳の夏季訓練を行っていたことに関わりがあった。学校が建てられた土地は、もともとは、乃木希典将軍と親交のあった土地の有力者山本信次郎氏がシャルトル聖パウロ修道会に寄贈したのだが、乃木将軍もまた、山本邸を夏の間の宿舎としていた。そのことから、乃木ゆかりの学校として、その名を留めることになったという。

そういえば、片瀬には、乃木大将の銅像が二つあり、一つは片瀬海岸を望むロータリーに、今一つは、私たちの学校正門脇にあった。海岸沿いに立つ立像に対し、正門脇の乃木像

は、椅子に座した青銅像であったが、いずれも、戦後間もなく撤去された。学校正門わきの銅像の方は、やがてルルドのマリア像と入れ替わり、校名もまたその姉妹校と同じく百合学園と改名された。

したがって、私たちが入学した学校は、本来はシャルトル聖パウロ会が経営する少人数教育のミッションスクールであった。1年次の生徒数は1クラスがわずか30名。その半数は付属の幼稚園から進学し、残る新入生は15名であった。礼儀や言葉遣いなど、躰の厳しい学校ではあったが、小さなクラスの雰囲気は決して暗いものでも陰湿なものでもなかった。それは、ナシヨナリズムの進攻に押され、教育上の統制が始まっていた時代であったとはいえ、戦争勃発後当面は、シンガポール陥落など、日本では戦勝ムードが漂い、やがて来る激しい戦闘はいまだ対岸のものであったからである。

私は、入学時には比較的体が弱く、3学期になると、ほとんど学校に行くこともなく家で休んでいた。私は正直言って、新しい学校に簡単には馴染めないところがあった。たとえ登校しても、昼時になると腹痛や頭痛を覚え、作ってもらったお弁当を手に、早引けをすることもしばしばあった。家に帰ればケロリと治ってしまうので、「ママは何のために、毎日あなたにお弁当を作るの？」とよく母に笑われた。

理由は体質上のこともあったが、しいて言えば、私は、入学する1年ほど前にアメリカから帰国したばかりで、まだ日本の社会に十分に適応できていないところがあった。その上、幼児期に外地にあったため、同輩の友達がなく、いわば、大人の中で育った子供は、どのようにして同輩の友達と付き合っているのかわからないこともあった。せめて、他人と違わぬよう、友達に気に入られ、いい子になりたいという願望を潜めていたかもしれない。

それにもかかわらず、入学時から、机を並べてきた友人たちは、皆親切であった。柱の陰でそっと泣いている私を見て、友達の一人は、手にしたダンゴ虫を私に見せ、「ほら、面白いでしょう、クルクルって縮まるのよ」と慰めてくれた。時にはそれぞれの家に呼んだり呼ばれたりするなど、私たちは学校だけではなく、放課後も遊ぶほどの仲であった。

持ち前の素直さと人なつっこさから、いじけて殻に閉じこもることはなく、友達とはよく遊んだ。しかし、戦時下、緊迫した空気が国中に漂う時代、「敵国からの帰国子女」は、大人からは訝しげに見られることもあった。担任の教師は、私のお辞儀一つ、座る姿勢一つ、日本的な行儀に適っていないと、注意する。だが我が家は、躰については人一倍厳しい方であったので、母親からすれば、娘への注意は心外であったかもしれない。それでも注意をされないように娘を特訓したが、担任の教師からは、「お嬢様はアメリカ帰りだから、

それなりの習慣が抜けていない」のだと、二言目には言われたという。

それでも、臍に落ちない注意には、母は毅然として本意を主張し、それにより娘の名誉が護られることもあった。実のところ、「アメリカ帰り」は私ではなく、はつきりものを言う母であったのかもしれない。

私も、自分の一挙一動が「非国民」でないよう、他から浮き立つことがないように、神経を研ぎ澄ませていたところもあった。海軍の兵学校・江田島の生徒が凛々しい制服姿で写



商業施設一つない戦前の鵜沼の海
母、祖母、兄と(昭和16年 7歳)

るグラビアを見つけては、雑誌のページを切り抜き、江田島の生徒を弟に持つ教師に贈った。自分でもいやらしいほど、迎合的になっていた。教師にしても、なぜ、私から切り抜きを渡されたのか、よくは理解がつかなかったかもしれない。却ってますます不思議な行動の子ととられたかもしれない。

小学校2年くらいまでは、シンガポール陥落など、戦争当初に伝えられたような勝ちムードが漂い、小さな町でも祝賀の提灯行列があつて、私の気持ちも華やいだ。しかし、

子供たちの遊びは、もはやままごと遊びというよりも、陣取り合戦など、戸外で遊ぶことが多く、読書以外は、余り、室内に籠ることもなくなった。

私は、1年生を終えた春休みに扁桃腺やアデノイド除去の手術を受け、見違えるほど元気になった。さらに3年生の時には別の手術を受け、一段と逞しく育っていった。友達のお父さんが軍隊に徴用され、その友達と一緒にあって、墨でわら半紙に「鬼畜米英」と書いては破り捨て、「銃後の守り」を果たしていた。

「欲しがりません、勝つまでは」と愛国少年少女の身構えをも身に着けた。偶々、兵隊さんの行列と行き交えば、皆で、「兵隊さん、ありがとう。兵隊さんのおかげです」とエールを贈った。町には、軍艦マーチや「見よ、落下傘」の歌などが溢れていた。もはや「敵国からの帰国子女」は、一人目立つこともなく、皆と一丸になって、行動する。危機感からか、クラスもどことなく一体化し、皆、一蓮托生の運命を携えて、知らず知らずのうちに無邪気な「拳国一致体制」をとっていた。

学校では、毎月、開戦の日となる八日には、いくつかの義務が課せられていた。一つは、近くの諏訪神社に学校から清掃奉仕で出向くことであった。また、別の義務は、同じく毎月八日には、儉約のシンボルとして、梅干し弁当を持っていくことであった。梅干し1個

以外、何のおかずを持っていくことも許されなかった。しかし、梅干しが手に入らない者もいて、ある日、海苔を小型に切ったただ1枚だけをご飯の上に敷いて持ってきた友達があった。だが、海苔は梅干しでなかったため、お弁当を頂く許可がなかなか下りず、彼女は泣き出した。梅干し弁当は、儉約のためなのだから、それに代わるお海苔1枚がどうして悪いのか、私には理屈を捏ねなくなるくらい、納得がいかなかった。だが、すでに一人浮き立つことを禁足してきた私に、友人のための抗議はできなかった。

教室では、綴り方学習の一環として、戦地の兵士を慰労するため、激励の手紙を書くことになった。私は、出征したばかりで、年の離れた従兄に手紙を書いた。家族の様子やこちらの近況などを懸命に記し、当方の状況を伝える手紙であった。だが、どこでチェックされたのかは忘れたが、戦地の兵隊さんに故郷を思い出させる手紙を書いてはならないと書き直しを命じられた。それならば、と、「お兄ちゃん、お元気ですか。こちらも皆元気です。それでは、お元気で」といったような、子供ながら無意味だなあと思うような手紙を送った。

算数の授業では、轟沈ゲームというのが教師の指導で行われ、そろばんの正解を競いながら、間違った者は、敵にやられたかのような悔しさを表して床にしゃがんでいく。その人は、敵の魚雷に触れ、撃墜されたことになっていた。

やがて戦況が厳しくなると、私たちは、制服の上着は着用していたが、スカートをもんぺズボンに穿き替え、防空頭巾を、ランドセル替わりの袋とともに肩に背負って登校するようになった。さらに肩には、水筒、そして炒り豆や炒り米を入れた袋を櫻掛けにし、非常食の備えを万全にした。

一方で、その前後の時期には、クラスにとって、大きな変化が生じるようになった。それは、東京など都市部で戦火が広がることを恐れ、大勢の疎開児童が、クラスに編入されるようになったからである。

東京の姉妹校からは集団疎開として、何人かが仮ごしらえの寄宿舎に寝泊まりした。そのほか、個人で疎開する児童も日毎に多くなってきた。30人単位の小さなクラスは生徒数が膨れ上がり、1組しかなかったクラスは2組編成になり、見知らぬ友人と机を並べるようになった。国民学校1期生の私たちこそ、世に言う学童疎開の世代だったのである。

それらの友人は、ある時は、編入したかと思うと、またたく間に再度転校し、中には、満州などに渡った友人もいた。僅かの期間でも、別れは寂しく、子供心にして、日々入れ替わる友達とは、一期一会の知り合いのだと、はかなさを味わうようになっていた。

そのような時、転校生の中に、四谷の双葉学園から転校してこられた正田美智子さまの

姿があった。私たちの学校では、友人のことを基本的には苗字で呼んで「さん」付けにしたが、名前を呼ぶ時には、「さま」呼びをした。つまり、正田さんは正田さんで、美智子さまは、美智子さまとなる。

毛先がカールしたショートヘアで、愛くるしい美智子さまは、なんとなく都会風の垢抜けしたイメージで、品よく、センスの良さを思わせた。名前を呼ばれば、はっきりとしたお返事が返ってくる。その上、運動場で駆けっこ競技をすれば、抜群の速さで、走り抜ける。ライバルとなった他の友人が、どうしても負けたくなかったからいつも真剣勝負だったと、当目を回顧する。

私はもともと運動神経が鈍く、しかも幼児期から激しい運動を避けてきたこともあってか、駆けっこには全く興味がなかった。そのため、その「劇的な」激戦ぶりすら記憶していない。しかし、一方で、偶々、住まいが近かったことから、二人は学校から帰ってから一緒に遊ぶ機会に恵まれた。

その頃の湘南地方は、近くに平塚など主要な軍事基地や、京浜地方などの重工業地帯があったが、それら地域への激しい空襲は、比較的遅く、戦時末期になってからのことであつた。したがって、昭和18年（1943年）から19年（1944年）冬にかけての頃は、

まだ、長閑な日々を過ごしていた。しかも、当時は別荘地帯の趣が残されていた私たちの近隣には、人通りも少なく、自転車すら疾駆することはなかった。

そのような路地の一郭に陣取っては、私たちは「花いちもんめ」をして遊んだ。横列を組め、手を繋いで正面に対峙する相手方の列に挑みかけてジャンケンをする。「勝つてうれしい、花いちもんめ」「負けて悔しい、花いちもんめ」と歌っては、「あの子がほしい、花いちもんめ」と自分の列に取り込みたい子を指名し、列のリーダー同士がジャンケンをする。組を分けて陣営を作るとすれば、少なくとも全体として4人以上、複数いなければ、遊びはなりたたない。だが、私たち二人は、ほかに誰がいたか、余り覚えていない。「二人だけで遊んだはずは、ないのよね」と今でも皇后さまは笑いを堪えて仰言ることがある。おそらく、近所の級友たちと一緒に遊んだのであろう。結構夕方遅くまで遊んでいた。

また、ある時は、家の中での遊びもした。当時、少女たちに絶大の人気があった漫画作家、松本克治の「くるみちゃん」は、本のページを飾るだけでなく、写し絵になっていた。シールを水にうつすらとつけ、ガラスに貼りつけて、台紙だけをそつと剥がす。窓に貼られたくるみちゃんは、ガラスの透明度に一段と魅力を発揮した。

正田家の洋風のお住まいにお邪魔し、食堂にあるガラス窓に、私たち二人はシールを貼って目いっぱい楽しんだ。午後の日差しが届く、暖かい雰囲気のある食堂であった。それは戦時中とは思えないような、穏やかで夢のような時間でもあった。

だが、そうした日は、そう長くは続かなかった。次第に湘南地方でも戦火が及ぶ危機が日毎に近づき、落ち着かない日々となった。ある夕方、突然、美智子さまは我が家を訪ねられ、「私、あしたお引越りするの。いつも一緒に遊んでくださってありがとう」と仰言つて、小さな箱を手渡された。後でそつと開けてみると、二人で窓いっぱい貼った「くるみちゃん」のシールが詰まっていた。共に過ごした時間は、このシールに託されている。でも、シールよりも心に詰まった思い出の方が、はるかにぎゅうぎゅう詰めであったかもしれない。春になると、東京大空襲に次いで、京浜地方、平塚の町と、爆撃による戦火が私たちの近くに及んできた。学校に行ったかと思うと、突如、警戒警報が、ついで空襲警報が鳴り、サイレンに促されるかのように、私たちは防空頭巾をかぶり、下校した。行けるところまで、一緒に列を組み、やがてそれぞれの家へと向かった。

時には、その下校時、急降下する敵機に狙われ、広い三井家が持つ馬の広場のある茂みに駆け込んだ。馬といっても、1頭しかいなかったが、茂みに囲まれた広場には、長い窪みができている、私たちはそこを「馬の防空壕」と呼んでいた。馬はすでに軍馬として徴用

されていたのか、その日、そこにはいなかった。私たちはその窪みに身を低め、敵機の去るのを待った。何事もなかったが、翌日、聞くところでは、「馬の防空壕」の近くに焼夷弾の不発弾が落ちていたという。戦争は、軍事工場や軍事施設だけではなく、今や民家にも及んでいた。

一方、一般家庭では、次第に食料品が枯渇し、飢えを凌ぐため、家庭菜園や、農家への買い出しがしきりと行われるようになった。我が家でも、ご他聞に漏れず、庭の片隅に畑を作り、サツマイモやカボチャを植えた。庭の奥には、小さな沼地があり、そこでは、サトイモを栽培した。里芋の葉は、手で頭にかざせば、雨よけになるほど大きかった。

父は外地から帰るなり、病で臥せていたため、食料品の買い出しなどは、すべて母の肩に掛かっていた。ある日、夕闇も迫り、日も落ちた頃、サイレンが鳴り、敵機来襲が告げられた。だが、買い出しに出かけた母はまだ戻って来ない。結局は、その日、電車も止まり、母は農家の離れを借りて一泊したことが後でわかったが、近くの平塚辺りの空が明々と染まる中、父と二人、帰宅しない母を待った不安な一夜は、今も脳裏を離れない。

戦争が悪化するなか、私たち生徒は、防火のため、海岸から学校までリレー状に列を組んで砂を運んだ。だが、やがて、その学校には、近くに兵営する陸軍の依頼で、大きな木

箱が数えられないほど、運びこまれ、講堂代わりの雨天体操場の床を埋め尽くした。木箱は優に3段くらいが積み上げられていただろうか。聞く話では、缶詰を入れた木箱だという。生徒たちは、始業式など特別な集会がある時には、その木箱の段の上に座布団を敷いて坐った。エピソードにもならないようなエピソードとしては、その膨大な缶詰の木箱が、終戦とともに、あつという間に、説明もなく、学校から運び出され、どこかに消えてしまったということであった。

一体、戦争は何だったのだろうか。戦争が終わっても、私たちは体制が変わったとだけ説明され、今後は平和に生きるのだと、言われた。何故、平和なのか、なぜ、戦争はいけないかを説明されることなく、結局、命の尊さをも教わることなくして、戦後時代が始まった。読んではいけない教科書の部分部分に、墨を塗り、それがGHQのお達しだと言われた。例えば、かつての軍部のお達しがGHQのお達しに代わっただけであった。

戦後8年して、私たち世代は高校を卒業する。かつて、国民学校1年生の1期生であった私たち世代は、中学に入る時には、新制中学校1年の1期生であった。墨を塗って急場をしのぎ、制度を改めて実験台となる。好むと好まざるとに関わらず、私たちの世代の命運は、教育改革の先鋒を旗頭となって進むことであった。そして、これまた新しく敷かれ

た新制大学制度の下、当時の趨勢から言えば女性としては少数派であった大学進学の道を、自ら選び、進んでいった。

昭和28年（1953年）4月、大学に入ってからまだ2、3日も経たなかったある日のこと、新入生として、場慣れない大学の廊下を歩いていると、思いもかけない出来事に遭遇した。廊下を繋ぐコネクションのドアを開けた時、目先のもう一つ先の扉が開き、どこかで見知った人の気配がこちらに向かって動くのを見た。



1995年IFUW横浜大会にご臨席の皇后陛下
右は当時のIFUW会長チトラ・ゴーシュ 左が筆者

その出会いは一瞬であった。それは、あの「くるみちゃん」のシールを手渡していただいて以来、一度も顔を合わせることもなかった正田美智子さまとの再会であった。どちらともなく、「あっ」と思わず息を呑み、驚きのまま、一瞬立ち尽くした。「まあ、また、お会いできたのね」と、これまた、どちらともなく声をあげて、お互いの存在を確かめ合った。無論、8年前、よもや同じ大学の門をくぐることなど、予想もしなかった再会であった。

戦争が悍ましい悲劇と、二度と味わいたくないドラマを展開する中で、私にとって希少な幸せは、一期一会の友を得たこと、それに加え、その一期一会が一度で終わらなかったことの奇遇である。やがてその奇遇が更なる奇遇を生み、私が大学女性協会会長であった1995年のIFUW横浜大会に、かつての「写し絵の友」は、皇后さまとしてご臨席くださることになった。奇遇の友と、ともに世界平和を願い、女性の個の確立とその尊厳を願うという同じ目的意識を分かち合いながら、同じ国際会議の場に臨める幸せは信じ難いほどの賜物であった。

その皇后さまが、今、陛下とともに、戦争による犠牲者への追悼と慰霊の旅を続けられている。私たちもまた、戦争を体験したものとして、等しく平和を切望し、二度と、人の命を危険に晒す戦争に加味する場には、臨みたくないとの決意を新たにしたい。それこそが、この「終戦70年の特集号」に寄せる、私自身の思いでもある。

児林英子

(終戦当時10歳 居住地：広島県比婆郡庄原町疎開先)

昭和二十年 夏

広島市の東のはずれ向洋にも、戦争の足音が聞こえるようになりました。

小学校児童は登下校の際、隊列を組み上級生の号令で統率されて学校へ通いました。校門が近づくとき「歩調とれ！頭（かしら）右！」といわれた声が今も耳に残っています。2階の教室に上がると、窓から建物疎開の様子を眺めました。爆撃された時、建物が類焼するのを防ぐため、予め家を壊して、消火のために道を広くしておくのです。何人もの大人が柱に綱をかけて建物を引っ張り倒すのです。土煙をあげて立派な家が壊されていきました。「東京の方では、子供が親と離されて奥地へ送られて行くんじゃないかって、可哀相ね」という噂が聞かれるようになり、戦時色が一段と強くなりました。

昭和20年（1945年）4月、広島市立青崎国民小学校も、3年以上の学童は疎開することになりました。集団疎開、縁故疎開、残留組と3班に別れました。4年生になったばかりの私の場合、「それが国策であるなら」という両親の意向で、集団疎開することになりました。



昭和20年10歳 みんな胸に名札を付けて

行先は広島県と島根県の県境、中国山脈の麓、広島県比婆郡庄原町です。広島駅までは親や知人など大勢の人が見送りに来てくれました。兄弟のない私には、友達と一緒に遠足に行くような気分です。むしろ「わくわく」していた記憶があります。しかし、「ガタン」と汽車が動き出した途端、空気が一変して「ワーン」という号泣の渦と化したというのが、友人の記憶です。送り出した親の心情は如何ばかりであったかと慮られます。乗った汽車は、牛馬を運ぶ貨物列車で、莫塵ではなく筵を敷いた上に座らされて運ばれて行きました。今なら広島から50分もあれば行ける距離を、3時間以上かかって揺られて行きました。

宿泊先は庄原に何か寺かある寺の1つ、浄土真宗西本願寺派西楽寺です。本堂を紐で仕切って蚊帳をつつて寝ていました。疎開児童は現地の小学校のクラスに何人かずづ分かれて編入されました。私の担任は現地の先生で、疎開児童を大切にしてください、「残って採点の手伝いをしてください」と言っていて、実は手作りの食物を食べさせてくださいました。登校は、集団で整列して行きました。列を離れ、

先生の検閲をのがれて、親へのハガキを投函したものでした。その頃、父から来たハガキに、「何事も天皇陛下の御為、勝つまでは頑張りましょう」と書いてあったと記憶しています。

疎開といえは思い起される言葉は、「空腹」と「飢餓感」です。はじめは白いご飯だったものが大豆や芋が混ざるようになり、おしまい頃は、満州（中国東北部）から来たのか、コーリヤン（中国産モロコシ）ばかりが主食になりました。おかずに鱸の湯引きが出て、これは御馳走だったのかも知れませんが、食べたことのない物で、怖くて食べられませんでした。親元から送られてくる「ごま塩」の胡麻、お手玉に入っている煎った大豆は、飢えを凌ぐ最高の慰めでした。和尚さんも子供たちがお経を替え歌にして「御飯頂戴弥陀尊」と歌うものですから、綺麗に苔むした庭を潰して、茄子や胡瓜を作って食べさせてくださいました。

ある日地元の子がチュウインガム（当時はそんな言葉はありませんでした）のような白いものをくちやくちや噛んでいました。「それ、なあに？」と聞くと、「松脂（まつやに）」という答え。琥珀色の松脂を噛み続けると、脱色して白くなるのです。教えられるままに松脂を噛んでみました。苦くて噛めたものではありません。しかし、あの「白い物」が欲しい。それで地元の青っ漬を垂らした子と交渉して、少し譲ってもらうことにしました。

先生にも友達にも内緒で「河原の藪の蔭で〇〇時に」と約束して、宝物の「ぬり絵」と交換してもらいました。

その頃2、3人のおかあさんたちと一緒に、母が面会に来てくれました。背負いきれないほどの小貝（広島では浅蜷のこと）をおみやげに。その夜はそれぞれの子供を抱いて、一晚泊まっていきました。あとで聞いた話ですが、蚤や虱をお返しに貰って、帰ってから大騒ぎになったそうです。

当時、蚤や虱はいつも私どものまわりについて、朝礼の時「前へならえ」という号令で手をあげてふと見ると、前の女の子のセーラー服の襟に虱が這っていることがありましたが、どうすることもできませんでした。その頃、DDTなどはありません。退治するには、煮沸消毒しかなかったのです。それで、全員の着ているものを、五右衛門風呂で煮るのです。その結果、みんなの服やシャツの色が出て、着物全部が霞がかかったような色に変わりました。そういう服を着せられて、子供ながら哀れな気がしたものです。

戦況が激しくなったことは、白い布に包まれて帰ってくる遺骨が、私どもが寝ている本堂のお仏壇の前に積み上げられ、その数が日毎に増えていくことで想像できました。小学校は野戦病院となり、私どもはお寺で、3年生から6年生まで混成で、寺子屋さながらの

授業をうけました。

8月6日夕刻、埃で真っ黒になった人が赤チン（マーキュロクロム・赤いヨードチンキ）や黄色い薬を塗られて、お化けのように手をぶらんとさせて歩いて来ました。

翌日教頭先生に招集されました。教頭先生のお話です。

「広島に新型の爆弾が落とされました。市の中心部の人たちは皆死んだそうです。あなたがたの親も死んだものと思いなさい」「親は居なくなったのだから、今日からお寺の和尚さんを、おとうさん“と呼びなさい”とも。

「死」が何であるか直面したことも考えたこともなかった私には、現実のこととは考えられませんでした。

8月15日、「玉音放送があるから」と、庫裏と本堂を繋ぐ板張りの廊下に座らせられました。放送は、「ザーザー」という雑音で、聞き取れませんでした。暫くすると先生が泣き出されて、「日本は負けたのよ」と言われました。虚脱感だけが残りました。

終戦40年目の夏、母と「庄原へお礼に行く？」ということになり、2人で出かけました。本堂も、玉音放送を聞いたあの「廊下」も、何事もなかったかのように静かな佇まいを見せていました。

辻英子

（終戦当時9歳

居住地・父の任地

北朝鮮咸鏡南道元山府徳源

トクゲン

現トクワオン

『一つの星とともに』

一九四六年、それは悲惨な戦いが幕を閉じた後だった。遠い異国の山間の道を幾百里、北鮮から南鮮へと、幼い子等を背負い、胸に抱いておくりとどけた二人の日
本人牧師。

「教会とともに運命を……」の一言を残して彼等は、再びすでに敵の手中にあった同じ道を引き返して行った。緑の谷間の赤いレンガ造りの修道院、それが彼らの住処だった。私はときどき、平和な日々ドイツ人牧師たちの往来するその場に遊んだ。

人はだれもが、こちらの岸から、彼の岸辺へと渡してくださいと願いつつ生きている。が、誰もがその渡守であるとは限らない。この幼い日の思い出の一こまは、今、ますます確かな言伝となってこだましてき、燃立つ浄火で己が身をやきつくされるような思いにかられる。

これは、拙書（有斐閣 1962年）の一節である。この「二人の日本人牧師」とは紙上インタビューに述べた（トウマ先生とその弟子）のことである。有斐閣の会長・江草四郎氏が、「本社80年の歴史のなかで、文学書を刊行するのは、はじめて…」と言いながら刊行してくださった。

帰国後しばらくは、元山松涛園に広がる白砂青松と日本海の青い海の風景を何度か夢に見たけれど、いつしか敗戦までの記憶は半世紀以上も止まったままであった。これまで語ったこともない体験を伝えようにも10歳までのおぼろな記憶しかなく、裏付けができなかったためでもある。

ところが数日前ウェブ検索をしていると、はからずもアーカイブ「徳源大修道院」の「北朝鮮三十八殉教者」の項目が飛び込んできた。投稿日は2014年8月18日で、「以下の三十八人の殉教者は2009年12月28日に教区の列福調査が開始された」とあり、戦後70年にしてはじめて垣間見た報告なのである。

これによると、徳源大修道院(Roth Lucius ベネディクト会司祭 徳源修道院長 ドイツ・バヴァリア生まれ 1950年平壤で殺害)・28殉教者(うちドイツ22、朝鮮5、オーストリア1)、元山3(朝鮮2(うち修道女1)・ドイツ1(修道女)、平壤2(朝鮮)、感興2(朝鮮)、

長連1(朝鮮)、延吉1(朝鮮)、海州1(中国)で、いずれも(獄死)あるいは(殺害)とある。

大聖ベネディクトは5世紀の末イタリア中部のヌルシアに生まれた。ドイツ・バヴァリアの聖オテリエン修道院の修道士たちにより、1909年に韓国最初の修道院がソウルに設立された。1927年に、北朝鮮全域と当時の満州の大部分に及ぶ広範囲な宣教区を活動の拠点とするため、元山近郊の徳源に居を移した。本修道院は1949年に強制的に閉鎖され、ドイツ人の修道士・修道女は、監獄、強制収容所に、韓国人の司祭たちはすべて処刑あるいは平壤への死の行進で亡くなり、わずかに南部の大邱に近い倭館(ウエグワシ)に逃れた修道士たちは、新たに修道院をたてた。最初の倭館大修道院長であった韓国人オドー・ハウス師は1972年に来日、同7月に日黒聖アンセルモ修道院の院長に就任、同時に主任司祭になったという。これらの記事をとおして徳源大修道院にドイツ人修道士の多かった由来を初めて知った。またベネディクト会は古来美術文化に貢献するのに優れていたという。元山の気候は最高27.8度、最低零下22度、松涛園から臨む永興湾は、冬は氷で閉ざされた。(http://ja.wikipedia.org/wiki/)

同画面上には、「以前徳源修道院(元山市) college of agriculture」として赤レンガ造りの建物の一部が、山上から見下ろす全景(経緯度: 39 N 127 E 投稿者: TLane 投稿日: 4



徳源修道院近影(現在は大学)

年前。図版はこれに依る)が掲載され、それは紛れもなく夢にまで見た見た壮大な大修道院のたたずまいを留めている。元山駅から5.5kmの駅近くにあった以前徳源公立農業学校が大学になったのであろうか。1949年以前北朝鮮には57008人のカトリック信者がいた。1950年6月に朝鮮戦争が勃発し、多くの聖職者が収容され、共産政権成立後の弾圧によってその多くが殺害された。トウマ先生の消息は依然として不明。(http://josephology.me/appdef/S-102 /wordpress/archives/98 朝鮮総督府鉄道局『朝鮮旅行案内記』昭和9年)。

戦後、はじめてアヤオヨを学習する朝鮮の中学生

終戦までは、朝鮮人も日本語で暮らしていて内地の生活と変わりなく、日常朝鮮語を耳にしたことはなかった。終戦後のある日、中学校の窓から「アヤオヨ…」と反切表を暗誦

する一団の声の流れってきて、涙が出た。(私たちから朝鮮語を奪った…)という声もあり、近隣の日本人の子どもたちの幾人かが集められ、朝鮮人学校で2度ほどハングルと地図の書き方を習ったことがある。母はマリアに雇り高熱が続いた。南方から赴任した日本兵がもたらした病とも言われていた。父はしばしば凍結した冬の道を松根割りや土木作業の勤労奉仕に出かけた。杉の苗を20本ずつ束ねる作業は子どもにもできる仕事で、「学校がないのだから修業のために…」という母の声で、家の代表として私が参加することになった。厳冬の最中、日本人の大人10名ほどが集まり、輪になって莫塵の上に座り苗を束ねる作業は1週間以上続いたように思う。その間、隣の座には美しい女の先生がいて、私のせがむままに毎日昔話を語ってくれた。とうとう「知っている話は全部してしまったので…」と言われたころ勤労奉仕も終わり、脱出の日も近づいていた。

山を越えて

咸興からの避難民が日ごとに増え、その中に大分県から新婚旅行中であるという着の身着のままの若い夫婦がいた。その夫が妹を日本まで背負ってくれることになり、弟も私も脛をゲートルで巻き、腫れて痛い足をやつのことで靴に押し込み、来る日も来る日も終

日ひたすら歩く日々がやってきた。夜は朝鮮人部落に泊まり温か過ぎるオンドルに憩い、土地の料理を堪能した。開城を過ぎ、やがて京城から釜山へ、南鮮の人もアメリカ兵も優しかった。関釜連絡船で山口県の仙崎港に着いた朝、船上から目に映ったのはしみいるような山の緑だった。

それから

あなたも漸く研究らしい道にたどりつき途中で頓挫するのは全くしのびないこととです。私も何とか初志を貫徹してもらいたい念願でいっぱいです。戦争と云う気まぐれがなかったら私も一まとめのできる仕事を心組んで居りましたがそれが何時も心のすみにひそんでいて大きな淋しさを与えられます。でき得ればそうした意味からも何か一まとめをこどもたちにやつてもらいたい：

(1959年4月17日付 父からの手紙)

大学院博士課程進学を考えていたころ父から届いた手紙である。手記によると、昭和15年(1940年)12月、東京帝国大学農学部に於いて行われた実業学校教員耕種科・蚕業

科教員免許(免許状番号「し第二二五五号」)にはじまり、17年(1942年)12月21日に同大学同学部の実験室で行われた農芸化学科の筆答試験と化学実験「定性・定量分析野」に至るまで、文部省検定試験による農業学校関係の全教科5科目に合格し、機を見て大学の実験室で働く予定であったが、敗戦の軌道をたどりその希望は達せられなかった(『歩みの跡』)。研究よりは教育、食料生産を必要とする日々が父を待っていたからである。

終戦70年の現在、2014年8月まではだれにも知られず閉ざされていたままであった徳源大修道院の修道士・修道女をネットで見つけた今、心は重い。しかもこれは氷山の一角に過ぎないことに留意しなければならない。そして未だ誰にも知られず埋もれたままになっている実態を明らかにし、事実を正確に記録することを通して人々に伝え理解を促し、現実と向き合い、目をそらさず、対立ではなく共存の道を進む以外に人類の未来・平和に通じる道はない。まだ若かった両親の庇護のもとに、父母が体験した外からの恐怖や不安、苦難・飢餓に直接曝されることなく過ごせた終戦前後の日々、子どもたち3人をよくぞ無事に日本へ連れて帰ってくれたことへの感謝は言葉に尽くせない。

大学院時代の先輩、同期の友たちは早々に逝ってしまった。就学期にだれもが結核を患っ

しており、健康維持と勉学との両立が困難な時代を生きてきた。私は最後の語り部になるう
としていく。

2015年4月4日、サンクトペテルブルク（旧レニングラード）のネフスキー大通の
入り口には、戦勝70周年記念柱が立てられていた。1941年9月にはじまるナチス・ド
イツ軍によるレニングラード包囲戦は900日間に及び、それによって、一説によれば
150万人ものソ連軍と市民が寒さや飢えで死亡したといわれている。

復活祭に臨み街にはネコヤナギを売る出店が並び、通りやバスの中でもその枝をかざす
人々に出会った。15歳でモスクワからサンクトペテルブルクに移って以来、アパートを転々
としていたドストエフスキーだが、とある記念像の前にはネコヤナギが供えられていた。



昭和15年4歳 群山にて
群馬県から訪れた祖父と

彼の眠るチフヴィン墓地の墓石の前にも、作
曲家チャイコフスキーの墓にもネコヤナギと
赤のカーネーションがあった。他に先立って
開花するネコヤナギは、春の訪れを告げる植
物であり、ヨーロッパではキリストの復活を
祝う象徴ともなっている。

廣田里子

（終戦当時9歳 居住地：富山県高岡市）

開戦時は未だ学齢前だったので、細かい記憶はない。

戦争が激しく、諸事緊迫の度が高まるにつれて、学校では授業はほとんどできなくなっ
ていた。

弁当泥棒が横行した。同じ学校の児童である場合もあり、外部の大人である場合もあっ
た。登校の途次に、スリにあうことも稀ではなかった。ある日、担任の先生が私を呼んで「運
動場での全校朝礼の時間は、教室に残るように」と言われた。奇想天外の用事を仰せつかっ
た。小さな身を屈めて座り込むのがやつの掃除道具入れの戸棚の中にいて、どんなドロ
ボウが入ってくるか観察していただきたいとお達し。多分、小3の時だったと思う。幸い、
何事もなかったが。

戦後も混乱は続いた。

旧植民地（満州が多かった）からの引き揚げ者の方々が、父を訪ねてくる日々が続いた。
みんな着の身着のまま引き揚げてきた子ども連れの婦女子だった。満州に残してきた僅か
な家財の目録を書式にして役所に提出すると、平和が訪れた時に返還請求が可能になるだ

ろうというお達しが出ていたのだとか。難しい請求書の作成の代行を、誰に聞いたのか父なら気楽に引き受けてくれると、人伝に聞いた人たちだった。

神国大日本帝国が一夜で消滅して、民主国家の幕開けが教室では喧伝されたが、そんなに簡単に皆の頭が切り替わるはずがなかった。昨日まで神国日本を教室の合言葉にしていた同じ先生には、さぞ苦悩があったことであろう。家族制度の崩壊は、家庭への大きな打撃なくしては進まなかった。そんな中で、自由恋愛が親子の諍いになることも稀ではなかった。終戦の翌年のメーデーの凄まじいデモと、職と住と食を求めて鳴り響く街宣は、革命さながらだった。

そんな中で、新憲法が施行されたときのことは、忘れがたい。軍隊から帰還された若い先生が、張りのある大きな声で「戦争放棄」を教えてください、憲法の前文の暗誦を宿題にされた。「武器を捨てた日本は、これからどうやって世界の国々と安全に付き合っていくのだろうか?」と質問をされた。返答に困っている皆を尻目に、いつも賢い日君の応えは「はい、僕は文化国家として生きていくのだと思います」と明快だった。まだ声変わりしていない高い声が教室中に響き、みんな感嘆しながら歓声をあげた。基本的人権も男女平等も最低生活保障も、選挙も、すべてそのとき砂地に水が沁みこむように、私の心の奥深く浸

みこんで住みついた。大学で社会保障を勉強したのも、イギリスの民主主義を専攻したのも、この時の授業がスタートだったと、今にして思う。私にとっての憲法は、現行の日本国憲法以外には考えられない。

中でも、女性を含めた教育の機会均等は、別格である。この問題では、※ベアテの力が大きかったことを知ったのは、ずっと後だが、この時、私案の形で示された当時の日本政府の改正憲法私案にはない強い宣言として、私の心を捉えた。実は、男女同権を口にする者は「著しいハネ上がり」という周囲の見方を、払拭するのは容易ではなかったのだが。

四国沖で引き揚げられた紫電改を見たのは、戦後といても、いまから20余年前のことである。一目見て、胸がつんざかれた。「高い戦闘能力」を謳われたとは言え、ヘリコプターほどもないチップケな戦闘機の操縦桿を握っていたはずの18、9歳の青年、いやまだ純情な少年が儼に浮かび、痛烈な痛みを堪えることができなかった。

一度は見えておかなくてはどう思うで訪れた沖繩摩文仁の丘も強烈だった。1500隻ともいわれる米艦による“雨あられ”の艦砲射撃を受けて立つのは、太平記の時代さながらの洞窟陣地。一旦始まってしまった戦争は、ここまで追い詰められても簡単には終わらないものであることを、脳裏に叩きこまれた2泊3日の短い沖繩初旅行だった。

いま、四囲の情勢は必ずしも安泰ではない。しかし、こういう時こそ、翻って何が国益かじっくり考えてみるべきではないだろうか。私は何の運動にも参加したくない怠惰な人間だが、国益を考えるのは国などという抽象的な機関ではなく、活きた個々人であることだけは、しっかり心に刻んでおこうと思う。

編集委員注

※ベアテ・シロタ・ゴードン：ウクライナ系ユダヤ人。少女期を日本で過ごし、22歳でGHQ憲法草案制定会議のメンバーとして、日本国憲法の人権条項作成に携った。

東京支部では、1997年4月に憲法施行50年を記念して、氏による講演会「憲法草案作成に携って」を開催した。関連記事『ともしび』第22号掲載。

藤谷 堯

(終戦当時9歳 居住地：山梨県甲府市郊外疎開先)

藤谷文子の、夫堯からの聞き取り記述

今78歳と6か月になり、一番強く思うことは、戦争のばからしさである。戦争の時というのは、悲しみとみじめさの連鎖である。自分はまだ小さかったが、毎日が楽しいことなどなく悲しいことだらけの日々を、父や母が過ごしていたのだと、今さらのように感じる。体験した者のみを感じるこの思いを、息子たちや孫たち世代へ、日本が戦争のない国でなければならぬということ、どうやって伝えていくべきかと思う日々である。

東山セツ子

(終戦当時9歳 居住先：満州国安東市中興区新玄街房産住宅自宅)

1 ランドセルと航空機 — 康德12年(昭和20年)1945年V)の1学期 —

終戦間近の頃、1人で下校の途中、畑の中の中央の道を歩いていたら、50mくらい近くまで来た時、住宅の上空を1機の小型機がこちらへ向かってくる。次第に高度を下げたので恐くなり、道路脇の溝の叢の中へうつ伏せになって隠れた。高粱畑へ入る時間はなかった。この時咄嗟に頭に浮かんだのはランドセル。「憧れの赤いものでは目立ってしまうから、この豚皮の染めていない色で良かった!」と。道路上を機が通り過ぎ、頭を上げると道路には埃が舞っており、機は西方、兜山(鐘状火山)方面へと機首を上げて去っていった。敵機か友軍機かは不明。この頃、安東付近にもB29が姿を現す事があったとか、数年後に耳にした。当時は、1人であっても歩いていると共軍に撃たれるから溝に身を伏せるのがよいとされていたのだった。

2 安東神社爆破炎上 — 昭和20年(1945年)9月18日 —

満洲事変勃発の9月18日は現地の人(満・朝)にとっては怨みの記念日。何者かにより、

放火、炎上という形で日本人は報復された。煙が上がっているのを数km離れた自宅付近から遠望した。この日勤務だった宮司都甲^{とこう}氏に代って、小関典子先生の御父上宮司の方も、すでに帰宅後のこと。人的被害のなかったことは幸いであった。檜造りの社殿は2時間で完全焼失した。大鳥居は頑丈で壊すことができず、両袖に手を加え、中国古典牌様式に大改造された。

3 終戦後の戦火 — 昭和21年(1946年)10月25日 —

帰国用の漁船は出港が明朝のため、帆を畳み、乗客は甲板に坐っていた。私は船が揺れるので目が覚めた。安東側を離れ、朝鮮側の船を移動させ始めたところだった。暗闇の中、安東市街に上がった火の手で船上は明るい。一段と大きな爆発があり、傍のおじさんが「あそこは変電所だね」と。「今、何時?」「12時5分」。この火の手はまず東洋紡績の工場で機械が破壊を始め、それを合図に市街を焼いたのだと後年知った。中共軍の戦況が悪くなり、軍は急遽10月25日には安東から鉄道で南方へ全面撤退することだった。25日出発は日本人の一般人引き揚げ予定の最終日だった。我が家はこの前日が乗船日で、安東での手荷物検査は実に雑であった。手製のリュックサックの口を開けて待っていたにも拘らず、

係員は素通り。母が呼び戻して検査を実施したほど。早く仕事を終えたかったらしい。

手記

1 戦中

(1) 開戦（東京都世田谷区在住）

昭和16年（1941年）12月8日、母は朝からラジオのニュースを気にしている様子。奥澤の自宅から代々木の母の実家へ遊びに行つた時、母が他の人に話していたのは、今朝沢山の飛行機が飛んでいくので騒音がひどかった事だった。ただ、この日を境に、学齢期前の私の生活が急変する事はなかった。

(2) 戦中～終戦（安東市中興区新玄街在住）

社会の変革よりも、私にとっては東京から安東（現丹東）への転居による生活環境の変化の方が大きい。

- ① 衣 布地は配給。冬は防寒が重要。
- ② 食 食料は豊富。他民族に日本の困窮を知らせまいとする政府の計らいらしい。主食は米と大豆の配給。
- ③ 住 安東は冷帯なので、窓は二重窓。暖房はペーチカ。燃料は石炭。
- ④ 学習 運動場での朝礼時には東京の宮城の方向に向かって遙拝し、教室に入ってから、初めに3か条を唱える。その2つ目は「武士が戦に行く時の覚悟で励みます」とあった。武士に訊いたことがないのでよくは判らないのだが、しっかり学びますということだ。教科書は外地用も使用。勅語は高学年の人は暗記が義務だが、3年生には課題ではない。教育勅語は教科書にある。

母が巻紙に筆で書き写したのを見て憶えた。式の時の勅語は「ギョメイギョジ」が待ち遠しかった。

ラジオは毎日、大本営発表で戦果を伝え、5年生の姉は戦果を報告する義務があった。不思議に思ったのは、こんなに戦果が上がっているのに、どこそこの陥落、というのがない。私の記憶の戦果はシンガポール陥落で、その後はどうしたのだろうか。

2 戦後（安東から内地東京へ引き揚げ）

(1) 終戦

昭和20年（1945年）8月15日正午、ラジオの玉音放送は自宅で母と姉の3人で聞いた。雑音が強くてよく聞こえなかったが、母が「受諾」という単語を聞きとったので、敗戦と判断。父は9月から転勤のため、転居先の新京（現長春）に居り、住居も決まっていた。戦後すぐ、その新京からの避難家族を、各家庭で秋までの2か月間受け入れた。

終戦により、安東兜在満国民学校は閉校。官吏は10か月分の給料が支給され、職務は終了し、あとは自力で生計を立てる。

①ソ連軍進駐の後、中共軍が入って来た時、官舎を兵舎に使うため、3日以内の強制移転で山裾の官舎へ転居した。鴨緑江の対岸に北朝鮮の麦畑が麦秋を迎えた。西方、兜山（鐘状火山）方面からカッコウの声が聞こえる早朝、ロバ車の列の鈴の音が遠くから近くへ、そして遠のいていく。鴨緑江の2つの橋、行き交う船も見え、穏やかな日々。サイレン山には鈴蘭・ワレモコウ等、小川にはザリガニ。遊ぶ舞台は整っている。野外での縄跳び、ゴム跳び、一日中遊んだ。1年余りの間、一生の分遊んだ。

親たちは勉強をさせようと私塾を考案し、机用に木箱を製作。安東は木材の集散地で、製材・木工はお手のもの。だが私塾は長続きしなかった。

②人民裁判（担当者が自分の家族の帰国を優先させた件）が、大通りの突き当りにある伝染病院の外階段で行われていた。一方、同じ場所を使って子ども相手の教宣として「最後の決戦」や「インターナショナル」等の歌を教えていた。

中国人は日本の敗戦を日本人よりも早くから知っていた。重慶軍政府は中央放送局から、20年8月10日の短波放送で日本の降伏を伝えたためらしい。戦後の満州支配は各都市、混沌として、ソ連軍、国民党政府軍、中国共産党の八路軍等が各地域を部分的に支配していた。支配者が撤退すれば通貨は全く通用しない。ソ連、八路軍、その度に軍票が流通した。進駐軍は何時まで続くか全く予測できず、情報入手の早い人は使えなくなる紙幣は受け取らない。終戦までは日本・朝鮮・中国の3種類の通貨だった。「モノ」の方が価値が安定。

③21年（1946年）10月21～25日のうちに鴨緑江から船で引き揚げよう緊急命令。25日八路軍は安東を放棄。一般日本人は安東の地を離れた。21年7月海路引き揚げ正式決定があり、職種順に引き揚げた。我が家は父が係をしていたので、24日乗船。

中共撤退の際、安東市街を焼いた。安東→鴨緑江→朝鮮半島西岸沿い→38度線近くで漁船を降り、38度線はソ連軍監視下、徒歩で南下。のち歩く。農業用倉庫で1週間留まり、祖江から米軍の上陸用舟艇で米軍の貨物船へ。仁川から無蓋貨車で釜山、引き揚げ船の興寧丸で博多へ、12月6日上陸。松原寮で日本の新円札に交換、落ち着き先までは交通費無料の客車。

3 お礼を言いたい人々のこと

・見知らぬ女の子

下校の途中、1人で高粱畑の横の大通りを歩いていた初夏の日。近くに住んでいるらしい女の子が、自分の家に遊びに来ないかという。いったん帰宅してから、2人でその満人の女の子の家、農家へ行った。庭も家の中の土間も掃き清められていた。オンドルに上がって寝ころんでみた。それは初めてのこと、後にも先にもこの時1回きりだ。家の中は物がきちんと片付けられている。農家に入ったのは初めてで、こんなにもきちんと掃除、整頓されているものなのかと、とても驚いた。箒は箒草なので、竹箒よりもずっときめ細かに

掃ける。どこの農家もこんなにきれいに掃除が行き届いているものなのかと、不思議に思った。母は言った。その子の母親が几帳面、きれい好きなのでしょうと。それにしても、なぜ、路上で女の子が私を自分の家に誘ったのか、全く見当がつかない。その時、周囲には歩行者は誰もいなかったが。優しいおとなしい感じの女の子だった。私の家にも誘ってあげれば良かったのにと、後日思った。

・同級生の男の子

国民学校2年生の冬、教室の前の方の石炭ストーブを皆で囲んでいた休み時間。一人の女の子が何やらわめきながら近づき、私を殴ろうと片手を挙げた。と、その時、反対側にいた男の子が、その腕を素早く掴んで止めた。一瞬の出来事。難を逃れたのだった。この男の子は、一体誰だったのだろう。お礼を言いたい。ケンカは嫌いだ。ケンカはしない。売り込んできたケンカも買わない、いくら安値でも。今でもケンカを売り込む人がいる。この老女にね。

・同級生の女の子

熊谷さんは満州の内陸から転校してきた人で、本物の革靴、刃のついたスケート靴を持っていた。放課後、玄関前の小校庭は冬には水を張ってリンクにするので、遊びに行った。

私の下駄スケートは、学校で配給になったもので滑らない。刃の金属がよくない。下駄スケートは、一枚板の周囲に丸い金属がついているので、それに自分で作った紐を通して足に結びつける。本当のスケート靴を借りるとよく滑ることができた。戦後、官消（官吏消費組合）のスケートリンクで、私がすべりの悪い下駄スケートで苦勞していたら、熊谷さんが「自分の靴を自宅から持ってくるから使いなさい」と、また「遊び終わった頃、ここに受け取りに来るから」ということで、彼女は仕事に出ていったあと、私は充分一人で滑って満足した。ほどほどの頃合を見計らって、彼女が現れた。彼女は家の商売を手伝って、よく通る声で納豆を売り歩いていた。だから、一緒には遊べなかった。お礼を言いたい。帰国後は、不明。

海老根静江

（終戦当時8歳

居住地：伯父の家

石川県能登島疎開先）

その日小学3年生だった私は父の郷里である石川県能登島にいました。当時は現在のように七尾から橋で渡ることも出来ず、小さな蒸気船で島の沖合まで行き、はしけにのりかえてやっと着くような半農半漁の島でした。揺れているはしけに乗り移るのがとても怖



昭和21年9歳 能登島の小学校の先生とクラスメート

かったのを覚えています。村の小学校で1年間を過ごし、いじめられたこともなかったわけではありませんが、仲良しも出来、いろいろな体験もしました。あの1年がなかったら、私の日本という国の理解が随分偏った狭いものになったことでしょう。翌年に東京の前に通っていた学校に戻ったのですが、その学校では6年生になると、小学校生活の思い出を文章にするのがきまりで、その一部として書いた終戦の日についての作文が手元に残っています。読み返すと忘れていた細部も書いてありましたので、そのまま写してみます。

その日は、うらで法事があって、村の人はみなそこに集まっていた。私とお母さま、いとこの常枝さんはおえんがわ。

弟は海へでも行っているのだろう。

おひるすぎだったので、あつくて畑仕事も出来ず、足をのびしながら、話をしてた。

「無条件降伏だよ」伯父さまが後からふいに声をかけられた。伯父さまやはり法事にいらっしやっていたのに急にかえってこられてそしてあのことば。

「えっ、どっちが」

三人とも一しよに声をだした。

「日本がだよ」

「えっ、ほんと？」

みんな一度にこしを上げた。

「うそでしょう」

みんな又こしをおろしてそう言った。

このような田舎でもとても空しゅうがひどくなって、きらい（機雷）もおとされるようにはなつたけれど、まだまだ負けたとは思えない。

「だれがそんなこといったの」

「戸田だよ」

「うそだとはおもうけど」

とは言いながら心配なので、私はサクモ（屋号）へ、お母さまはヤサク（屋号）へ、常枝さんは秋田さんへききに行った。この村では海をこして電気を引いているので、中々ラジオが引けなくて、村では、サクモと、秋田さんだけがラジオを引いているのであった。

両方の家の話もしっかりせず、又ちぐはぐである。

「きつとデマやわ」

でも気にかかる。

角で話していると、村にとまっている水兵さんが、

「そんなことデマや」

とつっけんどんに言つてとおりました。

私はなんだかムシャクシャしてきたので、

「お母さん、滝に行つてせんたくしてこようかな」と言った。

「行ける?」

「行けるわよ。なら行つてくるわ」

と、バケツをさげて滝に行つた。村では、おせんたくをするのに川か滝に行く。

「タッタッタッタッタ」

と、はなうたをうたいながらバケツをブランブランさせて行つた。

きつと、あんなことうそよ。だってソビエトと戦争しはじめた一週間前だってあんなにさわいだのなもの。

もし日本がまけたのならこんなに静かにしてられやしないもの。

でも、それが本当だと知つて。

だけど泣くほど悲しくもなかった。

なんだかくしゃくしゃしたまま八月十五日がすぎた。

ラジオも普及していなかった島の終戦の日は釈然としないまま過ぎていったことがわかります。しかし島にとっての戦争の悲劇が起こつたのはその日からしばらく後のことでした。能登島と七尾を結ぶ連絡船が、ある日の夕方機雷に触れて沈没してしまつたのです。従姉の友達のやよいさんは腰に大怪我を負い、お隣のお嫁さんは亡くなり、村は8月15日とは比較にならないほど騒然として、その後何日かお葬式が続きました。兵隊に行つていたお隣の息子さんが帰つてこられたのは、その出来事があつて間もなくのことだったので記憶しています。子供心にも本当にお気の毒に思つたのです。軍属として台湾方面に行つていると聞いていた私の従兄も無事に戻り、支給品だつたと思われる何粒かのキャラメルを彼から貰つたのも覚えています。能登島にいる間に、東京牛込区（現新宿区）にあつた私の家も祖父の家も空襲のために焼失しました。

平野和子

(終戦当時8歳 居住地…父の実家 山梨県石和疎開先)

終戦の日を迎えた頃の私

終戦の日を迎えるほぼ1か月前の7月7日の夜、母、兄、双子の姉と私は、疎開していた山梨県甲府市内の母の実家で空襲にありました。その夜、警戒警報は鳴りましたが、いつものことと悠長に構えていた時、突然空襲警報が鳴り響き、やや逃げ遅れた私たちが決められた避難先に向かった目の前は火の海、やむなく方向転換をして逃げる途中、目の前に爆弾が投下されました。幸いにも、不発弾だったため、飛び跳ねた土や泥を頭からかぶったものの、まさに九死に一生を得たのでした。その場は切り抜けたのですが、やがてまたもや目の前は火の海、その時一人の兵隊さんが傍らの家から掛布団のようなものを引っ張りだしてきて、勢いよく火を払ってくれた中を4人で手をつないで通り抜けた途端、足がずぶずぶと地中にめり込みました。田んぼだったのです。周囲の家々が燃え盛るのを見ながら田んぼの中で震えていた数時間の恐ろしい光景は、いまなお脳裏に焼き付いています。母の実家は焼け落ち、リュック一つと着の身着のまま、山梨県石和の山奥にある父の実家に行くことになりました。道路に男の子の死体が転がり、無数の電線が垂れ落ち、時々

思い出したように土蔵の窓から火炎が燃え上がる中を通り抜け、3、4里だったと聞かされた道を歩いて父の実家にたどり着きました。そこに着いた私たちには新たな試練が待ち受けていました。東京からの疎開っ子、しかも双子とあって、好奇の目にさらされ、学校への行き帰りには、大勢の子どもが待ち伏せていて、囁し立てながらぞろぞろ後をついてくるのです。

そんな日も間もなく夏休みに入り、8月15日の終戦の日を迎えたのでした。伯父や伯母、従兄弟と母たちは部屋の中に招じ入れられ、正座してラジオを聞いていましたが、私たち子ども3人は庭にいたままでした。ラジオはガーガーと雑音が入ってよく聞き取れなかったようで、夜のニュースで、ようやく終戦になったことがわかったようでした。その知らせを聞いて何より嬉しかったのは、これで東京に帰れるという思いだったことだけは、今でもよく覚えています。といっても、帰京するには面倒な手続きが必要でしたが、この記事を書くにあたって102歳の母に聞いてみると、伯父の伝手を頼って、兵隊を輸送する特別列車に乗ることを許されたとのこと、新宿へ向かう途中八王子駅に停車中、進駐軍の米兵たちの姿が窓から見えた時、一瞬恐ろしさに身が縮む思いがしたのを覚えています。こうして何とか9月10日に帰京を果たすことができました。

終戦直後の東京での生活は、苦難の連続でした。しばしば停電はする、ガス風呂だったので沸かすこともできず、やむなく遠くの汚いお風呂屋さんに行く始末。食料は満足になく、すいとんといつて小麦粉をこねたお団子入りの汁物が主食、たまに食べるご飯はさつま芋入り、しかもお米は一升瓶に入れて棒で上からつついて脱穀するのを手伝いました。母と兄は郊外の志木あたりまで着物と交換に米や野菜の買い出しにでかけていきました。学校では同学年の3年生は十数名ほどしかおらず、4年生との複式学級、教科書はわら半紙を綴じた粗末なもの、ところどころ読めないように墨で塗りつぶすように命じられましたし、そもそも毎日校舎の焼け跡整理に追われて、授業らしい授業もしばらくの間ほとんどなかったと記憶しています。また当時、発疹チフスが流行り、病原菌を媒介するシラミの発生を防止するためとして街角に集められ、頭からDDTをかけられたことも、不快な記憶として忘れられないことの1つです。

振り返ってみると、虚弱だった私がよく生き残ったと思うほどの苦しい生活の続いた終戦前後の日々でした。空襲を経験した人も少なくなってきた今日、それを語れる最後の世代の一人として、二度と戦争が起きないことを切に願いつつ、これからも機会があれば、この恐ろしい体験を語り継いで戦争の防止に役立てればと思っています。

中山正子

(終戦当時6歳 居住地…山梨県茅野市疎開先)

終戦後まもなく疎開先を引き揚げることになり、両親が住むところを探していました。

一緒にいた伯母の家族は、出征していた伯父の安否もわからなかったので、空襲で焼けなかった横浜の祖父母の家に行くことになり、祖母が茅野まで迎えに来ました。家が決まるまで私も一緒に横浜で暮らすことになりました。横浜までの電車がどんな様子だったか

覚えていませんが、横浜駅で市電を待っている間、ジープに乗った大勢のアメリカ兵を見て、怖くて怖くて目が合わないようにじつとうつぶわいていました。外国人との初めての出会いだったかもしれません。

父のこと

父は内務省、警保局に勤務のため、私たちの疎開中も東京に残って仕事をしていました。昭和20年(1945年)4月から内務大臣の秘書官となり、8月に終戦を迎えまし



昭和19年5歳 写真館で撮った唯一の写真

た。9月には内務省から外務省終戦連絡中央事務局に出向して、戦後処理にあたっていたようです。

父は52年（1977年）に66歳で他界しました。学生時代から亡くなるまでつけていた日記も、理由はわかりませんが、戦中戦後の数年間は残されていません。当時の様子は父の追想録でのみうかがい知ることが出来ます。父自身から終戦の頃の心情を聞いておかなかったことを、今になって残念に思います。



昭和19年5歳 防空頭巾を被って

武内道子

（終戦当時5歳 居住地…和歌山県疎開先）

私の終戦

昭和20年（1945年）8月15日、日本人にとって決して忘れられない日である。私にはこの日のことは、疎開先の和歌山で迎えたこと以外には、自分との関係では記憶にない。映像でくり返し見てきた玉音放送（誰もが膝をついて、あるいは野外でこうべを垂れて、ラジオからの昭和天皇の声を拝聴している）に似た風景は、私の脳裏に一切ない。母をはじめ、周りの人々の様子も全く記憶の中に入っていない、きっと誰もが玉音放送を聞いていたに違いないのだが。

技術者だった私の父は、大学卒業（昭和10年（1935年））と同時に、ソウルで鴨緑江ダム（※水豊ダム）建設設計に従事し、続いて今の北朝鮮に赴き、ダム工事の指揮官を務め、さらに17年（1942年）に家族（母と弟と私）を日本に帰国させた後、当時日本占領下であった※海南島に単身赴任した。敵地で終戦を迎え、従業員を日本に帰国させる手筈を取ったところで、中国共産党ゲリラに拉致され、投獄された。銃殺刑の執行される前日、脱走を企てるも捕えられ、発砲されたのである。銃は頭をかすめただけでそのまま

監禁される。再び脱獄を企て、山野をさまよっているうち、倒れ、現地人の部下に助けられた。父が命拾いしたその日、2月14日は、彼の母の3回忌命日であり、娘道子の6歳の誕生日であった。もつとも父がこののち日本の土を踏むのは、ほぼ1年近く後のことになる。22年（1947年）新春、長崎は佐世保港に帰国、そこでしばしの投獄の後、1月18日に和歌山の家族のもとに帰ってきた。

少女は終戦の翌年、21年（1946年）4月に疎開先で小学校に上がった。22年春まだ浅き田のあぜ道を、学校を終えた少女が家に向かって歩いていった。ひとりの帽子をかぶった男のひとあぜ道ですれ違う。ケンケン歩きをしていた少女は、しばらく行って振り返る。その男の人も振り返って立っている。2人は、どのくらい距離があったか、立ち止まったまま、しばし時間が流れた。

ずっと後になって、私が中学生になった時、新潟の雪深いところで、単身赴任でダム工事に従事していた父は、「血がよぶ」というタイトルで原稿用紙3枚ほどに、この光景を書いて、東京の私に送ってくれた。戦地から家族の疎開先を尋ねあて、駅に預けておいた荷物を取りに駅へ急いでいたと知った。父は「道子」であると、瞬時に確信したという。父の言いかたに従えば、すれ違ったひとに何か懐かしい思いを持ち、私を振り返らせたのであろう。

この年、ほどなくして母子3人は、父にとまわられて、ほとんど3年を過ごした疎開先を離れ、東京へ向かう。私は4月から青山の小学校で2年生を迎えた。人にはそれぞれに自分の終戦がある。再会した家族にとって終戦の日は1月18日というべきかとも思うが、父にとってのその日、命拾いした日、昭和21年2月14日が私たちにとっても終戦記念日である。もの心ついてから特別な日として、家族が共有してきた。母親の祥月命日、長女生誕の日に、自分の生還記念日が足されたのである。

投獄、脱獄の間、ゲリラに投げ捨てられては拾いに行き、父が肌身離さず持っていた唯一のものが、自分の母の小さな俗名お位牌であった。異国で母親の訃報を聞いたとき、自ら作ったというこの位牌は、父を私たちのもとに帰らせ、戦後もずっと私たちを見守ることになった。私は自分の誕生日に、赤飯で祝ってもらったことがない。お祝いの膳は決まって「アナゴの太巻き寿司」（ほかに玉子、かんぴょう、ほうれん草、人参が入った色美しい寿司）であった。おばあちゃんの味という母の口癖と共に賞味した。私が嫁いだ直後の誕生日に、母がこの寿司と一緒に届けてくれたカードに、「わが家では2月14日のお祝いごとが一つ減りました」と書かれてあった。

戦後70年、早春の田のあぜ道の光景と、その後の娘の誕生日ごとに両親が抱いたであろう感慨は、戦場の「よろい（鎧）」にも似て、それによって私は生かされてきたと思わずにはいられない。

武内道子注

※水豊ダム：朝鮮半島が日本の統治下であった1937年に満州国と朝鮮の電力確保のため、建設が開始された。太平洋戦争の泥沼化の中、1944年3月竣工。1945年8月ソ連軍侵攻によって略奪され、朝鮮戦争でもアメリカ軍機の攻撃を受けたが、ダム構造が堅牢であったため決壊を免れた。竣工から70年余経過した現在も、ダム本体は大きな改修工事が行われず現役であり、北朝鮮の重要なエネルギー源である。

※海南島：1939年～45年日本占領下にあった。海南島は資源が豊富で、日本の鉄鉱石産出地となった。鉱山開発に伴い、鉄道、港湾施設、発電用ダムの建設が進んだ。

佐伯邦子

（終戦当時5歳 居住地：山形県高瀬村疎開先）

昭和20年（1945年）3月10日、私は池袋の近く、豊島区椎名町に住んでいました。5歳になったばかりで、父が戦地に軍属の将校として召集されており、当時まだ30代の母と東長崎小学校（国民学校）3年生の姉、1年生の姉の2人と、まだ幼児の妹、それにお手伝いの久子さんというおねえさんと住んでいました。

長姉は活発だった私の手をいつもしっかり握って、どこに行くにもけっして離さなかったようです。その日も千川の土手の上で、近所に住んでいる人が飼っている動物たちと遊んでいると、きらきらと光るきれいな銀紙が飛行機からたくさん降って来て、それを追いかけるながら、無心に集めていました。

遠くの空が白くなったり赤くなったり黒くなったり、また青い空にもどったり、今まで見たことのない風景に出会いました。これが私の見た空襲のはじまりでした。

やがて、戦禍が進み、板橋の方にあった日大病院が焼けたときは、うちの縁側（広縁）に傷ついた人たちが沢山運ばれて横たわり、縁の下にもごぎをしいて、並んで寝かせられていて、その時の血なまぐさい匂いや異様なうめき声が、今でもかすかに思い出されます。

そして、何よりも、毎日そこで鞠つきをしたり、折り紙をしたり、ひなたぼっこをしたり、おままごとをしていた私の大切な遊ぶところが、絶対に近寄ってはいけないところになり、とても淋しかったです。

ある日池袋の米倉庫が焼けて、「そこに残っていた米を拾ってきた」という話を人づてに聞いた母が、姉をつれて、乳母車を押してそこに行ったそうです。母と姉は懸命に拾い集め、家に帰ると、一升瓶の中で、上から棒でつつきはじめました。「邦ちゃん、しっかり持っていてね」という母の声で、私はお手伝いできる喜びでいっぱい、小さい手に力をこめて、一生懸命動かないように持っていたのを覚えています。その時、なんでこんなに黒い粒々がごはんになるのかなと不思議でした。

やがて、6月になり、4年生になっていた姉に、学童疎開のお話があったそうです。それに学校で「教育勅語を完全に最後まで覚えてくるように」と宿題が出され、一生懸命で覚えたのに、途中でつかえた姉が、他の生徒たちと一緒に水を張ったバケツを両手に持って廊下に立たされ、教師に殴られて、血を流し顔を腫らして帰って来た時に、「どうせ死ぬなら、みんな一緒にいいね」と母が言って、父の友人（旧侯爵）の領地だった山形県遊佐高瀬村に疎開することに決心したようです。

それから69年、いまやっと私は東京都民にもどりました。長姉も埼玉県川口市に健在です。父は戦争から帰り、石油探鉱の実績がかわれて、日本最初の海底油田をオランダの会社と一緒に、秋田沖に成功させ、私が高校生するとき、秋田で亡くなりました。母も秋田で眠っています。近いうちに、私たちのそばに連れてきたいと思っています。

向後紀代美

(終戦当時5歳 居住地：愛知県疎開先)

私は戦後の第一世代なので、徹底した平和教育を受けました。『原爆の子』などで核の被害の悲惨さを学びました。後に中東に住んだとき、人々は広島、長崎をよく知っており、親しみを寄せられました。その反面、韓国や中国に住んだときは、加害者日本人ということで、肩身の狭い思いをしました。ですから、次の世代には、私たちのせいで負の遺産を残さないようにしたいと強く思っています。

坂上栄美子

(終戦当時4歳 居住地：兵庫県佐用郡佐用町自宅)

私は兵庫県の山間の農村に生まれ育ちました。空襲もなく終戦が4歳の時だったこともあり、戦争の直接の記憶はありません。

大阪の大学に進み都会育ちの友人たちと話をするうちに、彼女たちと私とでは見て育った景色がずいぶん違うと思うことが、何回かありました。それは、戦争にまつわる体験だったように思います。もの心つく頃が戦後とちよほど重なり、それぞれ子どもなりに多感な戦後を過ごしたのだと思います。

父は昭和17年(1942年)に兵隊として召集され、20年(1945年)12月に復員し



昭和20年4歳 終戦3か月前
パラオの父へ送る

ました。私は生後1歳から5歳になる直前まで、父を知らずに育ちました。母は毎年戦地の父に、兄と私の写真を送っていたようです。この写真は、終戦3か月前にパラオの父に送ったものですが、届いたかどうかは聞いていません。

あさ子ちゃんのこと

戦後2、3年経っても、田舎にはまだ縁故疎開の子が残っていました。近くの神社の社務所に住んでいるあさ子ちゃんも、そのひとりでした。「おとうさま」は軍人さんで、戦死されたとのことでした。下校時か何かの折に、あさ子ちゃんが「パジャマを着て寝る」と言いました。私は、「パジャマって、どんな寝間着なの」と聞けませんでした。数日後の夕方だったと思います。パジャマが見られるかも知れないと、近所の子とあさ子ちゃんの家に行ってみました。様子が変だったのでしよう、あさ子ちゃんの「おかあさま」に何か小言を言われて、追いつ返されました。あさ子ちゃんも「田舎の子に、いじめられた」と思ったことでしょう。あさ子ちゃんは、いつの間にか転校していました。あさ子ちゃんも、今頃はお婆さんになっているかなあと、時々思い出します。

ひでと君のこと

田舎には、幼稚園のない時代です。同じ村から、女の子4人と男の子3人が小学校へ入学しました。入学間もない頃、男の子と女の子が手をつないで並ぶように、若い女の先生に言われました。新しい教育の実践だったのでしよう。同じ村の子で、私一人が余りまし

た。知らない子でしたが、やはり余ったひでと君と、先生に連れられて手をつなぎました。ひでと君は、白いセーターを着ていました。次の日も白いセーターを目印に、ひでと君をさがしました。

ひでと君は疎開の子で、2年生の終わりに大阪へ帰っていきました。ひでとくん、えみちゃんのこと覚えている？

学芸会のこと

小学校に上がると、学芸会は家族にとっても大イベントでした。誰が劇の主役になるか、夕食時の話題になりました。曾祖母は私の頭を撫でて、「これさえ真っ直ぐだったら、お前がお姫さんに違いないの」と、私の癬毛を気にかけていました。曾祖母にとって「お姫さん」は、かぐや姫や乙姫です。けれど、曾祖母の期待に反して、私はその他大勢役でした。主役は、毎年疎開の子が選ばれました。3年生の時、私は曾祖母に「算数、いつも100点なのに、なんで私がなれないの」と聞きました。曾祖母は「そりゃ、疎開もんは、器量も言葉も垢抜けしている」と言いました。疎開の子がいなくなっても、やはり私は「ちようちよ その1」で、台詞は「今日は良いお天気ですね」だけで、「ひらひら、ひらひら」

と歌いながら、主役の周りを一生懸命飛びました。4年生の時のこの歌は、今も覚えていません。

私は子どもの頃、「あゝあゝ」とよく泣き、家族から「あゝさん」とからかわれていたそうです。あさ子ちゃんの家に行った夜や、ひでと君が転校した夜や、学芸会の夜には泣いたかも知れません。

百人一首のこと

小学校3年生の冬、近所のおばさんに百人一首のカルタ取りを教えてくださいました。夕食を済ませると、みかんをポケットに入れて、おばさんの家に行きます。数人の女の子が集まっていて、おばさんに詠んでもらって一心に取りました。耳からだけでしたが、一冬でどの子も大方は覚えたと思います。大人たちは、おばさんのことを「せんそうみぼうじん」と言っていました。意味は分かりませんが、なんだかおばさんのためにとても悲しい気持ちになりました。おばさんは、せんそうみぼうじんになった後も、その家に娘2人とどまって、厳しい舅姑に仕えて農家を継ぎました。

後年、「いいお婿さんが来てくれて、安気よ」と、孫の守りをしているおばさんに会いました。その時、百人一首のお礼を言わなかったことを、今も悔いています。

筍の皮のこと

農家には、どこの家にも蔵がありました。蔵は子どもにとっては怖い所でした。親の言うことを聞かないと入れられました。3年生くらいになると、私は蔵で仕事をしている祖母に付いて入り、探検をするのが楽しみになりました。蔵の1階は穀物や食料品の貯蔵庫で、2階は道具類が収納してありました。その頃には、1階には自家製の干し柿や干し芋のほか、酒の糟や黒砂糖などもありました。2階には、蓄音機やビロード張りの椅子や黒い扇風機や長持にはきれいな着物など、不思議な物がありました。祖母から黒砂糖を一かけら口に入れてもらい、もそもそ探検を始めました。後で祖母に聞くと、不思議な物は戦時中に米や麦と交換した物とのことでした。それぞれ都会の人の大切な物だったことでしょう。私の使ったという記憶は、大学時代の下宿での桑材の鏡台だけです。私が結婚する時（東京五輪の年）には、白地の着物が流行った頃で、母は「こんな物、持たせる訳にもいかないし…」と言いながら、長持から紅絹裏の着物をとり出しては、また戻していました。戦後20年にもなるその頃も、まだ不思議な物は、蔵の2階でじっと眠っていました。「嫁に行った者は、

実家の蔵に入るな」と田舎では言います。私もいつの間にか、不思議な物のことは忘れてしまいました。父母も亡くなり、実家も今は跡形もありません。物が豊かになると入れ替わりに、あの不思議な物は、粗大ゴミとして捨てられたのでしょうか。

戦時中の筍生活の苦勞を、都会の人から今もよく聞きます。でも、田舎でも、貴重な米や麦と交換に手に入れた錦紗の着物ですが、母たちに着られたとは思えません。あの筍の皮の行方は、日本中で一体どうなったのでしょうか。

俳句

私は毎年「開戦日」や「終戦忌」が来ると、それを季語にして俳句を作ることになっています。

開戦日街はジングルベルの中

開戦日国は魔物と言ひし母

九条は私の未来終戦忌

古地図の日本は赤し終戦忌

傷撫でて語らず父の終戦忌

木村和子

(終戦当時3歳 居住地…父の任地 満州)

私たち兄妹は、それぞれ家族を持ってからは、新年には、毎年、家族全員で実家に集いました。父は必ず終戦前後の引き揚げの話をするので、若い私は、「あーあ、またか」と思っています。父は必死のあの日々があったから、今の私も居るのだと、年を経るほど強く思われます。その父の話のあらましは、次のようです。

終戦後、満州での生活は一変しました。敗戦国の悲惨さを知っていた父は、会社の方々と話し合いの折、外地で得たものは置いて、早く日本に帰ること、また働けば得られるのだと説いたようですが、他の方々は、米や麦を収穫して、日本から迎えが来るのを待とうという意見が多数でした。父は自分の家族のことだけを考えて、皆を置いて帰ることが出来ず、行動を共にしました。父は引き揚げ団の団長として、それぞれの家族から供託金を預かり、家族は副団長に託し、中国共産党の幹部との引き揚げの交渉に当たりました。何度もの交渉のたびに、生きて帰れないかも知れないと思った父は、母と水杯を交わし、遺言を残し、母もシベリア送りになることを案じ、一番暖かいコートを持たせたそうです。団員を無事に帰国させたいと思う強い気持ちでの交渉に、幹部は理解を示してくれ、徒歩



昭和18年1歳8か月 満州の社宅玄関前にて

でなく無蓋車に乗るよう、その後の38度線を越える順序など、好意的に計らってくれました。パーン、パーンと機関銃の鳴り響く闇夜を、身を低く屈めながら、決められた間隔など次第に守られない焦る気持ちで、皆走り続けたのです。味方の姿を見たとき、これで命が助かったと、皆心底から安堵したのです。

幼少から親が大好きだった私ですが、感謝の気持ちも強く、側について見守りたいという思いに至り、両親とも家で看取ることが出来ました。

母亡き後、私が隣に住んでいるとはいえ、父の17年間の一人暮らしの日々は、引き揚げの体験から生まれた「誠実に事に当る」という信念が、原点にあったように思われます。

河井尚子

(終戦当時1歳10か月 居住地…京都府疎開先)

戦後2年経て、父がシベリアから奇跡的に復員。その姿は栄養失調でむくんで、いつもご飯を供えていた父の写真とは別人で、怖かった。しばらく懐かなかつたらしい。

少し大きくなってから、父の首の後ろや脛に直径4 cmくらいの丸い傷跡があるのを、どうして? と聞いても、けっして話してくれなかった。結局、戦争中シベリアであった事は一切話さず、亡くなりました。マイナス何十度の極寒の地シベリアで何があったのか? 傷は弾丸の跡か、凍傷の跡か、捕虜として痛めつけられた跡か、定かではありません。子供ながらに、よほどひどい目に遭ったのだと悟りました。

戦後間もなく、昭和24年(1949年)小学校に入学しましたが、私は幼稚園に通っておらず、いきなり学校に入り、戸惑ったことを覚えています。それでも学校は大らかでいじめられる事もなく、すぐに追いつけたのは嬉しかったです。今思えば、母が妹を連れて毎日のように学校に来ていたように思います。きっと教育ママのはしりだったのかも知れません。皆とのギャップのある娘が気がかりだったのかも。妹もちゃっかり隣に座って、私の給食と一緒に食べていた気がします。

給食は隔週、授業は2部制（午前の週、午後の週）でした。それでも皆貧乏だったので、特に悲しい思いはなく、のびのびと楽しく外を遊び回っていました。

母と隣のおばさんは、集金が来ると、裏庭からお互いの家に逃れて、居留守を使っていたなと、ふと思いつきました。



昭和19年1歳 父の出征中に誕生

鷺崎千春

（終戦当時3か月 居住地…父の実家 愛媛県周桑郡河原津 現西条市河原津）

小さな映画館

私の父は20代で、私たち姉妹（昭和20年生まれ、22年生まれ）を含めて、突然6人の子持ちとなりました。父のすぐ上の姉が4人の子どもを連れて、昭和23年（1948年）に満州から引き揚げてきたからです。伯父は満州の撫順発電所に勤務する技師でしたが、戦後中国から乞われて発電所を動かすために、それぞれの部門のエキスパートである6人の仲間と現地に留まりました。待遇は悪くはなかったようですが、「最後の引き揚げ船が出る」という情報に、伯母は子どもたちの教育のことも考えて矢も盾もたまず、故郷愛媛で家を守っていた父の所へ、子どもたちと帰ってきたのです。その時祖母が深々と頭をさげて、「この子たちのお父さんはお国のために満州に残っているのだから、どうぞみんな仲良く暮らしてほしい」と頼んだ話は何度も聞かされています。

田舎の家にはまだ結婚前の叔父たちもいましたし、12人の大世帯、父が考えついた生計の道は、戦後爆発的に流行った映画館の開館でした。隣町には「曙館」という立派な映画館がすでにあって、その協力で母屋続きに小さな映画館を建てました。こけら落としに、

踊りを習っていた従姉妹たちは「野崎参り」を舞い、私は「♪瑠璃や真珠の飾り窓、夢のお馬車がシャンシャンと♪」を歌いました。何でも器用にこなす父の従兄が映写技師となり、若い叔父たちは曙館から借り受けたフィルムを自転車で運びました。田んぼに落として泥だらけになったフィルムを、年長の子どもは大人に交じって一生懸命拭きました。でもスクリーンには何本も黒い筋が残って、観客は怒り出すし大変なこともありました。

この事業が軌道に乗ったのを機会に、映画館は祖母と伯母に任せ、以前から東京に出たくてたまらなかった父は、建築士の資格が活かせる建設会社を紹介され、26年（1951年）に親子4人で上京することになります。

伯父は28年に満州から無事に帰ってきて、やはり東京で仕事も見つかり、1年間準備期間をおいて家族を呼び寄せます。映画館は親戚が引き継いで、テレビの時代が到来するまで営業しました。「あなたたち、お父さんに一番甘えなかった時期だったのね」と、伯母は亡くなるまで、父のもとに盆暮れの付け届けを欠かしたことがありませんでした。



昭和25年5歳 おかっぱの勢ぞろい

第2部

紙上インタビュー

(一社) 大学女性協会 東京支部誌『ともしび』特別企画

終戦70年 紙上インタビュー

終戦を体験された方のお話を多くの人に伝えていくために、皆様のご協力をお願いします。
幼少で戦争の記憶がない方や戦後生まれの方は、どなたかのお話を聞いていただいても結構です。

記入日：西暦 年 月 日

氏名： (ふりがな)

(1) 東京支部会員 (2) その他 ()

生年月日 大正・昭和 年 月 日

住所：

連絡先：TEL (携帯)

Eメール

◎戦争を体験されたご家族ほか身近な方のお話の場合

氏名	(ふりがな)
<input type="checkbox"/> (1) 本人記入 <input type="checkbox"/> (2) 聞き取り記入	
生年月日	大正・昭和 年 月 日 < 男 女 >
あなたとの関係：家族 () お知り合い ()	

◆『ともしび』に掲載するインタビュー回答は原則として実名は非表示、アルファベットの頭文字で表示します。
(※例：MN 10歳) その他の掲載の場合は改めてご意向をお伺いします。◆ 個人情報 は 厳重に 取り扱います。

ご記入にあたって：

上記ほか、インタビュー回答用紙には差し支えない範囲でご記入ください。
項目を飛ばして構いませんし、質問から連想したことでも構いません。
そのほか、思い出されたことがありましたら、最終ページにご自由にお書きください。

■一般社団法人大学女性協会 東京支部

紙上インタビュー実施：2014年12月1日～2015年4月末日(随時受付) ※その後もこの活動は継続予定です。
提出先：JAUW 東京支部ともしび係 〒160-0017 東京都新宿区左門町 11-6-101
問い合わせ先：支部長 中山正子 Tel: 045-541-2481 Email: masako@c02.itscom.net

紙上インタビュー回答者
会員20名 会員外1名(男性)

終戦当日の年齢

20歳以上	1名
19歳～15歳	2名
14歳～10歳	6名
9歳～5歳	8名
4歳以下	4名

紙上インタビュー年代の順序

各人の終戦時、戦争前、戦争中、戦争後が見えるように、次の順序としました。

I 終戦の日、その前後のこと II 戦争前のこと III 戦争中のこと IV 戦争後のこと

紙上インタビュー用紙

◎紙上インタビュー

I 終戦の日、その前後のこと(1945年8月15日)

- 1 何歳でしたか? どこに住んでいましたか?
- 2 どのように終戦を知りましたか?
- 3 知ったとき、どう思いましたか?
- 4 誰と一緒にいましたか? その人はどんな様子でしたか?
- 5 終戦の日の前後で覚えていることは?

II 戦争前のこと(1941年以前)

- 1 家族構成は? (同居人、使用人を含む)どこに住んでいましたか?
- 2 家の中で記憶に残っていることは?
- 3 どんな服装でしたか? (髪型は? 持ち物は? ほか)
- 4 食べもののこと(日常の食卓、美味しかった思い出 ほか)
- 5 楽しみ、大切に思っていたことは? 大事にしていたものは?
- 6 悲しかったこと、辛かったことは? 叱られたことは? (誰に? なぜ?)
- 7 学校、勉強、先生、友達のこと
- 8 読んだ本、好きだった本は? 尊敬していた人は?
- 9 将来の夢は?

III 戦争中のこと(1941年12月~1945年8月)

- 1 戦争で生活環境は変わりましたか?(家、疎開、引き揚げ など)どこに住んでいましたか?
- 2 ご家族のこと、お世話になった人のこと
- 3 空襲ほか、直接罹災の経験は? 敵機や敵兵を見たことは?
- 4 どんな服装でしたか? (髪型は? 持ち物は? ほか)
- 5 食べもののこと(日常の食卓、美味しかった思い出 ほか)
- 6 楽しみ、大切に思っていたことは? 大事にしていたものは?

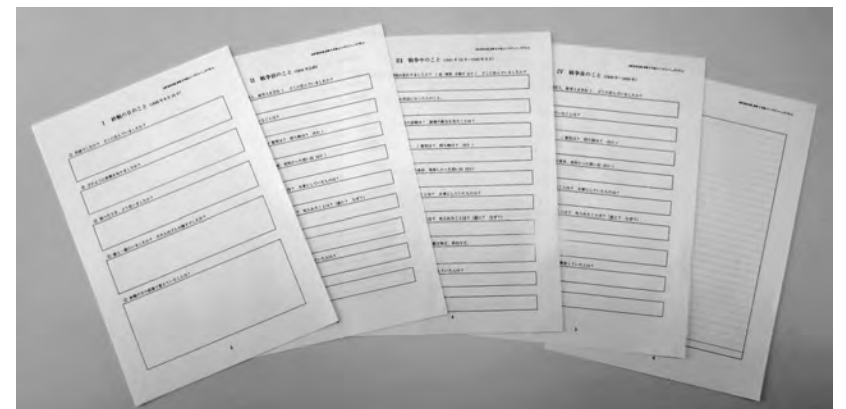
- 7 悲しかったこと、辛かったことは? 叱られたことは? (誰に? なぜ?)
- 8 学校、勉強、先生、友達のこと 勤労奉仕、供出など
- 9 読んだ本、好きだった本は? 尊敬していた人は?
- 10 将来の夢は?

IV 戦争後のこと(1945年~1950年)

- 1 家族構成は? (同居人、使用人を含む)どこに住んでいましたか?
- 2 家の中で記憶に残っていることは?
- 3 どんな服装でしたか? (髪型は? 持ち物は? ほか)
- 4 食べもののこと(日常の食卓、美味しかった思い出 ほか)
- 5 楽しみ、大切に思っていたことは? 大事にしていたものは?
- 6 悲しかったこと、辛かったことは? 叱られたことは? (誰に? なぜ?)
- 7 学校、勉強、先生、友達のこと
- 8 読んだ本、好きだった本は? 尊敬していた人は?
- 9 将来の夢は?

そのほか、ご自由にお書きください。

自由記述欄(第1部手記に掲載します)



中村道子

(終戦当時26歳 居住地…東京都世田谷区成城)

I 終戦の日、その前後の1ヶ月

Q：何歳でしたか？ どこに住んでいましたか？

26歳。東京都世田谷区成城5丁目。

Q：どのように終戦を知りましたか？

終戦の1週間前に、実家の母が成城の住人の河崎なつ先生から、終戦が近いことを知らされました。

Q：知ったとき、どう思いましたか？

終戦（敗戦）が近いことを知り、米軍が侵入したら、女子供は危険と思われ、母は高尾山へ避難しようとして荷物を少々運びました。しかし、結局避難はしませんでした。

Q：誰と一緒にいましたか？ その人はどんな様子でしたか？

8月15日は成城の実家に両親、妹、2歳半の息子と一緒にいました。ラヂオで天皇陛下の終戦のお言葉を聞きました。皆深刻な表情でした。

Q：終戦の日の前後で覚えていることは？

しかし、敗戦と分かっていても、戦争が終わったという安堵の気持ちが強く、文化的な活動の期待がふくらみました。成城では早くからあっちこっちで会合が開かれ、組織されました。

私の関係したのは、A：青年砦クラブと、B：成城インターナショナル・クラブです。

A：青年砦クラブ…成城地区の若い人たちが集まり、地域のために色々計画をたてました。

① 読書サークル…本を集め、毎日曜日に学生に頼んで、自転車で希望者の家へ本を届け、前回の本を回収しました。

② 児童文庫…子供の本を知人から集め、本屋の協力も得ました。初めは個人の家で子供に本を貸し出し、後に自治会の部屋を利用させてもらいました。

B：成城インターナショナル・クラブ…成城の大きな住宅が進駐軍に接収され、何家族も成城に住むようになりました。この外国人の家族との親交のためにクラブが組織され、毎月1回、個人の家で文化交流の会を開始しました。私はほとんどの会に出席し、通訳を務めました。

II 戦争前のこと

Q：家族構成は？ どこに住んでいましたか？

両親、妹とお手伝いさんと住んでいました。東京府砧村（現成城）の実家。

Q：家の中で記憶に残っていることは？

洋風の食堂、冬に食卓の下に掘り炬燵があり、続いた部屋は洋風の応接間。お風呂は五右衛門風呂でした。

Q：どんな服装でしたか？

簡単な洋服、ほとんど母の手製。外出する時は、スーツ。手持ちはハンドバッグ。髪型は横分け。

お稽古（華道・茶道等）の時は、着物を着ました。

Q：食べものこと

食事はいつも美味しく、洋食が多かった。日曜日には母がパンケーキ、マフィン、フレンチ・トースト、ワッフル等を作ってくれましたので、日曜日の朝食が楽しみでした。

Q：楽しみ、大切に思っていたことは？ 大事にしていたものは？

音楽が好きだったので、父が集めていたオペラやメニューインのバイオリンやクロイツラのピアノ演奏を聴くのが楽しみでした。

大事にしていたものは英語の本。犬を飼っていたので可愛がりました。

Q：悲しかったこと、辛かったことは？ 叱られたことは？

悲しかったり、辛かったり、叱られたりしたことはあまりありませんでしたが、小学校、女学校の2年までは日本語が出来なかったので、勉強（予習）が辛かった。母に見てもらい、泣きながら勉強しました。

Q：学校、勉強、先生、友達のこと

小学校、女学校、女子大に通うのが楽しかった。良い先生と友達に恵まれました。

Q：読んだ本、好きだった本は？ 尊敬していた人は？

日本語が不自由だったので、当時テレビはなく、英語の本を読むのが楽しみでした。その頃英語の本はなかなか手に入らなく、持っている本を何度も繰り返し読みました。尊敬していた人は、両親と習っていた先生方。

Q：将来の夢は？

社会に役立つ人間になること。

Ⅲ 戦争中の日々

Q：戦争で生活環境は変わりましたか？ どこに住んでいましたか？

戦争がはじまり、夫が香港に転勤になったので、その頃、家族は行くことが出来なく、私と息子は実家の両親の家に住みました。

Q：ご家族のこと、お世話になった人のこと

実家には両親と妹がいました。東京の空襲が激しくなった時に、一時広島に疎開しました。

Q：空襲ほか、直接罹災の経験は？ 敵機や敵兵を見たことは？

空襲では直接罹災の経験はありません。一度成城の上空に敵機が飛んだことがあり、学園は爆撃を受けたけれども、住宅は無事でした。

Q：どんな服装でしたか？

洋服やもんぺ。髪は短く、横わけ。

Q：食べものごと

食べ物は不自由で、何時も空腹感があったことを今でも思い出します。したがって、それ以来食べ物を大事にし、残して捨てるようなことはしません。庭で母が野菜、トマト、キュウリ、さつま芋、カボチャ等をつくりました。

Q：楽しみ、大切に思っていたことは？ 大事にしていたものは？

生きるのに必死でしたが、手元にある本を何度も読み返すのが楽しみでした。

Q：悲しかったこと、辛かったことは？ 叱られたことは？

悲しく、辛かったことは夫の死（昭和16年（1941年）11月）。

Q：学校、勉強、先生、友達のこと 勤労奉仕、供出など

主婦として、親としてのつとめに一生懸命でした。

Q：読んだ本、好きだった本は？ 尊敬していた人は？

家にある英語の本を手当たり次第に読みました。

尊敬していた人は、先生（特に女学校と女子大の担任）と両親。

Q：将来の夢は？

息子と家族（両親と妹）と無事に生き抜くこと。

自立するために仕事を持ち、少しでも社会に貢献できること。

Ⅳ 戦争後の日々

Q：家族構成は？ どこに住んでいましたか？

実家で両親と妹、息子と住んでいました。東京府砧村（現世田谷区成城）。

Q :: 食べものこと

食べ物はいつでも美味しかった。

Q :: 楽しみ、大切に思っていたことは？ 大事にしていたものは？

音楽が好きだったので、日響の定期演奏に通いました。

Q :: 学校、勉強、先生、友達のこと

昭和21年（1946年）女子大の担任に頼まれ、文部省で米国の教育使節団と日本の教育者との会議の通訳を務めたのが始まりとなり、その後数年母校の女子大で勤めるようになり、職業を持つようになりました。

Q :: 読んだ本、好きだった本は？ 尊敬していた人は？

東京女子大に通うようになり、図書館の本を読みあさりました。

尊敬していたのは両親と先生。

Q :: 将来の夢は？

役に立つ人間でありたい。

坂井英子

（終戦当時16歳 居住地…長野県木曾郡榑川村 現塩尻市）

I 終戦の日、その前後のこと

Q :: 何歳でしたか？ どこに住んでいましたか？

16歳、女学校3年生。

Q :: どのように終戦を知りましたか？

重大放送があるとの事で、女学校の作法教室に集まっていました。その時は、玉音放送にただ驚きました。

Q :: 知ったとき、どう思いましたか？

これからどうなるのかという事のみでした。

Q :: 誰と一緒にいましたか？ その人はどんな様子でしたか？

旧制女学校3年生の同級生、下級生、ただ黙っているのみでした。

配属将校が軍刀を外して、こそこそと去っていった事は、今もしっかり覚えています。

Q :: 終戦の日の前後で覚えていることは？

終戦の日まで隊列を組んで、忠魂碑に敬礼をした事、生家のそばの御料林に全国か

ら船の甲板を作る松の大木を伐りに兵士が来ていて、村人がお茶と食べ物差し入れた事、敗戦の日には礼にと軍服を置いて行った事、高知県の人たちでした。

II 戦争前のこと

Q：家族構成は？ どこに住んでいましたか？

父母、兄、弟2人、妹3人、私、お子守さん2人。

Q：家の中で記憶に残っていることは？

中仙道をはさみ、土蔵があり味噌倉があった事。

Q：どんな服装でしたか？

和服、洋服、母の手編みのセーター。

Q：食べものこと

そばだんご、おかゆ、そば。

Q：楽しみ、大切に思っていたことは？ 大事にしていたものは？

母の実家が本屋だったので、本を読んだ事。

Q：学校、勉強、先生、友達のこと

汽車通学の1時間の勉強、おしゃべり。

Q：読んだ本、好きだった本は？ 尊敬していた人は？

蔵に残っていた日本の古典。

Q：将来の夢は？

描く事は出来なかった。

III 戦争中のこと

Q：ご家族のこと、お世話になった人のこと

母の姉、母の実家の人たちにお世話になりました。

Q：空襲ほか、直接罹災の経験は？ 敵機や敵兵を見たことは？

山の中で、敵機は一度眺めただけです。

Q：どんな服装でしたか？

紺のもんぺとセーラーの上着。

Q：食べものこと

そば、さつま芋、じゃが芋のだんご（つぶして作っただんごは美味しかった）。

Q :: 悲しかったこと、辛かったことは？ 叱られたことは？

山の中で塩がなくて、買出しに行った事。

Q :: 学校、勉強、先生、友達のこと 勤労奉仕、供出など

通学の汽車の中のおしゃべり。

IV 戦争後のこと

Q :: 家族構成は？ どこに住んでいましたか？

祖父、父母、兄、弟2人、妹3人。

Q :: 家の中で記憶に残っていることは？

毎晩母と交替で石臼でそばを挽いた事。

Q :: どんな服装でしたか？

スーツ、皮のバック、初めての革靴（父から買ってもらった）。

Q :: 食べものこと

米、そば、じゃが芋、鶏肉、兎の肉、ぶどう、自家の庭の柿、ぐみの実。

Q :: 楽しみ、大切に思っていたことは？ 大事にしていたものは？

父のいとこでおばとも思う人に、大事にされた事。

Q :: 学校、勉強、先生、友達のこと

汽車通学の中のおしゃべり。英語の先生に英語の勉強を奨められた事。

Q :: 読んだ本、好きだった本は？ 尊敬していた人は？

母の実家が本屋だったので、古典を読んだ事。

Q :: 将来の夢は？

教師。

島 美喜子

(終戦当時16歳 居住地：東京都目黒区自宅)

I 終戦の日、その前後のこと

Q：どのように終戦を知りましたか？

正午のラジオ放送で知りました。

Q：知ったとき、どう思いましたか？

明日をも知れない日々から解放され、未来のことを考えることが出来るのだと思います。
ました。

Q：誰と一緒にいましたか？ その人はどんな様子でしたか？

母は不在で、弟も多分中学へ行っていたと思います。私、ただ一人でした。

Q：終戦の日の前後で覚えていることは？

ラジオもいろいろ混乱の様子を放送していたことを覚えています。
二重橋前の広場に跪く人々の姿など。

II 戦争前のこと

Q：家族構成は？ どこに住んでいましたか？

両親と、兄2人弟2人、私、女中2人の9人で、東京都目黒区下目黒に住んでいました。

Q：家の中で記憶に残っていることは？

子供が5人もいて、特に兄は小学生の頃、友人を沢山家に連れてくることがあって、賑やかでした。私もクラスの友人たちを誕生日会で招いたり招かれたりしていました。

Q：食べものこと

父が魚より肉が好きだったようで、特に家族も大勢でしたので、焼き焼をすることが多かったと思います。また、家で作ったコロッケもおいしかったように覚えています。

Q：楽しみ、大切に思っていたことは？ 大事にしていたものは？

家族みんなで夏は海水浴に、秋はピクニックに行ったりすることも、多かったと思います。

Q：学校、勉強、先生、友達のこと

小学校（芝区白金小学校：目黒区に住んでいましたが、兄2人と弟もバスで通学していました）でも高校（桜蔭高女）でも、良い先生と友人に恵まれたと思います。その頃から数学が最も好きでしたが、小学校4年生の時に芝区が募集した作文で選ばれて、区長賞を受けたことができました。

Q：読んだ本、好きだった本は？ 尊敬していた人は？

高女の頃には、家にあった明治大正文学全集、世界文学全集などを読んでいました。志賀直哉、有島武郎、芥川龍之介、ロシア文学では、ドストエフスキーなどが印象に残っています。

Q：将来の夢は？

数学を専門とする研究者になりたいと思っていました。

Ⅲ 戦争中のこと

Q：戦争で生活環境は変わりましたか？ どこに住んでいましたか？

戦前、戦中、戦後、東京都目黒区下目黒に住んでいました。戦中は空襲も幾度も経

験しましたが、自宅は幸い戦火を免れましたので、生活環境は特に変わりませんでした。した。

Q：ご家族のこと、お世話になった人のこと

両親と兄2人弟2人の7人家族でしたが、兄たちは海軍兵学校に行き、小学生の末弟は学童疎開で家には不在、両親と中学生の弟と私の4人の生活でした。

Q：空襲ほか、直接罹災の経験は？ 敵機や敵兵を見たことは？

空襲で沢山の焼夷弾が投下されるのを見ており、ごく近くの家まで罹災したこともありましたが、幸い自宅は無事でした。

Q：どんな服装でしたか？

防空頭巾をかぶり、服装は母に仕立ててもらったズボン姿でした。

Q：楽しみ、大切に思っていたことは？ 大事にしていたものは？

空襲になると父はすぐ研究所（勤め先）に行かなければならないので、母と中学生の弟と私の3人で、母を守ってあげなければと思っていました。

Q：悲しかったこと、辛かったことは？ 叱られたことは？

明日をも知れない生活で、未来のことは何一つ考えられない辛い生活でした。

Q：学校、勉強、先生、友達のこと 勤労奉仕、供出など

高等女学校（桜蔭）3年になるともう授業はなくなり、女子挺身隊として勤労動員の生活でした。鐘紡の紡績工場、学校工場、中央気象台等に動員され、勤労奉仕の生活でした。4年生で卒業の年に終戦になりました。

Q：読んだ本、好きだった本は？ 尊敬していた人は？

工員の生活は辛いものでしたので、通勤の電車の中で独りで数学の問題を解いたり、家にあつた明治大正文学全集を読んだりしました。

Q：将来の夢は？

明日をも知れない日々の暮らして、未来のことは、何も考えられない絶望的な時代でした。

IV 戦争後のこと

Q：家族構成は？ どこに住んでいましたか？

両親と兄2人弟2人、私の7人家族でしたが、やがて女中もいなくなり、母は大変だったと思います。戦前、戦中、戦後を通して、目黒区に住んでいました。

Q：家の中で記憶に残っていることは？

ガスもよく止まったり停電したりで、暖房はこたつと火鉢くらいで、寒い冬でした。

Q：食べ物のこと

父の仕事と関わりのある会社等から、時々入手し難い食料が届けられたりするのが助けとなりましたが、食糧事情はまだまだ苦しい時代だったと思います。日常的な食卓では、特に美味しかったというほどの思い出はなかったように思います。

Q：楽しみ、大切に思っていたことは？ 大事にしていたものは？

未来への夢を思い描くことが、楽しみだったと思います。
親しい友人との友情も大切なものでした。

Q：学校、勉強、先生、友達のこと

高校（桜蔭）卒業後に東京女高師（現お茶の水女子大）の理科（化学）に進学しました。4年間よい先生と友人に恵まれたと思います。フランスから帰国された物理の湯浅年子先生の熱力学の講義は、今でも印象に残っています。教科書もない時代で演習問題の出題も英語でした。

Q：読んだ本、好きだった本は？ 尊敬していた人は？

家にあった明治大正文学全集、世界文学全集、ロシア文学全集等を読んでいた。ドストエフスキーが好きで、ほとんど全作品を読んだと思います。少し後では、サルトル、ブルースト、ボーヴォワール等。日本人では、三島由紀夫、川端康成等も愛読しました。

Q：将来の夢は？

小学校の頃から数学が好きだったので、将来はものを考えることを仕事にしたいと思っていました。戦後でしたので、結局東京女高師に入る時は、化学を専門とすることになりましたが、父が化学者だった影響もあったかも知れません。

宮島茂子

（終戦当時13歳 居住地…長野市疎開先）

I 終戦の日、その前後の1ヶ月

Q：何歳でしたか？ どこに住んでいましたか？

13歳で、住所は世田谷区代沢1―12―3でしたが、5月25日の空襲で焼失し、同88番地の仮住居に両親兄弟はいました。私は長野市に疎開していました。

Q：どのように終戦を知りましたか？

ラジオでかすかに聞こえ、暫くして分かりました。

Q：知ったとき、どう思いましたか？

ただ東京に帰れると思ひ、うれしかったです。そんな年齢でした。

Q：誰と一緒にいましたか？ その人はどんな様子でしたか？

疎開先の（その家族も疎開していた）2歳上の女学生と一緒に喜びました。

天皇陛下のお言葉の本当の意味が分かっています。

Q：終戦の日の前後で覚えていることは？

ただうれしくて早く帰ろうと思ったことだけ覚えています。とてもお腹がすいていました。

II 戦争前のこと

Q：家族構成は？ どこに住んでいましたか？

両親、兄3人、姉1人、妹1人、使用人1人。東京都世田谷区。

Q：家の中で記憶に残っていることは？

2階に兄2人と姉が住み、下には兄1人と私と妹と両親が住み、食堂があり、いつも賑やかでした。

Q：どんな服装でしたか？

質素な服装でした。戦争中はもんぺをはいていました。

Q：食べること

戦争が激しくなりだんだん質素になりました。ただ昭和19年（1944年）の8月、宮崎県に個人疎開してからはお米は食べられました。

Q：楽しみ、大切に思っていたことは？ 大事にしていたものは？

友だちと庭で遊ぶこと、庭にブランコもあって近所の子供たちの遊び場でした。小さなものを集めていましたが、燃えました。

Q：悲しかったこと、辛かったことは？ 叱られたことは？

6人兄妹の5番目なので、親の愛情が薄いような気がして悲しかったです。

Q：学校、勉強、先生、友達のこと

池之上小学校の男女組で、勉強は大変でなく、友だちとも仲良くしていました。

Q：読んだ本、好きだった本は？ 尊敬していた人は？

童話など。本の虫で、いつも読んでいました。

Q：将来の夢は？

別に覚えていません。

III 戦争中のこと

Q：戦争で生活環境は変わりましたか？ どこに住んでいましたか？

東京世田谷から宮崎県串間市の伯母の家に妹と2人疎開、中学は宮崎市の県立女学校に入り、母方伯母の家でした。

Q：ご家族のこと、お世話になった人のこと

串間市の伯母には、とても世話になりました。

Q :: 空襲ほか、直接罹災の経験は？ 敵機や敵兵を見たことは？

宮崎市に疎開していた時、父から和紙に毛筆で、5月25日の空襲で家が焼けた旨、知らされました。再疎開の折、東京の家で八王子が焼けるのを、空の色で見ました。

Q :: どんな服装でしたか？

おかつぱでした。いつも肩から手製の袋をぶらさげていました。

Q :: 食べものこと

戦争中では疎開先の農家の手伝いをして、白米の大きなおにぎりを食べたことを覚えていています。おいしかったです。

Q :: 楽しみ、大切に思っていたことは？ 大事にしていたものは？

疎開先にくる家族からの便り。

Q :: 悲しかったこと、辛かったことは？ 叱られたことは？

妹をいじめて応接間に閉じこめられたことは辛かったです。なぜか分かりません。疎開先の小学校でいじめにあいました。

Q :: 学校、勉強、先生、友達のこと 勤労奉仕、供出など

宮崎の小学校で、農家の稲刈り（指を切りました）、麦踏みをしました。これは楽

しかった。

Q :: 読んだ本、好きだった本は？ 尊敬していた人は？

サトウハチローの本。尊敬していたのは、父です。

Q :: 将来の夢は？

ただ生きていたいと思いました。

IV 戦争後のこと

Q :: 家族構成は？ どこに住んでいましたか？

仮住居に兄たちが士官学校、経理学校から帰り、家族7人ぎゅうぎゅうづめでした。小さな部屋を建て増してそこにいました。

Q :: 家の中で記憶に残っていることは？

2年くらいして、昭和22年（1947年）焼け跡に家を建て、そこに引越しました。広い食堂がありました。

Q :: どんな服装でしたか？

都立高校でしたのでセーラー服で、カーディガンも紺で地味でした。

Q :: 食べものこと

朝食に出るお味噌汁に父が庭のニラを入れるので、こっそり入れる前についてもいました。

Q :: 楽しみ、大切に思っていたことは？ 大事にしていたものは？

たまに映画を見ることでした。時には椅子がなく立ったまま見たこともあります。

Q :: 悲しかったこと、辛かったことは？ 叱られたことは？

高2の時、親しかった（親しいと思っていた）友人が自死したことです。

Q :: 学校、勉強、先生、友達のこと

新制高校で歴史ががらつと変わり、大学出たての先生が情熱をもって教えてくださったことです。

Q :: 読んだ本、好きだった本は？ 尊敬していた人は？

夏休みには夏目漱石全集を読んだりしていました。今、朝日新聞で読むと全然受けるものが異なっていますね。

Q :: 将来の夢は？

考古学に興味がありました。

野瀬久美子

（終戦当時12歳 居住地：父の任地 朝鮮京城 現韓国ソウル市からの疎開先）

I 終戦の日、その前後の1ヶ月

Q :: 何歳でしたか？ どこに住んでいましたか？

12歳。父の転勤で、戦争が始まる少し前から、朝鮮の京城（現在の韓国ソウル市）に住んでいたが、小学校の集団疎開で妹と2人都会を離れていた。

Q :: どのように終戦を知りましたか？

疎開先で、教師から終戦のことには全く触れず、「しばらく家に帰っていいですよ」と言われ、家の近くで解散となった。妹と2人で、親を驚かそうと、裏口からそつと入って、「わっ」と大声で言ったところ、母が「駅までさつき行ってみたのよ」と言う。そして、「そこに座りなさい」と言い、敗戦のことを厳粛な顔で語った。

Q :: 知ったとき、どう思いましたか？

本当に驚き、ショックを受けた。疎開生活中、妹は皮膚が弱く、足におできが出来やすく、姉として心配で仕方がなかったことから、級友と家の方角に向かつては、「帰りたいわね」と言っていたので、もう疎開先に戻らなくてもよいのだと気が付

いて、ほっとした。

Q：誰と一緒にいましたか？ その人はどんな様子でしたか？

母、妹と3人でいた。母はミッシヨンスクール出身で、米国人の先生をととても尊敬しており、戦時中も「鬼畜米英」などと言うと、「米国人はそんな悪い人ではない」などと口にしていたので、悲愴感は感じとれなかった。妹は私と同様に、ただ驚いていた。

Q：終戦の日の前後で覚えていることは？

終戦の日のあと、帰国の日が早かったので、すぐに家を片づけ、もう戻ることはないからと名残りを惜しんで、4人姉妹それぞれが、誕生の時に買ってもらっていた内裏雛の4対と他の雛人形を、ひな壇にきれいに飾って、家をあとにした。クラス担任だった先生に会えなくなったことが、とても悲しかった。

日本に戻ってから、祖父の郷里にあいさつに行った折、上野駅におびただしい数の浮浪児がいたことにとっても驚き、悲しかった。

II 戦争前のこと

Q：家族構成は？ どこに住んでいましたか？

父母姉2人と妹1人とお手伝い（当時は「女中」とか「ねえや」と呼ばれていた）。東京都淀橋区下落合（現新宿区中井）に住んでいた。

Q：家の中の記憶に残っていることは？

当時の日本家屋には、いくつかの和室のほかに、玄関座敷と洋間（応接間と呼ばれていた）、女中部屋、和式トイレ、薪で焚く風呂があった。

Q：どんな服装でしたか？

おかつぱ頭。ワンピーススタイルの洋服が多かった。姉妹で順々におさがりになった。母が米国人の先生から習ったスモック刺繍のワンピースが気に入っていた。

Q：食べものこと

和食や洋食。母が女学校時代に習った洋風のおかずも多かった。「じゃが芋パン」という裏ごしをしたじゃが芋で作ったハンバーグ風のもものが美味しかった。

Q：楽しみ、大切に思っていたものは？ 大事にしていたものは？

お人形遊び、幼稚園での生活。仏教系の幼稚園だったので、4月8日お釈迦様誕生日を祝う花祭りが、美しい思い出として残っている。

Q：悲しかったこと、辛かったことは？ 叱られたことは？

大切に飼っていた兎が、犬にかまれて死んでしまったこと。

Q：学校、勉強、先生、友達のこと

小学校1年の初めての成績表を、帰途ドブの中に落としてしまい（ドブのふちを歩くのが好きだったので）、拾ってくれた母が開けて、点は良かったので、「この子は利口なのか馬鹿なのかわからない」とあきれられた。

Q：読んだ本、好きだった本は？ 尊敬していた人は？

『くるくるくるみちゃん』のらくろ上等兵』など。

視学官として海外を視察していた祖父から話を聞いて、祖父を尊敬していた。

Q：将来の夢は？

祖父のように海外を視ることに。

Ⅲ 戦争中のこと

Q：戦争で生活環境は変わりましたか？ どこに住んでいましたか？

終戦近くなって学校から集団疎開をし、初めて親許を離れ、山の中の施設で妹と一緒に集団生活に入った。

Q：ご家族のこと、お世話になった人のこと

男の兄弟がいなかったので戦地に行く者はなく、家族6人ずっと一緒に生活できたが、近所のもとても親しい家族の長男が予科練に行ってしまう、悲しい思いをした。

Q：空襲ほか、直接罹災の経験は？ 敵機や敵兵を見たことは？

空襲警報は時々鳴り、敵機が飛来したが、日本を空襲した帰途に、爆弾ではなく空になった弾丸の容器を空中から捨てたとのことだった。

Q：どんな服装でしたか？

母の和服で仕立てたもんぺを穿き、上着の胸には名前と血液型を書いた布が縫い付けてあった。父は外出の時は、足にゲートルを巻いていた。

Q：食べものこと

特に変わったことはなかった。

親は食料の備蓄など、心配したことと思う。

Q：楽しみ、大切に思っていたことは？ 大事にしていたものは？

疎開をするまでは、近所の子供たちと仲良く遊び、学校の生活も楽しかった。

Q：悲しかったこと、辛かったことは？ 叱られたことは？

小学校にプールがあったが、空襲の際の防火用水用とのことで、全く水泳ができなかったこと。

集団下校しており、6年生はリーダーだったので、責任が重く緊張していた。

Q::学校、勉強、先生、友達のこと 勤労奉仕、供出など

校門を入ると先ず必ず奉安殿に敬礼をすること。職員室に入る時は、「〇〇（自分の名前）入ります」と、入口で大きな声で言うてから入ることといった規則があった。兵隊さん用の水筒にひもを縫い付ける勤労奉仕があった。ひもはとても硬かった。

Q::読んだ本、好きだった本は？ 尊敬していた人は？

『トムソーヤの冒険』『グリム童話集』などの物語や、キュリー夫人、野口英世などの伝記もの。

Q::将来の夢は？

戦争が無くなること。

IV 戦争後のこと

Q::家族構成は？ どこに住んでいましたか？

両親と姉妹の6人家族。東京都淀橋区の自宅に戻った。戦後は女中はいなかった。

Q::家の中で記憶に残っていることは？

留守の間住んでいた2家族が、移る家がすぐには見つからず、3家族がしばらく一緒に暮らした。大変だった。

Q::どんな服装でしたか？

姉が洋裁学校に通っていたので、ワンピースやブラウスとスカートなどを縫ってもらっていた。髪型は中学からは、二つに分けて結んだりしていた。

Q::食べもののこと

戦争直後の東京は、食料不足で、さつま芋が主食になったり、田舎に買い出しに行ったり、空地で野菜を育てたりした。鰯の配給があったり、進駐軍から乾燥卵の配給などがあった。バケツを持って、鰯の配給を受け取りに行くのは、私の役割だった。

Q::楽しみ、大切に思っていたことは？ 大事にしていたものは？

昭和21年（1946年）4月には中学生になり、落ち着いた勉強が出来、特に英語の授業が新鮮で、楽しく勉強した。

Q::悲しかったこと、辛かったことは？ 叱られたことは？

中学の上級生に金髪の生徒がおり、先生に金髪に染めたと叱られたが、実は栄養失調で、髪が金色になったのだとわかり、とても気の毒で悲しい思いがした。真面目な裁判官が、ヤミの食料を拒絶して栄養失調で亡くなったという悲しい報道もあった。

Q：学校、勉強、先生、友達のこと

中学からは落ち着いて学校生活や交友関係も楽しめ、家の女中部屋は私の勉強部屋になり、友人が泊まりに来て、夜中までおしゃべりを楽しんだりできた。

Q：読んだ本、好きだった本は？ 尊敬していた人は？

『若草物語』『レ・ミゼラブル』『クオ・ヴァ・デイス』などの本。尊敬していた人は、米国のクリスチャン団体による※ララ救援物資の代表をつとめ、私が生徒の頃の普連士学園の学園長ミス・エスター・B・ローズ。

Q：将来の夢は？

国際関係の仕事をする事。

野瀬久美子注

※ララ救援物資：米国人や米国在住の日系人から、太平洋戦争で被災した日本人の窮状を救おうと送られた物資。食糧、衣類から雑貨にいたる。その活動団体「アジア救援公認団体」(Licensed Agencies for Relief in Asia)の頭文字をよって、ララ救援物資と略称された。

望月浪江

(終戦当時12歳 居住地…山梨県甲府市郊外疎開先)

I 終戦の日、その前後の1ヶ月

Q：何歳でしたか？ どこに住んでいましたか？

12歳。山梨県甲府市に住んでいた。7月に、父の生家に、弟2人と疎開した。市内より、4kmくらい離れたところだった。

田舎の家には、祖母が1人住まいで、当時甲府市内に陸軍大学があり、陸軍少佐の家族(妻、子供1名)が住んでいた。祖母は離れて生活し、疎開した私たちは、2階の疎開の荷物の間で生活していた。7月5日の夕方、甲府市内で病院を開いていた眼科医の母は、私たちの転校書類を持って田舎へ来ていた。翌6日に甲府が戦災に遭い、「先生早く逃げなければ危ない」と、声をかけて通り過ぎる人々があつたと聞いた。病院に置いてきた看護婦たちを案じた。明け方に2名は無事に田舎へ着き、1名の若い子が来なかったが、自分の家に帰っていたとの連絡が午後であり、母の安堵した姿が子供心に残っている。

Q：どのように終戦を知りましたか？

放送時間は、貯水池に友人と泳ぎに行っていた。帰宅して、母から聞いた。戦争に負けるはずはないと思った。

Q：知ったとき、どう思いましたか？

同居していた将校さんが、金モールをとり、ハイカラーの鍵ホック、上着の第一ボタンを外して帰宅した姿に、現実を受け止めた。毎日当番兵が、馬でのお迎え、パカパカと出かける姿に、ほれほれした。間もなく帰郷した。

Ⅲ 戦争中の1ヶ月

Q：戦争で生活環境は変わりましたか？ どこに住んでいましたか？

甲府市内の家(眼科医院)の病室には、甲府63部隊の将校夫妻が住んでいた。家は甲府空襲で焼失した。父の生家に子供だけ疎開していたので、戦火を逃げ惑うことはなかった。

Q：食べものについて

田舎(後の疎開先)に行くと、祖母が卵など農家へ買いに行ってくれた。

Q：学校、勉強、先生、友達のこと 勤労奉仕、供出など

終戦まで、疎開先で、お芋を植えるために、桑畑を開墾し、お芋を植えた後、貯水池よりバケツに水を汲んで運んだ。慣れないことで、近所の子供たちが手伝ってくれた。反対する子もいた。鍬を現地まで持つていくのが大変だった。

ランドセルがまだ使えた。田舎に疎開してからは、背負っている人は少なかったように思う。女学校の入学試験の前で、勉強だけでなく、跳び箱、鉄棒なども練習した。

IV 戦争後のこと

Q：家族構成は？ どこに住んでいましたか？

母は、眼科医で甲府市内で開業していた。父は軍医として出征中で、母、弟2名、祖母、看護婦2名。父は国内勤務だったので、10月には帰宅した。

Q：家の中で記憶に残っていることは？

父は、祖父の診療室その他があり、早々に開業。昭和28年（1953年）に甲府市内に再度開業した。

Q：どんな服装でしたか？

21年（1946年）4月から女学生になったので、セーラー服に履物は下駄だったと思う。

Q：学校、勉強、先生、友達のことは？

田舎へ疎開したため、女学校に入学できなくては大変と、焼けトタン屋根の本屋に参考書を買いに、祖父の大人の自転車に突っ込み乗りで甲府市内まで買いに行った。往復2時間はかかったと思う。冬で真っ暗になった。入試は、口頭試問（国語・理科・算数）と500mのグラウンドを1周。21年2月ペーパーもなく、そんな時代だった。入学後も、女学校は焼失したので、63部隊の建物で机もなく、座布団でぎゅうぎゅうに座って、膝の上にノートを置いていた。上級生には机があったようだ。片道4kmの道を、徒歩で通学した。

阿部幸子

(終戦当時11歳 居住地…東京都世田谷区自宅)

I 終戦の日、その前後のこと

Q：何歳でしたか？ どこに住んでいましたか？

11歳（国民学校6年生）。東京、世田谷に住んでいました。縁故疎開で一旦は相模原の親戚に預けられましたが、この年の5月には東京の家族の元に戻り、都内で暮らしていました。

Q：どのように終戦を知りましたか？

学校が軍隊に接収されていたので、残留組の児童は地域ごとに置かれた分教場（私たちは近くの材木置き場の2階）に通っていましたが、8月15日正午には家に居るようになると言われて帰宅していました。両親、姉とともに正午の玉音放送を聞き、父親から戦争が終わったことを告げられました。

Q：知ったとき、どう思いましたか？

父の肩を落とし力なくうなだれている姿を見て、大変なことが起こったと思ったが、母の安堵した姿に慰められたのを覚えています。ともかくホッとしました。

Q：終戦の日の前後で覚えていたことは？

終戦前の数か月は、連日のように空襲があり、特に夜間の空襲では、頭の上に真っ赤に燃える飛行機が落ちてくるようで、もう逃れられないと思うことがしばしばでした。家は郊外にあったので大きな火災からは免れましたが、罹災した負傷者が逃れてきたり、近くの高射砲陣地からの爆弾が頭上をかすめたり、悪夢のような日々でした。今、夏になると近くの玉川上水沿いの土手に、真っ赤なノカンゾウの花が咲いています。この花が咲くと、何時爆弾が落ちてくるかと恐怖におののきながら逃げた道にもノカンゾウが咲き乱れていたことを思い出します。

Ⅲ 戦争中のこと

Q：戦争で生活環境は変わりましたか？ どこに住んでいましたか？

東京、目黒区で生まれ、昭和20年（1945年）春までそこに住んでいました。病弱だった父の強い希望で学童疎開には参加せず、6年生の4月からは親戚を頼って、一人で神奈川県相模原に縁故疎開をすることになったのです。そこは陸軍病院の官舎でしたが、浄水池を管理していたので周囲には全く家がなく、学校には1駅分を

歩くか車で送ってもらって通いました。空襲警報が発令されると直ぐに帰宅させられ、林の中の道を一人、徒歩で帰る毎日でした。学校では大事にされましたが、かえって学校にも級友にも馴染めずに、淋しい日々でした。そんな日が続き、預かってくれた親戚の家ではとても心配してくれて、結局、1か月足らずで東京に戻ることになりました。

目黒の家に戻って間もなく、家が強制疎開で壊されることになったのです。知人のお世話で、取りあえず世田谷に移り住むことになり、慌ただしい引越しの日々が始まりました。終戦を挟んで何回か転居し、やっと落ち着いて間もなく、父は急逝しました。

Q：ご家族のこと、お世話になった人のこと

両親と女学校2年の姉と一緒にでした。食糧が乏しかった時代ですが、父の知人の農家の方々に大変お世話になりました。ある日、やっと手に入った身欠き鯉の煮物をご馳走していただきましたが、好き嫌いの激しかった私にはどうしても食べる事ができず、今も苦い思い出として残っています。

Q：空襲ほか、直接罹災の経験は？ 敵機や敵兵を見たことは？

郊外ではあったが東京にいたので、頻繁に空襲に遭いました。今も頭の上を通過するB29の音が耳の奥に残っているように思えます。

Q：どんな服装でしたか？

おかつば頭で、もんぺをはき、ブラウス又はセーター、それに防空頭巾を持っていました。

Q 食への思い

夕方になるとイワシの配給があり（バケツに一杯）、イワシのお団子が食卓に上がることが多かった。母は丁寧に骨抜きをしていたのに、喉に骨が刺さり、私はその後もイワシ恐怖症です。雑炊の配給があり、お鍋をもって買いに行ったことがあります。大行列の末入手できたので、とても美味しいと思いました。食糧に特に不自由をしていたわけではないが、よく「すいとん」を食べていました。

Q：悲しかったこと、辛かったことは？ 叱られたことは？

初めて家を離れ、たった一人で他人の家（親戚ではあったが）に預けられたことは、ただただ悲しく、淋しかった。

Q：学校、勉強、先生、友達のこと 勤労奉仕、供出など

小学校に入学し、国民学校で過ごし、小学校に戻って卒業したので、特別な学年だと思いません。国民学校5年まで親しかった友達と、疎開のために別れ別れになったことは辛かった。女学校で一緒になろうと約束し、結果的にはそのようになりました。国民学校には将校が常駐していて、とても怖かった。高学年では教練が課され、全校児童は連日駆け足でかなりの距離を走らなければなりません。私は小さくて痩せており、この日課がとても辛かった。小1は男女組、児童数が減った5年生も男女組でした。小さかったので、先生からも男子からも可愛がってもらえたようです。

Q：将来の夢は？

家に籠っていたので、よく本を読み、絵を書いていました。多分、父の勧めもあって将来は美術学校に行つて、絵描きになりたいと思つていたようです。

IV 戦争後のこと

Q：家族構成は？ どこに住んでいましたか？

両親と姉、私の4人。終戦の年の10月に父が他界し、母、姉との3人暮らしに。東京世田谷区。その後、生まれ育つた目黒区に転居しました。

Q：食べもの

配給になる食パンが美味しかった。行列をしてパンが焼けるのを待ち、焼きたてのふんわりした山型食パンを手にした時は、宝物のように思えました。

Q：悲しかったこと、辛かったことは？ 叱られたことは？

悲しかったことは、父の突然の死。その日に咲いていた白い木槿の花を見るたびに、胸が痛みました。

Q：学校、勉強、先生、友達のこと

女学校で、友達と再会し嬉しかった。女学校1年の時には、学校は半分以上焼失し、青空教室の経験もしました。何故か、探検ごっこやターザンごっこに夢中になっていました。勉強を忘れた1年間で、急に成績が下がり慌てしましたが、あんなに自由を味わつたことはありません。その後、物理の先生からキュリー夫人の話を聞いて憧れ、将来は科学者になりたいと勉強に励むようになりました。

齊藤智恵

(終戦当時11歳 居住地…山形県東置賜郡宮内町自宅 現南陽市)

I 終戦の日、その前後のこと

Q::どのように終戦を知りましたか？

重大発表があるとの事で、ラジオの所に家族と共に集まり、放送を聞きました。

Q::知ったとき、どう思いましたか？

放送は非常に聞き取り難く、自分では意味が解りませんでした。大人が戦争に負けたのだと言うのを聞いて、そうなんだと思いました。

Q::終戦の日の前後で覚えていたことは？

当時私は国民学校の6年生。あの年は夏休みは殆どなく、確かお盆をはさんだ1週間だけが夏休みでした。学校では授業は半分くらい、あとは勤労奉仕と称して、働き手が出征した後の田んぼでいなご取りやじゃが芋の花つみ(花がつくと芋の成長が悪くなるとか)、また松の根っこ(松根油という油分を取るため掘り起こしたのも、ガソリンの代わりにする)を運ばされました。終戦になって、電燈の覆いを取り明るい夜になって初めて「ああ戦争が終わったのだ」と実感しました。

また、終戦になって間もなくのことでした。今まで使っていた教科書にある不適切な文言(戦争の相手国、米英に対する敵意を高め、皇軍(日本軍のこと)を褒めたたえる、戦意高揚のための箇所)を墨で塗り、またページごと切り取る作業をさせられました。教科書の厚みが半分以下になるほどでした。

それは子供心には大変な衝撃でした。ついこの間まで鬼畜米英、撃てし止まむ、果ては日本は神国だから元寇の時のように神風が吹く、敵が上陸して来たら竹槍で戦う等々と言っていたのが、一転して変わったのですから。当時の教科には薙刀の時間もありました。

II 戦争前のこと

Q::家族構成は？どこに住んでいましたか？

祖母、父母、私、弟3人、使用人は男4人、女1〜2人、山形県宮内町(現南陽市)に住んでいました。

Q::家の中で記憶に残っていることは？

商家でしたから、年中使用人が住み込んでいて、忙しそうでした。

Q：どんな服装でしたか？

髪型はおかっぱ頭。冬場暖房は火鉢とこたつでしたから、ずいぶん厚着、時には和服も着せられました。

Q：食べものごと

江戸時代米澤藩でしたから、食べ物は質素で野菜中心。時にうなぎは大御馳走、鯉も時々食べました。

Q：楽しみ、大切に思っていたことは？ 大事にしていたものは？

本を読むのが何より好き、暇があれば本を読んでいました。大切にしていたのは、当時東京で学生生活を送っていた父の末弟のお土産の玩具（テーブル椅子のセット、小さなブランコ等）。

Q：悲しかったこと、辛かったことは？ 叱られたことは？

祖母が非常に厳しい人で、他人に迷惑をかける事のないようにと、厳しくしつけられました。

Q：学校、勉強、先生、友達のこと

まだ低学年で、静ちゃんと呼んでいた友人と、よく同じ本を一緒に読んでいたと思

います。とにかく本が好きでした。

Ⅲ 戦争中のこと

Q：読んだ本、好きだった本は？ 尊敬していた人は？

手近にある本は、手当たり次第何でも読みました。『小公女』『小公子』など、また野尻抱影さんの星の本も大好きでした。灯火管制下で星空がとても綺麗だったのを覚えています。

Ⅳ 戦争後のこと

Q：家の中で記憶に残っていることは？

繰上げ卒業で学徒出陣した父の末弟の戦死の公報が届き、どうしても受け入れられなかった祖母、父もさすがにあきらめて、お葬式を出しました。

Q：どんな服装でしたか？

終戦の翌年女学校に入り、セーラー服、でもズボンをはいていたように思います。ご他聞にもれず、三つ編みにしたお下げでした。

Q：食べものこと

田舎でしたから、戦中戦後を通して食べ物の特に不自由する事はありませんでしたが、内陸なので魚肉類は少なく、主に野菜中心だったと思います。

Q：楽しみ、大切に思っていたことは？ 大事にしていたものは？

小学校の頃は運動が苦手でしたが、女学校に入ってから運動の楽しさを覚えました。祖母はお転婆を嫌いましたので、かくれてのことでした。

Q：悲しかったこと、辛かったことは？ 叱られたことは？

私をととても可愛がってくれた叔父の戦死は、悲しいものでした。

Q：学校、勉強、先生、友達のこと

昭和21年（1946年）に女学校に入りました。学制改革があり、新制中学が発足。私たちは高等学校の併設という事で、3年間下級生はおりませんでした。

Q：読んだ本、好きだった本は？ 尊敬していた人は？

女学校に入り、国語の時間に初めて夏目漱石の『我輩は猫である』を読み、漱石の面白さに目覚めました。

青木 怜子

（終戦当時10歳 居住地：神奈川県藤沢市自宅）

I 終戦の日、その前後のこと

Q：どのように終戦を知りましたか？

ラジオ放送（玉音放送）を聞くように、町内会（隣組）から連絡があり、自宅で放送を聞き、それにより知る。

Q：知ったとき、どう思いましたか？

「えっつー！終わったの？」
一瞬の心の空白と、本当に終わったのかという不安感。やがて、実感として終わったのだという安堵感。

Q：誰と一緒にいましたか？ その人はどんな様子でしたか？

両親と。父母は、戦中から、戦争は何時か終わる、これからの世界で生きるに必要なのは広い世界観と外国語、と言いつけてきた人たちではあったが、玉音放送を聞いていた2人からは、今、起きたことの重大性を感じ、敗戦の重みに覚悟を決めたかのような気配が窺われる。

Q：終戦の日の前後で覚えていたことは？

- ・今までの不安（敵機襲来に怯え、防空壕への避難を繰り返して、灯火管制下の暗い部屋で過ごす夜）から解き放たれたことへの半信半疑の気持ち。
- ・停戦とともに、ピタッと止んだサイレン（空襲警報）の音。しかもそれが3日余も続く不思議さとともに、余りの静寂に耳が痛くなかったこと。
- ・終戦後2週間ほどした頃、近くの海岸で、相模湾一带、横須賀に至るまでの沖合を埋め尽くした真っ黒な米海軍の軍艦が並び、異様さと恐怖を覚えたこと。
- ・ある夜、夢で、校舎内に攻め込んだ米水兵に追われ、すくんで足が動かさずになされたこと。

II 戦争前のこと

Q：家族構成は？ どこに住んでいましたか？

- ・昭和10～11年（1935～36年）両親、兄、手伝い【誕生後の1年間、横浜】
- ・昭和11～14年（1936～39年）両親、兄（のち単身帰国）、手伝い【アメリカ】
- ・昭和14～16年（1939～41年）母、兄【藤沢本町↓鶴沼の自宅】

Q：家の中で記憶に残っていることは？

昭和11～14年（1936～39年）広い部屋の室内と、裏庭に巻き取り式の洗濯干しロープがあったこと。14年～16年（1939～41年）家が狭く、和室が珍しかったこと、和式手洗いが怖かったこと。当時、近所の家に無いものがあったこと（電気冷蔵庫、オーブン、電動ミシン、ままごとなどアメリカ製玩具、等身大の人形とその乳母車、クリスマス飾り、短波放送入りラジオなど）。外地赴任で父親が不在。時々母方の祖母が訪ねて来ていたこと。

Q：どんな服装でしたか？

ワンピース（母の手製だが、生地が米国製で色合いや模様がオシャレ）。髪型は短い柔らかカット。持ち物は、小さなチョコレート色のハンドバッグ。等身大人形のメリーちゃん。

Q：食べもののこと

朝食はパンで洋食。夜は和洋折衷の家庭料理。美味しかった思い出は、母手作りの型抜きクッキーやアメリカ風ハンバーガー、オーブングリルのチキン、祖母持参の玉子パン。従兄とお使いで買ってきたタイ焼を、従兄や兄のマネをして「釣れた！」と逆釣りにしてかじり、叱られたこと。

Q：楽しみ、大切に思っていたことは？ 大事にしていたものは？

入学前は友達がなかったの、母や母の友人に遊んでもらったこと。アメリカ時代は、子供ながらも皆でドライブや映画に連れて行ってもらったこと。シャーリー・テンプルのブロマイド。

Q：悲しかったこと、辛かったことは？ 叱られたことは？

父が赴任地から帰り、再度、新たな任地に出かけて行った日の朝。起こされず、見送れずに泣く。叱った人は、大方、父母。マナー、聞き分けがない、大人の話に口をはさむな、など。他に教師。

Q：学校、勉強、先生、友達のこと

学校はミッシヨンスクール。体が弱かったので、静かな環境。クラスは30人ほどの少人数。半数は幼稚園から。敵国帰りの私を友達は特別扱いしなかったが、教師は特異視し、理なき偏見。

Q：読んだ本、好きだった本は？ 尊敬していた人は？

題名は失念。子供向け雑誌ながら人生の逸話が一杯。やり直せない人生。仕事熱心に宿る魂の話。

Q：将来の夢は？

余り考えたことはなし。

Ⅲ 戦争中のこと

Q：戦争で生活環境は変わりましたか？ どこに住んでいましたか？

小学入学時から学校制度が変わり、小学校は国民学校に。教科書も改訂され、全国統一型の愛国・軍国主義型教育にと転換。すでに開戦を前にして学校教育の環境変わる。戦況悪化し、疎開児童の受け入れや空襲に際しての訓練などで学業は非常事態に。私生活では、荷物を田舎に疎開させ、自宅の庭に戦時菜園や防空壕を作つては、自給自足と避難の異常な日常生活。

Q：ご家族のこと、お世話になった人のこと

母方の祖母や叔母が焼け出されて同居。父は外地赴任で体調を崩し、帰国後は自宅静養。家族の人数は増えたが、経済的・労働負担は家族に大。病身の父の栄養源確保のため、自宅でヤギを飼いミルクを得る。農家に買い出しに出かける母。引き換えに家から消える父の背広や母の着物。

Q :: 空襲ほか、直接罹災の経験は？ 敵機や敵兵を見たことは？

直接空襲には遭わなかったが、近隣地帯が燃え炎の夜空を仰ぐ。下校途次、敵機に狙われ機銃掃射を受けたが、茂みに隠れて無事。しかし、落とされた焼夷弾の不発弾が、下校通路で翌日発見。

Q :: どんな服装でしたか？

自宅では上下もんぺ。通学時には、制服の上着にもんぺのズボン。髪型は強制通達により、全員おかつぱ。通学所持品は防空頭巾と炒り米の入った袋や水筒を櫛掛けに。

Q :: 食べものごと

庭の畑で採れたじゃが芋、里芋、水っぼいさつま芋やカボチャの煮付け。麦も脱穀しお米に混ぜる。一升瓶に入れたお米を棒で突き精米。すいとん、おじや。海岸で海藻を拾い、煮出してお醤油代わりに。カボチャの種も天日干しでおやつに。海水から塩を取るため電気ヒーターで煮立てたが、吹きこぼれでヒーターを破損し、大損害。

Q :: 楽しみ、大切に思っていたことは？ 大事にしていたものは？

疎開の荷を減らすため、焼かれてしまった玩具や人形の数々。大事なものを失った

喪失感。

Q :: 悲しかったこと、辛かったことは？ 叱られたことは？

全てが悲しく辛く。敵国帰りの帰国子女は、先生の覚えめでたくなく、何かと注意。なぜ？

Q :: 学校、勉強、先生、友達のこと 勤労奉仕、供出など

算数の時間、そろばんの練習に取り入れられた「轟沈ゲーム」。間違えると、「ゴーチン！」と言って床に座る。疎開のため絶えず入れ替わる友人たち。一期一会の人も。奇遇で得た友人も。兄は中学生で、近くの軍需工場に学徒奉仕。金銀など貴金属の供出。あれはどう使われたのだろう。学校構内の講堂には、軍の物資として缶詰入りの大きな木箱が床にうず高く積み、その箱の上に生徒たちは座布団を敷いて坐った。あの缶詰は何処に消えたのだろう。学校も関知しないほど、敗戦直後、あつという間に、軍により搬出されたという。

Q :: 読んだ本、好きだった本は？ 尊敬していた人は？

あまり記憶になし。『冒険ダン吉』や『のらくろ』などは皆の人気漫画。

Q：将来の夢は？

無し。どうやって持てる？

IV 戦争後のこと

Q：家族構成は？ どこに住んでいましたか？

両親と兄と私の4人家族。荷物以外は疎開することなく自宅に住んでいた。

Q：家の中で記憶に残っていることは？

消えた大きな冷蔵庫。戦後、急速に経済力を持った人たちが現れ、近所の家で買い取ってくれる。象牙に彫り込んだ大中小の像が並ぶ置物も何時か処分。一方で、やつと疎開先から戻った荷物に歓喜。その後、父の健康も回復し、日中、家で床に就く人がいなくなったこと。

Q：どんな服装でしたか？

学校では、上着、スカートとも制服が復活。自宅では、ワンピースか、スカートとブラウス。冬にはフラノのズボンを着ていたことも。髪型は、床屋が営業再開したので床屋でカット。三つ編みが流行ったが、私はショート。革靴がなかったので、父のゴ

ルフバッグを近所の靴屋で解体してもらい「新調」。やがて町の靴屋で市販の靴を買ってもらったが、却って気恥ずかしい思い。戦中の「欲しがりません、勝つまでは」、国が負けてもなお健在。あまり新しいものを買ってもらった覚えなし。オーバーだけが例外（駐留軍の放出物資で、ベージュに矢羽模様のアメリカ製上質ウール。ポケットに金の留金の付いたチャックがなかなかスタイリッシュでご自慢）。

Q：食べもののこと

戦後、進駐軍のララ物資で、乾パンが配給。なぜか、1食分は乾パン11個と換算。配給の中に初めてお砂糖が登場。使いに出た帰り道、思わず、舐めてみる。止まらずに、また、舐めた。帰宅し発覚したが、叱られることはなかった。さもない事と思えば、とても叱れなかった、と母。一方、進駐軍に接收された近隣の家で残飯が時折配布。母は絶対嫌だと、列に加わらなかった。

Q：楽しみ、大切に思っていたことは？ 大事にしていたものは？

終戦直後にして、小学校で英語が教科に。発音の綺麗な先生に導かれ、英語の勉強。やがて中学に入り、新しい学科が増え、クラス担任でない専科の先生の下、授業が楽しみとなる。放課後や昼休み、友達とテニスやドッジボール。親しい友達との交

流。夏季休暇中に毎日書いた手紙。やがて百人一首や映画鑑賞、合唱、野球放送に夢中と、遊びも多くなる。大事にしていたものは、友好関係か？そして、高校1年の時、受洗。

Q：悲しかったこと、辛かったことは？ 叱られたことは？

母が一時、病気になること。看病に来てくれた人たちに助けられたが、苦手な家事炊事は苦痛。

Q：学校、勉強、先生、友達のいつ

終戦直後、夏休みが明けて登校。もんぺではなく、何を着て行ったらよいか、迷う。学校では、終戦により日本が置かれている立場について先生が説明。当分は、今後の見通しの見えない中で、新たな道のりを模索する日々。夏休み明けから学ぶはずの教科書の項目「神風」は、学ばないことが告げられ、この項目をはじめ、指示を受けたいくつかの部分を、皆、黙々と墨で塗りつぶす。教室の中央にあった神棚が外され、代わってグレコの聖画が架けられる。「見よ、落下傘」など軍国調の歌はすべて歌ってはならないとされ、代わりに古来の唱歌が音楽の時間に歌われる。大嫌いな「海ゆかば」を歌わなくなったのは嬉しかったが、「見よ、落下傘」や従軍

看護婦を讃える「真白き富士」が歌えなくなったのは残念。2学期の10月頃には、小学校でも英語が新たな必修教科となり、昨日まで鬼畜米英であったアメリカの歌を英語で習う。その後、国民学校の呼び名は廃止され、一般には小学校、そして私どもの学校では初等科の呼び名に戻った。ちなみに、学校制度が大々的に改められ、新たに導入された六三三制のもとで、中学に入学した時、私たちは、新制中学1年生の第1期生となった。(国民学校といえ、新制中学といえ、すべて先駆的な学年となる)。

Q：読んだ本、好きだった本は？ 尊敬していた人は？

ルイザ・メイ・オルコット『若草物語』、竹山道夫『ビルマの竖琴』ほか多数。尊敬していた人は世界的な偉人で、誰かあったはずだが、今は、失念。カトリックの学校でありながら、仏教の慈愛の教えを引いて愛を説いた尼僧の校長に啓発されたことも。

Q：将来の夢は？

大学に進み、語学を習得してそれで就職したいと。そしていつか今一度アメリカに戻ってみたいと。

辻英子

（終戦当時9歳 居住地・父の任地 北朝鮮咸鏡南道元山府徳源 トクゲン 現トクウォン

父中林賀一郎（1904～72年）の手記『歩みの跡』を参考にした。

I 終戦の日 その前後の1ヶ月

Q：何歳でしたか？ どこに住んでいましたか？

9歳。北朝鮮咸鏡南道元山府徳源（トクゲン 現トクウォン）。

Q：どのように終戦を知りましたか？

夏休み中なので家にいて、「日本は戦争に負けたらしいよ」という母の言葉を記憶している。玉音放送を母や弟、近所の人たちといっしょに拝聴した。

Q：知ったとき、どう思いましたか？

天皇（神様）の音声を初めて聴き、不思議に感じた。

ああ、これでもう学校には行けなくなるのだ、という思いが一瞬頭をよぎった。

Q：誰と一緒にいましたか？ その人はどんな様子でしたか？

母（前橋市上泉町出身 37歳）と弟（5歳）、妹は1歳6か月。父（42歳。前橋市横

手町出身 全羅北道京城師範学校・水源高等農林学校長。元山公立中学校・徳元公立農業学校教頭）は昭和20年（1945年）8月12日に応召、元山、柴田部隊に入隊し留守、母は無言のままであった。

Q：終戦の日の前後で覚えていることは？

8月21日、ソ連軍上陸までのある日、母は元山の中心街にある朝鮮銀行に預けた全預金を下ろすため、4～5km余の道のりを歩いて一人で出かけ、私は、弟妹3人で終日留守番をした。母は無事目的を果たして戻った翌日、銀行は閉鎖され、日本人の預金は没収されたという。凜とした母の姿を誇らかに仰ぎ、尊崇の念を覚えたのはこのときであった。

咸鏡南道元山府大和町（教員官舎）に居住、元山（ゲンザン 現ウォンサン）は北朝鮮最大の貿易港、日清、日露の戦争を経て軍事上の拠点となっていく。永興湾要塞司令部・海軍防備隊が設けられていた。20年（1945年）4月～21年（1946年）2月間は、同府近郊の徳源（教員官舎）に居住。父は8月12日に元山公立中学校のほぼ全教員と入隊、同21日、約9千名のソ連軍が永興湾より上陸、占領下となる。22日、軍進駐柴田大尉の命により兵1人とともに市内のソ軍の配備状況視察、

午後帰隊したが、営内には友軍の姿皆無く、ソ連軍が充満し、やむなく要塞本部前の歩哨に連絡、武装解除された。友軍がソ連駆逐艦内に連行されるのを遠望、多田少将が副官とともに白旗を掲げ、自動車でソ連の駆逐艦に行くのを見送り、ソ連の銃射を浴び危険を感じ、部隊との連絡ができず兵と別れ、徳源に帰る。配置されていた部隊は直ちに武装解除され、徒歩でシベリア送りとなったようだ。次いで日本人の警官、教師、医師をはじめ16歳以上の男子はことごとく徴用され、ソ連に連行される不穏な日々が続いた。

12〜22日の父不在の間、母は安全のために元山の親しい日本人の家に身を寄せようと考えてか、夜に入り近郊の徳源の家を後にした。母は持てる限りの生活必需品を背負い、私は妹（1歳6か月）を負い、弟（5歳）の手を引き、人っ子一人いない真っ暗な4kmの道―勤労奉仕の松根掘りで通い馴れた道―を急いだ。背中の子は温かかった。父の帰還は運命としか言いようがない。同府最大の部隊の中であつた2人だけがたまたま拘束外に置かれたのである。のち、進駐のソ連兵が家にも来るこゝとがあり、父はその度に裏山や農学校の畑に身を隠した。危険を知らせてくれたのは、いつも朝鮮人学校の小使や教え子たちであつた。38度線以北で、ソ連に抑留さ

れた日本軍は7万6千人にのぼるといふ。（KN〈父〉の手記『歩みの跡』による）
ほどなく住宅は接収され、徳元修道院の朝鮮人信者の家族居住地内に、日本人の家族が結集した。隣人に司祭で見あげるような体躯のトウマ先生（沖繩出身）、初めて英語を教えてくださいださつた修道女の鈴木先生がいて、2人は人影のない道を毎日徒歩で、遠くに望む大修道院に通つていた。ここでの生活は、朝鮮の人々との初めての交流の場でもあつた。美しい夫人や子どもたち、秋にはキムチ作りに賑わう召使の姿が行き交つた。そこに、父親（教員）は入隊し不在、母親と学齢前の男の子3人の家族がいた。翌年3月、トウマ先生は若い修道士と2人でこの一家4人を山越えて南鮮に送り届け修道院に戻つて行つた。我家も近隣の家族十数名と山道を行き、国境近くに辿り着いた日、大平原の燃えるような残照を背に近付いてくる2つの人影、「教会とともに…」の言葉を残して北に向かつた先生の最後の姿は、私の人生に刻まれた衝撃的な出来事であつた。

II 戦争前のいと

Q：家族構成は？どこに住んでいましたか？

- ① 父 母 私 使用人（官舎付のオモニ）猫 全羅北道長溪（0～3歳）
② 父 母 私 弟 群山（3～5歳）

Q：家の中で記憶に残っている思い出は？

① がらんとした屋内の記憶はないが、広い庭は菜園と花畑で、ダリアが咲いていた。両親とも花造りが趣味だった。

② 祖父（母の父親 上泉町小学校長）が春休みに内地から和服姿にトランクのいでたちでやって来て逗留、賑やかになった。暖房は、オンドルと石炭ストーブ。長火鉢に湯気を立てる鉄瓶。

Q：どんな服装でしたか？

母は鬢髪、和服。父（長溪公立尋常小学校校長・長水尋常小学校校長・群山昭和公立尋常小学校・朝鮮総督府全羅北道道属視学）は短髪、国民服。このころ父は、『朝鮮における甘藷栽培の実際』京城1935年刊行。咸鏡南道元山公立中学校へ転勤（16年（1941年））、菜園で甘藷を栽培したが、食べた記憶はないので、北鮮は低温のため収穫はできなかったのか？

Q：食べものについて

① 家庭菜園で採れた大きな真っ赤なトマト。蒿芦（チシャ、レタスのこと）を栽培。みかんや木箱入りの紅玉林檎、栗、松茸、和菓子、干バナナ、母手作りの御節料理は来訪者を喜ばせた。

② 庭に梅の大きな木があり、夏の宵には地面から蟬の幼虫が沢山穴から出てきて羽化するのを父と観察した。母は梅の実で「梅肉エキス」や「梅酒」を造った。

Q：楽しみ、大切に思っていたことは？ 大事にしていたものは？

楽しみは、官舎の庭を隔てた向かいに、土地の人家の藁葺き屋根があり、その全面に生え繁る緑の葉の間に転がる大きな果実（匏・瓠（ひさご）・パガジ、あるいはバツク（Bak）とも）にみとれたこと。夕顔など、うり科の植物の総称で、果実は食用（干瓢）、乾燥させて柄杓や穀物の器として用いる。のちに知る「七夕」伝説の姫は、その蔓に上り昇天し、天稚彦（彦星）を訪ねる話である。

月刊の『幼稚園の友』？が届くのが、待ち切れなかった。

大事なものは、黒白の猫、五段雛、お正月の着物、リボンの簪。

Q：悲しかったこと、辛かったことは？ 叱られたことは？

・内地から単身赴任した父の同僚（盲腸で落命）の葬儀で火葬場に行き、音をた

てて鳴る炎のゆれる窯の前で、母親を亡くし、父親に抱かれ泣き叫ぶ見知らぬ男の子を見たとき、死の恐ろしさが迫ってきた。

・15年（1940年）冬、近くの工事現場でトロッコに乗り日の暮れるまで遊ぶのに夢中になっていたためか、2月に肺炎に罹り弟（9か月）と枕を並べて床につき、ようやく命拾いをしたこと。

・七輪に熾す炭火の緋色に惹かれ視入り、掴もうとして使用人（オモニ）にひどく叱られたこと。

Q：学校、勉強、先生、友達のこと

就学前…群山では、『幼稚園の友』を毎日暗誦できるまで母の前で朗読するのが日課だった。近所の友達と広い野原をころげまわり虫を取ったり、トロッコに乗って遊んだりした。

Q：読んだ本、好きだった本は？ 尊敬していた人は？

こどもの絵本。月刊の子ども向け雑誌『幼稚園の友』か？
尊敬する人は父。人力車や黒塗りの車が迎えにきて、私もときには便乗させてもらった。

Q：将来の夢は？

まだはっきりした輪郭はなかったように思う。お巡りさんは、怖い人。病気を診てくれるお医者さまには、尊敬に似た思いを抱いていたように思う。当時、天然痘は怖い病気の1つで、顔中大きな痘痕のある医者もいた。

Ⅲ 戦争中の日々

6～9歳

Q：戦争で生活環境は変わりましたか？ どこに住んでいましたか？

17年（1942年）3月、元山泉町公立国民学校入学。（1883年開設 前泉町公立尋常高等小学校）。20年（1945年）4月に、元山府の近郊徳源に移転。同8月、4年次に終戦、21年（1946年）3月引き揚げ。

Q：ご家族のこと、お世話になった人のこと

18年（1943年）、戦局困難をきわめ、終日元山航空隊その他に勤労働員のため、父は元中の生徒を引率し作業に当たる。母も勤労奉仕に出かける日が増えた。父は、20年8月12日に入隊、奇跡の帰還後は徳源の官舎の庭でキュウリ、ナス、カボチャ

等の食糧生産、子どもに体験させるために養蚕もした。日本人向けの食糧の配給停止の声の上がるなか、大山さん（朝鮮人）の援助でことなきを得、闇夜に日本人家族が山を越え、南鮮の開城に向け村を脱出する日に、その一家は、「ご無事で…」と見送ってくれた。旅の途次、「大山さんは殺された…」と風聞するも、不明。

Q：空襲ほか、直接罹災の経験は？ 敵機や敵兵を見たことは？

空襲はなかった。敵機2機が北方から元山上空に現れ、飛行機雲をたなびかせながら南へ向かい飛んで行くのを2度見た。アメリカのB29とも聞いたが、ソ連機だったか真偽のほどは分からない。元山航空部隊で見た双発機に比べ精鋭、不安がよぎった。

Q：どんな服装でしたか？

19年（1944年）以降、母はもんぺ姿、丸髷（洋髪禁止）。父は国民服。私はもんぺ姿に防空頭巾と救急袋・水筒・弁当を左右の肩にかけて通学、緊急の外出に備え夜は、衣服は枕元に畳んでおいた。

Q：食べもの

16～19年（1941～44年）：毎朝配達された牛乳、丸い樽に漬けた明太子、子どもの身長より大きなカニや鰯の干物等豊富。亀の子せんべいや最中、母の御節料理等。

20年…おじや、すいとん、おかゆ等。

Q：楽しみ、大切に思っていたことは？ 大事にしていたものは？

赤レンガ造りの2階建ての聳える校舎を背景に、縄跳びや籠目かごめ、鬼さんこちら等の遊び、滑り台やジャングルジム、渡り棒、吊り輪、鉄棒等。掌の肉刺は剥け、帰宅するとその手入れをするのが日課だった。家では着せ替え人形、お手玉、オハジキ、弟と芝居遊び。

Q：悲しかったこと、辛かったことは？ 叱られたことは？

春休み中の宿題帳に「神社参拝」という頁があり、毎日長徳山麓にある元山神社に参拝した。近道の山路には、早春の山中で葉に先だつて楕円形の花穂を付けたネコヤナギの穂の皮むき（中から灰白色の軟毛のつややかな穂が現れる）に時を忘れ、日暮れ近くになって帰宅し、母にひどく叱られた。玄関先で泣いている私を、帰ってきた父が家に入れてくれた。母はなにも言わなかった。

Q：学校、勉強、先生、友達のこと 勤労奉仕、供出など。

16年12月8日、太平洋戦争が始まった。1、2年の唱歌は「金剛石も磨かずば」「若鷺の歌」「海ゆかば」等。校舎左手の元山神社を全児童は毎月8日には参拝。3年

次に入ると、飛行機を飛ばす油採取のため連日のように4 km離れた徳源の山林に松根掘りの勤勞奉仕。その一隅に徳源大修道院があった。庭にはドイツ人の修道士の姿が見られ、井戸から汲みあげた冷たい水は乾いた喉と空っぽになった水筒を潤してくれた。廃品回収、家の中の鉄瓶・長火鉢・釜等は姿を消した。燃料にする向日葵、唐胡麻を家の庭で栽培、兎手柏の実等を供出した。学校での学習時間は激減した。

Q::読んだ本、好きだった本は？ 尊敬していた人は？

『古事記』(岩波文庫)をはじめ父の本棚にあった本を乱読した。尊敬していた人は父。

Q::将来の夢は？

鉄棒競技の回転や棒渡りの日々で、落下は数知れず、サーカスのブランコ乗りに憧れた。

IV 戦争後のこと

Q::家族構成は？ どこに住んでいましたか？

① 21、22年(1946・47年)・・・父 母 私 弟 妹 群馬県前橋市の父の実家へ帰郷(21年4月9日)。

② 23年～25年(1948～50年)・・・家族構成は同じ。渋川市(自宅新築、中学生時代)。

Q::家の中で記憶に残っているものは？

① 農家・・・広い部屋、縁側、土間を隔て馬小屋も隣接し、母屋裏にある物置の2階に藁布団もあった。中庭を隔てて蔵や蚕室があり、機織りも生活の一部で自給自足であった。

母の実家は現在指定重要文化財、明治以前からの生活環境が保持されている。

② 床の間 堀り炬燵。

Q::どんな服装でしたか？

引き揚げ前・・・若い女性は断髪。

帰国後・・・母の手作りの服。おかつぱ頭。当時の小学校では全員が自作のわらじ履き。4年次に、級に1足あてで運動靴の配給があった。抽選に当たって、うれしい思いと級友への遠慮もあり複雑な気持ち。

Q::食べもののこと

帰国時、山口からの車中で、隣席の紳士が差し出してくれた真つ白な2つのおにぎりの耀かしかったこと。帰国後は田舎暮らしで食料は豊か、食用油や砂糖はなく、朝鮮にはなかったさつま芋を食べた。手打ちうどんの美味しさ、ゆで汁は石鹼の代

用として洗髪に用いた。当時はクラスメートの髪に白い虱の卵がない児は稀であった。女子はだれもが虱取り用の竹製の梳き櫛を使用しており、大半は短髪だった。23年（1948年）から、父は教師生活の傍ら理論の実践化を志し給与をそれに当て、開墾、大麦・陸稲・桃・野菜作り、畜産（牛・鶏・豚・兎等）に励み、私も羊の毛を刈り、糸を紡ぎセーターを編んだ。近隣の農家の青年たちが集まってきて父は家で勉強会を催した。

Q :: 楽しみ、大切に思っていたことは？ 大事にしていたものは？

放課後、日の暮れるまで校庭でバレーボールに興じた。5年次に「白雪姫」、6年次に「リア王物語」を脚本化し自作自演。図書館の蔵書は乏しく、種本は不明。これが日常の遊びであり、文化祭の演目にもなった。中学2年次に、ベートーベンの歌劇「フィデリオ」を脚本化（『少女の友』に拠る）、自作自演し、群馬県中学生の部で1位を受賞。3年次に「おふくろ」を演じた。この頃、ワーズワースの詩の世界に耽り、想像の世界に遊んだ。大事なものは友達。

Q :: 悲しかったこと、辛かったことは？ 叱られたことは？

小学時代…帰国し5年転入時に教室で、国語の教科書の禁読の頁を墨筆で塗りつぶ

した日のこと。

初めてお金を手にした日…親戚の人々からもらった小遣を祭の出店で使い果たし母に叱られた。

Q :: 学校、勉強、先生、友達のこと

小学校、中学校時代は、男の先生は出征したので少なく、「代用教員」が多かった。25年（1950年）に入学した高等女学校では、前大連一中の教師で、優れた教員を輩出している化学の先生や、真山美保の「泥かぶら」の公演に強い感銘を受けた。演劇・ダンス・書道部・学友会活動に属し学校生活を楽しんだ。

Q :: 読んだ本、好きだった本は？ 尊敬していた人は？

小学校のころ、父が買ってくれた児童文芸雑誌・鈴木三重吉主宰『赤い鳥』。蔵の中にあった『主婦の友』を乱読。中学校時代は、長塚節『土』（岩波文庫）、『キュリー夫人伝』、『世界文学全集』など。

尊敬する人は、キュリー夫人、ゲーテ、ワーズワース、ロラン、ヘッセ。

Q :: 将来の夢は？

研究者（化学者）

廣田里子

(終戦当時9歳 居住地…富山県高岡市)

I 終戦の日、その前後のこと

Q::どのように終戦を知りましたか？

母、姉と一緒にラジオで玉音放送を聴いたが、ノイズで意味不明だった。ほとんど何もキャッチできなかった。詔勅特有の天皇の節回しで「堪えがたきを堪え、忍びがたきを忍び」だけが、妙にクリアだった。母は「天皇陛下がこのように激励されたのだから、これからも頑張りましょう」と言った。朝方、玄関先で「敗戦だ」という言葉を残して出勤する父を、見送る母が「神国日本です、街でそのようなことは慎んでください」と窘めていた。その後、午前中に続いて、500坪もあった裏庭で空襲後の燃料用薪作りのため灌木の枝切りなどをした。3時過ぎに帰宅した父の「これからが大変だ」という一言で、初めて私たちは敗戦を悟った。

Q::知ったとき、どう思いましたか？

記憶がないが、それまでの張りが一挙に消えたように思う。

Q::誰と一緒にいましたか？ その人はどんな様子でしたか？

父母と姉（1名）。
Q::終戦の日の前後で覚えていることは？
学校では、防空壕掘りの手伝い、農作業と避難訓練ばかりで、勉強の時間がなかった。多くのクラスメートが個人的に疎開していて、教室はガランとしていた。弁当泥棒が横行した。ドロボウは同じ学校の学童もいたようだが、外部からの侵入者（大人）もいたらしい。

II 戦争前のこと

Q::家族構成は？ どこに住んでいましたか？

富山県高岡市。父母、姉、お手伝いのおばさん。他に大学生の兄が京都にいた。

Q::家の中で記憶に残っていることは？

2階建てでかなり広く、ゆったりとした庭があった。木々の花や果物、花壇など。季節になると、庭先で伸子張りの作業をする母を、手伝うのが好きだった。

Q::どんな服装でしたか？

おかつぱ頭。

Q：食べものこと

毎朝のように、郊外の農家から、取れたての野菜を売りに来ていた。富山は新鮮な漁場に恵まれて、これも港から漁師のおかみさんが外商に来て、1匹なりの魚を玄関先でおろしてくれていた。

冬にはブリ、初夏にはピンピン跳ねる鯛が美味だった。数年後、東京に住むようになったとき、お店の魚がすべて切り身だったのには、本当がっかりしたものである。私は冬の越前ガニと、イカ刺しが苦手だった。

Q：楽しみ、大切に思っていたことは？ 大事にしていたものは？

大自然です。四季を通して、朝な夕なに立山の思わず息をのむような雄姿に見とれていました。

Q：学校、勉強、先生、友達のこと

就学前。幼稚園への入園を拒否したこと（年齢の割に体が大きかったので、勝手に目立つといやだと思いついて）。

Q：読んだ本、好きだった本は？ 尊敬していた人は？

兄や姉のお古の本が多かったが、私のために父に買ってもらった童話が大好きだっ

た。古事記などからの神話やイソップ物語や桃太郎、孫悟空などの本もあり雑多。

Q：将来の夢は？

就学前ですから記憶なしです。

Ⅲ 戦争中のこと

Q：戦争で生活環境は変わりましたか？ どこに住んでいましたか？

父が転勤族でサラリーマンだったので、はじめ借り上げ社宅にいたが、戦争末期には家主が空襲を怖れて社宅を処分したので、止むなく持家が変わった。焼失の懸念が強いので、投売り状態だったらしい。それが戦後の住宅難に大変な力となった。もう少し戦争が長引いていたら、運命は大きく変わったかも知れない。

Q：ご家族のこと、お世話になった人のこと

父母ともに地元ではなかったが、戦争中は随分と地元の方々に力になっていただいた。

Q：空襲ほか、直接罹災の経験は？ 敵機や敵兵を見たことは？

毎夜のように空襲警報の恐怖だけは十二分に味わったが、罹災はなかった。腹の底に響くあのサイレンの音だけは今思い出しても身の毛がよだつ。

Q：どんな服装でしたか？

もんぺ、防空頭巾、血液型を記入した名札（被災したときの身元確認のため）。

Q：食べものこと

自家生産のじゃが芋、さつまい芋、カボチャ、その他。今でも野菜造りに関心があるのはそのせいだと思っている。野の草もよく採った。しかし、土筆とイナゴ以外はもう見分けができなくなった（ヨモギ、ヨメナなど）。

Q：楽しみ、大切に思っていたことは？ 大事にしていたものは？

近くに防空隊の駐屯地があつて、兵隊さんが「煎ってください」といって、よく大豆を持ちこんできた。薪で火を起こしてつまみ食いをしながら香ばしく煎るのが、私の日課のようになっていた。あの香りは懐かしい。

Q：悲しかったこと、辛かったことは？ 叱られたことは？

小2の雛祭りの日、兄が出征した。その前夜、大勢の人が出征のお祝いに集まってきた、午後は賑やかな会食になった。夕方、その人たちも一緒に、入隊する兄を駅頭に見送った。大きな人の輪の中心に立った兄は、緊張の面持ちで凜々しく敬礼していた。

翌朝、登校直前、置き去りようになっていた兄の肖像写真が目にとまった。赤紙が届いたので、写真館で撮影したものだった。あくまで澄みきった写真の中の兄の目に、私の視線が釘付けになった。訳もなく涙がとめどもなく流れて「お兄ちゃん！」と言ってしまった。その時、母が姉と一緒に近づいてきて「早く学校へ行かない」と言いかけたが、2人とも言葉を呑んだ。

姉が重篤な腸チフスに罹患して隔離された。医薬品も食料も欠乏し、不治を宣告された。私は保菌の疑いが晴れるまで、2週間登校できず独りで家に留まった。初めて病棟に姉を見舞ったとき、張りつめていた心が弛んでわっと泣いてものが言えなかった。奇跡的に姉は全快したが、軍隊から一時帰宅した兄が、見違えるほど衰えていたのもつらい思い出だ。

Q：学校、勉強、先生、友達のこと 勤労奉仕、供出など

最後の頃は勉強などしていなかった。食糧が配給になり、母が長期間留守だったとき、私が町内15、6軒の配給のさつまい芋の分配を、取り仕切ったのを記憶している。4年生くらいだった！私がスコップでバケツに芋を入れて計量計りにかけて、大人たちに渡す仕事だった。

IV 戦争後のこと

Q：家族構成は？ どこに住んでいましたか？

父母、兄、兄嫁、姉、私（6名）。

Q：家の中で記憶に残っていることは？

兄は帰還後、結婚したが、軍隊で肺結核に感染していたことが2年後に判明、薬品のない時代で結局、亡くなった。

兄嫁は結局、再婚を拒んで、家庭科の高校教師を続けて自活した。穏やかで、面倒見のよい人柄で、定年退職後も仕事を続けたが、現在、90歳でホームにいる。

藤谷 堯

（終戦当時9歳 居住地…山梨県甲府市郊外疎開先）

藤谷文子の、夫堯からの聞き取り記述。

I 終戦の日、その前後のこと

Q：何歳でしたか？ どこに住んでいましたか？

9歳。山梨県甲府市郊外。

Q：どのように終戦を知りましたか？

母親から。母親と共に玉音放送を聞いた。

Q：誰と一緒にいましたか？ その人はどんな様子でしたか？

母親と一緒に。「負けた！負けた！」と繰り返し言っていた。

Q：終戦の日の前後で覚えていることは？

甲府の大空襲があり、山の麓の方で焼夷弾による絨毯爆撃があり、それを山の高い所から眺めたのを覚えている。まるで仕掛け花火のようだった。おばさんたちが悲鳴をあげていたのを覚えている。

II 戦争前のこと

Q：家族構成は？ どこに住んでいましたか？

母の両親、父親母親と自分と姉2人妹1人と使用人（女中）2人。山梨県甲府市。

Q：家の中で記憶に残っていることは？

大きい家で、使用人が大勢いた。大きい倉庫があり、軍の物資を保管させていた。

Q：どんな服装でしたか？

髪はぼうず頭、服装は国民服の子供版を着ていた。母親の手作りのズボンなど着ていた。

Q：食べものなこと

魚とかお肉（特に鶏肉は家で飼っていたものをつぶして食べた）。

Q：楽しみ、大切に思っていたことは？ 大事にしていたものは？

兵隊さんごっこをして楽しかった。

Q：学校、勉強、先生、友達のこと

まだ、幼稚園だった。

Q：読んだ本、好きだった本は？ 尊敬していた人は？

乃木大将を尊敬していた。

Q：将来の夢は？

海軍兵学校に入りたいと思った。軍人になりたかった。

III 戦争中のこと

Q：戦争で生活環境は変わりましたか？ どこに住んでいましたか？

甲府市内の空襲が激しくなり、甲府周辺の山宮へ疎開した。

Q：ご家族のこと、お世話になった人のこと

赤紙が来て父は出征した。元来戦争に反対していた父親が、新聞に発表された戦果を肯定的に見ていたことを覚えている。

Q：空襲ほか、直接罹災の経験は？ 敵機や敵兵を見たことは？

B 29が飛んでくるのをよく見たし、初めての飛行機雲も見た。

Q：どんな服装でしたか？

母親手作りの下着、ズボン、上着。髪はぼうず頭。

Q：食べものなこと

甘いものはなく、普通のコッペパンを見て、「白いパンだ！」と感動したことを覚

えている。

Q：楽しみ、大切に思っていたことは？ 大事にしていたものは？
兵隊さんごっこをして楽しんだ。

Q：悲しかったこと、辛かったことは？ 叱られたことは？
よく喧嘩をして負けて泣かされ、悲しかった。

Q：学校、勉強、先生、友達のこと 勤労奉仕、供出など
祖母、母親の持っている貴金属を供出したのを、記憶している。供出しないのは、
非国民だと言われると…。

Q：読んだ本、好きだった本は？ 尊敬していた人は？
小さい頃から一貫して乃木大将。

Q：将来の夢は？
海軍兵学校にあこがれていた。

IV 戦争後のこと

Q：家族構成は？ どこに住んでいましたか？

父母姉妹3人と自分。もう女中さんはいなかった。

Q：家の中で記憶に残っていることは？
疎開先から戻り、甲府の家は焼けたがタイルの風呂は残っていたので、その横に仮の家を作り、風呂に入ったことを覚えている。毎日新聞の記者が入りに来て、「ありがとう」の代わりに「ごちそうさま」と言ったことを覚えている。

Q：どんな服装でしたか？
焼け残った鯉幟の布で、母親が洋服を作ってくれて着たのを覚えている。

Q：食べものこと
母が着物を換えて食料品を調達してくれた。量を増やすために小麦粉やお芋などを入れた。

Q：楽しみ、大切に思っていたことは？ 大事にしていたものは？
アメリカに伯母がいて、たくさん美味しいものを送ってきたので、それが来るのが楽しみだった。アメリカにあこがれた。

Q：悲しかったこと、辛かったことは？ 叱られたことは？
空襲で逃げる途中の怪我が元で、大好きな祖父が終戦後3か月で（11月）亡くなっ

たこと。化膿が元だったようだ。ペニシリンがあれば！

中学校に通う時、自転車を通い、山梨の木枯らしの冷たさがすごく辛かったことを覚えてる。

Q::学校、勉強、先生、友達のこと

学校は大好きで、勉強は楽しかった。中学の頃に高校の勉強をしていた。

Q::将来の夢は？

星が好きになり、天文学者になりたかった。

東山セツ子

(終戦当時9歳 居住地::父の任地 満州国安東市中興区新玄街房産住宅)

I 終戦の日、その前後のこと

Q::何歳でしたか？ どこに住んでいましたか？

10歳、当時は数え年。満州国安東市中興区新玄街房産住宅31号。

Q::どのように終戦を知りましたか？

8月15日12時の玉音放送を、自宅で聞いた。

Q::知ったとき、どう思いましたか？

やはり、負けたのかと思った。母は日本の経済力をアメリカと比べると、日本の勝利は無理だと判断していたので、その影響かも。ラジオで船等の勝利を伝えていた割には、玉碎とか…。子供でも変だと思っていた。

Q::誰と一緒にいましたか？ その人はどんな様子でしたか？

自宅で母と姉(2歳年上)の3人。父は新京(現長春)に居た。

ラジオがよく聞こえなかったが、母が「…受諾」という単語を聞き取ったので、母は敗戦だと判断した。

Q：終戦の日の前後で覚えていたことは？

中国人（満人）の方が日本人よりも早く敗戦（日本の敗戦）を知って（感じて）いた模様だった。終戦を迎え、小学校校庭での校長先生のお言葉は、この学校校舎は満人に貸す（日本人は使えない、使わない）と。現実には、日本人の撤退で学校は使えず帰国まで登校はできず学校はなかった。これは現在の不登校とは大きく違う。一日中遊んだ。外ではカン蹴り、紙ヒコウキ飛ばし。とにかく一生分遊んだ。1年あまりの間でもう遊びたいとは思わないくらいいっぱい遊んだ。スケート（冬）、建築現場の足場をつかっつての鬼ごっこ、布地の人形造りなど…。

引き揚げ途中の漁船で真水のありがたさを身に染みて感じた。海の水は飲めない！漁船員が台風の時、帆の水を見事集めていた。それを日本人にも分けてくれたのはありがたかった。普段甲板などをぶらぶらしていた若い乗組員が、台風の時マスト先端まで、す早くのぼり、皆で帆を上手に操っていたことに見とれた。

II 戦争前のこと

Q：家族構成は？どこに住んでいましたか？

父母、姉、私。東京府世田谷区奥沢町。

Q：家の中で記憶に残っていることは？

間取りは2階への途中、階段に踊り場があった。1階の茶の間の外に4畳程度のベランダがあり、その外側に砂場あり。風呂場に水のシャワー。

Q：どんな服装でしたか？

おかつぱ。昼間は洋服でワンピース又はツーピース、夜は和服。

Q：食べものこと

食生活は、満足。戦前は食料豊富だったから。

Q：楽しみ、大切に思っていたことは？大事にしていたものは？

自宅での上映（部屋を暗くして、フィルムを回して見る。映画館のようだった。画面は小さかったけれど）。レコードをかけてもらうこと。

国内旅行で、ホテルや旅館に泊まること。

Q：悲しかったこと、辛かったことは？叱られたことは？

日々の生活に満足。迷子になっても、一人で母姉より先に帰宅したり、ベランダから砂場に飛び降りて足を傷めたが、泣くほどでもなく、母の背におんぶされて道場

へ通った。母は子供を叱って育てるといふことをしていなかった。

Q：学校、勉強、先生、友達のこと

学齢期前で、草原の向こうに、時計台のある建物を遠望。これは大学だと母に教えられた。大学というところの建物を見た最初。

Q：読んだ本、好きだった本は？ 尊敬していた人は？

講談社の絵本。

Q：将来の夢は？

日々の生活を楽しんでいたの、特になし。

Ⅲ 戦争中のこと

Q：戦争で生活環境は変わりましたか？ どこに住んでいましたか？

満州国安東市中興区新玄街房産住宅（官舎）

Q：ご家族のこと、お世話になった人のこと

父：大東港建設局（文官）。ロシア人を雇うので、ハルビン、新京（現長春）へ出張。ロシア人の家族を自宅へ招いたり、また逆にお呼ばれした。

Q：空襲ほか、直接罹災の経験は？ 敵機や敵兵を見たことは？

空襲なし。世田谷区の自宅は全焼。焼夷弾1発とか。板塀と屋根のある門だけ焼け残っていた。

Q：どんな服装でしたか？

おかつぱ頭。ランドセルは満州で購入。豚革のもので、薄茶色、色はつけていない。スケート靴は、学校での支給なので、下駄スケートの刃が悪く、滑らない。紐は布を三つ編みにしたものを使用（自分で作った。板の上に足を乗せ紐で固定する）。夏にはワンピース他スカート。冬は寒いのでズボンと防寒頭巾。もんぺは着たことがない。ズボンだった。

Q：食べもののこと

配給は米と大麦（特産物）。その他主食にしたものは、じゃが芋、とうもろこし（庭で作った）、小麦粉。野菜は豊富。トマト、キュウリ、インゲン、えんどう豆、ニラ、ねぎ、カボチャ（日本のものの数倍の大きさ）、なす、ピーマン、スイカ、みかん等。他に卵。母手作りの木の葉パン（新宿中村屋のものを真似た）。安東の街のビクトリアの3色アイスクリーム（ロシア人が経営）。

Q：楽しみ、大切に思っていたことは？ 大事にしていたものは？

下校後、学校へ行って遊ぶことが楽しかった。ブランコ（満人の学校の方がずーつと乗り心地がよい）。ロクボク：上までのぼる。1段ずつ。鬼が1回来る間に数段でもよい。次に鬼が来るまでに最上部からすばやく地面へ飛びおりののが上手になった。勝ち。スケート場（グラランド）で遊んだ。スケート靴の刃が悪く、よく滑らなかった。

Q：悲しかったこと、辛かったことは？ 叱られたことは？

国民学校からはだして出て、皆、住宅の間の道を走る。石炭殻の上は足の裏が痛いので苦労した。泣くことはなかった。辛いというより、大変だったというくらいのもの。子どもは泣かない！ 戦時中の子は精神的に強かったのかも…。安全、安心な社会生活。

Q：学校、勉強、先生、友達のこと 勤労奉仕、供出など

① 姉の国民学校へ行って見たら、丁度シンガポールが陥落した時で、木造校舎のグラランド側に、児童のポスターがずらーっと貼り出してあったことが、とても印象に残っている。本人は未就学。

② 教室の前と後に石炭ストーブを真っ赤に焚く。地下に石炭を保管している。地下へ降りてみた。上るのが大変。二重窓に結晶。粘土を校庭の端から掘って工作の材料に。入学は、康徳10年（1943年）4月8日入学式（小雪の降る日）。

Q：読んだ本、好きだった本は？ 尊敬していた人は？

新しい本は買えない。親類の人が読んだ『のらくろ』。友人から借りた『西遊記』。母が夜読む。父かも。私たちは聞いているうちに寝てしまう。母だけがずーつと先まで読んで、翌日は3人が聞かなかったところから読みはじめていた。

Q：将来の夢は？

夢ではなく予定―学校の教師（中学生の時）

IV 戦争後のこと

Q：家族構成は？ どこに住んでいましたか？

引き揚げ後

父、母、姉、私の4人家族揃って帰国し、母の実家渋谷区千駄ヶ谷5―842へ。

母の卒業した学校（合併し、2校が1校になっていた）へ入学し（1年下の学年へ）、卒業した。6年の時に転居。西府町（現府中市北山町）4―16―9。小学校卒業、中学（学芸大小金井中）、東京教育大学付属高等学校、お茶の水女子大学卒、就職、明治大学院修了、お茶大助手3年、会社2年のち桜蔭学園教諭…。父、母、故人となる。姉は婚姻で他所へ。本人、府中から狛江へ。定年退職、現在に至る。

Q :: 家の中で記憶に残っていることは？

戦後の東京には、食料が大変少なかったことに驚いた。蚊帳の生活から窓には網を張った。のち網戸にした。電灯から蛍光灯に。ラジオ。蛇の目傘や番傘も使用していた。洗濯はタライで手洗い。下駄使用。炭から石油へ転換。

Q :: どんな服装でしたか？

髪は短い三つ編み。ワンピース、ツーピース。中学には制服なし。カバンは母の手づくりの布地の手さげ風のもの。ビニールの風呂敷が流行しはじめた。靴は運動靴からラバソールなどへ。

Q :: 食べもののことは？

戦中と異なり、毎日毎食白米ばかりで、私は飽きあき。他の家族は美味しそうだった。

たので、白米ご飯は厭だとは言いだせず、しばらくがまんの日々だった。満人の子どもたちが売りに来るとうもろこしの蒸しパンは美味。家によって味が異なる。母親の味なのです。

帰国後しばらく後、米の配給がくずれはじめてきた。

Q :: 楽しみ、大切に思っていたことは？ 大事にしていたものは？

小学校…毎週、上野の科学博物館へ友人数人と遊びに行った。コースは決まっていた。ミイラを見る。犬の剥製（ハチ公）。

中1…学校へは、1、2番目に登校。隣のクラス（組は2つ）の友人と屋内で卓球をする。教室の朝掃除（当番の人は決まっているが）を行ったりする。早く登校した人たちが朝掃除をしてしまうので、当番の人から文句苦情が出て、皆、当番以外の人は他人の机などは拭かないようにクラスで決めた。

Q :: 悲しかったこと、辛かったことは？ 叱られたことは？

小学校…残念なこと。ハチ公の除幕式の時、病気で欠席したのが残念。もう一つ、千駄ヶ谷での国体の日も病欠欠席。バッヂは返却しないでよかったが…使わなかったバッヂじゃあ…ね。運動会（6年）の時、参加不可。見学することになっていた。

が、徒競走に出場。背の順なので、最前列は先生に見つかるから2番目に入れてもらって、走った。担任の先生に叱られた！でも発熱しなかった。

Q：学校、勉強、先生、友達のこと

小学校6年の昼食時…お弁当を食べている間、いつもグラウンドで遊んでいる男の子がいた。そんなに遊ぶのが楽しいのかと思ったら、お弁当を持って来られなかった子だった！シヨックだった。

Q：読んだ本、好きだった本は？ 尊敬していた人は？

『ノンちゃん雲に乗る』、井上靖著『敦煌』など。敦煌の位置を地図帳で調べたら、遠いので絶対に行かれないと思った。のち、何度も行くことになったが。

Q：将来の夢は？

夢ではなく予定―学校の教師

中山正子

(終戦当時6歳 居住地…山梨県茅野市疎開先)

I 終戦の日、その前後のこと

Q：どのように終戦を知りましたか？

どこかの庭先で、大勢の人が並んでラジオを聞いたこと。とても重苦しい雰囲気の中で大人たちが日本が負けたことを話していたようなことを、かすかに覚えています。

Q：誰と一緒にいましたか？その人たちはどんな様子でしたか？

母、妹、祖母、叔母。一緒に疎開していた伯母と従兄弟2人。その他、近所の人たち。

Ⅲ 戦争中のこと

Q：戦争で生活環境は変わりましたか？ どこに住んでいましたか？

東京都豊島区長崎東町。庭に防空壕があって警戒警報で隠れた記憶があります。空襲が激しくなってきたので、昭和20年(1945年)2月ごろ、山梨県塩山に疎開しましたが、近くに飛行機工場があったためそこでも空襲があり、急いで長野県茅野に再び疎開しました。

外でドラム缶のお風呂に入ったことを覚えています。

Q::ご家族のこと、お世話になった人のこと

母と2歳の妹。20年1月に父方の祖父がなくなったため、名古屋の祖母と叔母が同居することになりました。また伯母(母の姉)家族も、伯父が軍医として戦地に行ったため、一緒に疎開していたので従兄弟たちとよく遊んで、いまだに仲がよいです。

Q::どんな服装でしたか？

もんぺ、おかつぱ。防空頭巾、母が作った白いズックのリュックサックをしょっていました。

Q::食べもののこと

母たちはよく一升瓶にお米を入れて棒でついていました。東京に残っていた父がたまに来ると、白いご飯が食べられて嬉しかったです。

茅野は養蚕農家が多く、桑畑でこっそり食べた紫色に熟した桑の実がとてもおいしかった。

IV 戦争後のこと

Q::家族構成は？ どこに住んでいましたか？

鎌倉市長谷に20年から23年(1948年)まで、父、母、妹、祖母、叔母と住んで

いました。22年(1947年)に弟が生まれました。疎開先から戻る家がなく、大仏殿近くの山の中腹にある親戚の別荘を借りて住んでいました。

東京都千代田区隼町の官舎に、23年(1948年)から25年(1950年)まで住んでいました。官舎の前(現在は国立劇場)は駐留軍の居留地(かまぼこ兵舎)で、鉄条網で囲っており、時折見えるアメリカ人の家庭生活は、冬でも半袖のワンピースを着ていたり、別世界のようで子供心に印象に残っています。後にテレビで観るアメリカのホームドラマのようでした。

Q::食べもののこと

鎌倉では配給のさつま芋が多く、他の食糧は乏しかったので、庭でカボチャを育てたり、小鳥を捕まえるために「かすみ網」を張ったりしましたが、収穫はあまりなかったようでした。

東京へ戻ってもまだ食糧は十分でなく、鶏を飼っていました。ある夜、雄鶏が病気で痙攣を起こし、父がひまし油を飲ませましたが死んでしまいました。もちろんその鶏は食材になりましたが、以来私は鶏肉が苦手です。その頃、母方の祖母が横浜から訪ねてきましたが、どこかで手に入ったのでしょうか、アルマイトのお弁当箱

いっぱいのとりの皮がお土産でした。私はどうしても食べられなくて困りました。栄養状態が悪かったため、冬になると私の手は「しもやけ」で、いつも包帯がぐるぐる巻かれていました。

Q：楽しみ、大切に思っていたことは？ 大事にしていたものは？

当時の鎌倉の海は静かできれいで、よく散歩に行きました。桜貝をたくさん拾って箱に入れて大切にしていました。海ほおずきを見つけるのも楽しみでした。夏になると海水浴に行きましたが、子供たちを砂浜で遊ばせておいて、両親は沖まで泳いで行っていました。それで、私は今でもかなづちです。

毎年、クリスマスの朝、枕元にプレゼントが置いてありました。母の手作りの小物とメッセージの書かれたカードでしたが、とても楽しみで、イヴはなかなか寝付けませんでした。

Q：学校、勉強、先生、友達のこと

終戦の翌年、鎌倉第一小学校に入学、友達もたくさん出来て楽しく通学しました。でもお弁当を持ってこれられない生徒もいて、先生がそれとなく面倒を見ていたようでした。お味噌汁の給食と肝油の配給がありました。家から学校まで30分以上かかっ

て歩いて通学していましたが、雨が降ると父と一緒にバスに乗せてくれました。帰りは友達と近道をするために、禁止されていた江ノ電の線路を歩いたこともありま

した。4年生の新学期に東京都千代田区立永田町小学校に転校しました。給食のモデル校になっていて、1時間目が終わるとミルクを飲まされました。給食も充実していましたが、1日に2度のミルクは苦手でした。ホームルームの時間に担任の先生が確か、『ロビンリーダー』というテキストを使って英語を教えて下さったことは、後々にとっても役に立ちました。

Q：読んだ本、好きだった本は？ 尊敬していた人は？

『小公子』『小公女』『フランダーズの犬』『家なき子』などの児童文学や『キュリー夫人』『野口英世』のような伝記もの。家の手伝いをしないで本ばかり読んでよく叱られました。

Q：将来の夢は？

小さな子が好きだったので、幼稚園の先生になりたいと思っていました。

佐伯邦子

(終戦当時5歳 居住地…山形県遊佐高瀬村疎開先)

I 終戦の日、その前後のこと

Q::どのように終戦を知りましたか？

あまりはつきり覚えていない。

Q::知ったとき、どう思いましたか？

あまりはつきり覚えていない。

Q::誰と一緒にいましたか？ その人はどんな様子でしたか？

疎開先の友達。

II 戦争中のこと

Q::家族構成は？ どこに住んでいましたか？

母、姉2人、妹1人、お手伝いさん。

Q::どんな服装でしたか？

おかつぱ。母の手製のワンピースがお気に入り。

小澤紀子

(終戦当時5歳 居住地…大分県別府市自宅)

I 終戦の日、その前後のこと

Q::どのように終戦を知りましたか？

「終戦」ニュースは、何もわからなかった。また、周囲の人の動きも知らない。

II 戦争中のこと

Q::戦争で生活環境は変わりましたか？ どこに住んでいましたか？

昭和16年(1941年)、17年(1942年)頃、多分福岡県八幡市(現北九州市)？
19年(1944年)、朝鮮半島を南から北(現北朝鮮)へ転勤する父と共に移動。

昭和19年に父の現地兵役召集により、母と共に大分県別府市に戻る。

Q::ご家族のこと、お世話になった人のこと

朝鮮で警察官官舎にいた同じ年頃の女の子。内地に帰国後も10歳まで互いに文通をしていた。

Q::空襲ほか、直接罹災の経験は？ 敵機や敵兵を見たことは？

別府湾の海を挟んで大分市があり、そこには空軍施設があった。空襲のサイレンが鳴り、伯母などに手をひかれて逃げた時、大分市の空が赤く染まっているのを見た。持ち物は、まずお位牌。

Q：悲しかったこと、辛かったことは？ 叱られたことは？

終戦前年であったためか、大きな家財、たとえば母の嫁入り家具の多くを持ち帰ることができた。ただし無事帰国の保障はなく、迎えに来た伯父が母に「万が一船が沈むようなときは、誰か日本に帰るのが第一だから、子供3人は捨てる覚悟をしない」と言ったそうさ。

IV 戦争後のこと

Q：家族構成は？ どこに住んでいましたか？

母の実家に、祖父、祖母、おじおば5人の7人に、母以下4人、計11人が大分県別府市に住んでいた。23年（1948年）までに出征していた叔父たち3人が復員して、合計14人となる。

Q：どんな服装でしたか？

履物は下駄。靴に変わったのは24年（1949年）頃？

中学の同期会で出た話であるが、上履きなどはない頃に「そういえば中学の廊下が冷たかったが、ひよつとすると裸足で歩いていたのだろうか」と言った人がいた。

雨傘を子供一人ひとりが持てるようになったのは、25年（1950年）を過ぎてから。

Q：食べものについて

まず、米飯は時折。大体は黒い芋粉団子。

小学校2年生頃だったか、卵1個が食卓にのり、1個の生卵を子供だけ3人でご飯掛けした。白身がとろんと最年少の弟のご飯にかかり、残りの少ない黄身を妹2人と分けたとき、それは美味しく、こんなに美味しい卵をたくさん食べたいと思った。

Q：楽しみ、大切に思っていたことは？ 大事にしていたものは？

長方形で5cm W×3.5cm L×2.5cm Dサイズのセルロイド製小箱を本家の男の子が持っており、どうしても欲しかった。何か私の大事な物と物々交換をしたときは嬉しく、以後今も針箱として大切にしている。

Q：悲しかったこと、辛かったことは？ 叱られたことは？

悲しかったこと…21年（1946年）に、父の戦死通知を受けたとき。朝鮮で出征する父を見送った駅の風景をおぼろげながら覚えている。

Q：学校、勉強、先生、友達のこと

小学校に入学した時、桜が満開であった。ノートは親が作った。和綴じの紙をほどこいて裏返してノートを作ってくれた。後で思えば父が謡曲を好んでいたのではない。残しておきたかったと残念である。

Q：将来の夢は？

10歳までの子供には将来像はまだない。食べることに精いっぱい。

向後紀代美

（終戦当時5歳 居住地：愛知県疎開先）

I 終戦の日、その前後のこと

Q：終戦の日の前後で覚えていることは？

昭和20年（1945年）1月13日の三河地震です。母と妹とで、祖父の家に疎開していたのですが、夜は余震を恐れて、庭に建てたわら小屋で大勢の家族と寝ていました。しかし、母は弟を身ごもっていて、わら小屋に行くのがおっくうだと言っていました。

II 戦争中のこと

Q：どんな服装でしたか？

血液型と名前を書いた布を胸に縫い付けた服に防空頭巾（綿入れ）をかぶって、サイレンが鳴ると防空壕に避難したことが記憶にあります。

IV 戦争後のこと

Q：家族構成は？ どこに住んでいましたか？

父、母、妹、弟、お手伝いさん。愛知県から東京都中野区へ。

Q：家の中で記憶に残っていることは？

焼野原に両親が苦勞して建てた家は、周囲でも大きい家だったのですが、雨漏りがして、天井裏でねずみが運動会をしていました。

Q：どんな服装でしたか？

おさげ髪で、毎朝、母が編んでくれました。近所の女性に縫ってもらった洋服や編んでもらったセーターを着ていました。花の刺繍などがしてあり、とてもかわいくて着るのが喜びでした。

冬は手にあかぎれやひびができて痛かったりしました。がら紡といわれたコートしかなく、寒いので火鉢にかじりついていました。物不足でしたので、傘の配給があり、抽選で当たったことなどを思い出します。

Q：食べものこと

お米はなく、お櫃には配給のぎらめが入っていました。毎日すいとん、おじゃ、ふ

かしさつま芋、雑穀ばかりでした。そういえば、かるめ焼きというものがありました。ぎらめをおたまのようなもので焼いたものです。給食の脱脂粉乳がまずかったこと。美味しかったものはコッペパン、ジャムパン、クリームパン、甘食などです。

Q：楽しみ、大切に思っていたことは？ 大事にしていたものは？

年に1度の家族旅行とレストランでの外食。きいちのぬりえをためていました。

Q：学校、勉強、先生、友達のこと

校舎が足りなくて、午前と午後の2部授業でした。私たちから新制度になり、先生も民主教育をとまどいながら教えておられました。近所の区立小学校だったので、友達も近くに住んでいてよく遊びました。まりつき、ゴムとび、石蹴りなどを裏の路地でやっていました。今では車が通るので危ないですが…。紙芝居のおじさんも来てカチカチと拍子木を鳴らして子供を集めていました。お鍋を持ってお豆腐を買いに行ったり、コロッケを揚げてもらったりするのを待つおつかいもしました。買い物に会話がありました。

Q：読んだ本、好きだった本は？ 尊敬していた人は？

本が少なく、1冊の本を繰り返し読みました。紙も悪くてグレーのざらざらのも

のでした。好きだった本は『家なき少女ペリーヌ』でした。キュリー夫人、シュバイツァーなどが憧れの人でした。

Q：将来の夢は？

社会に役立つ科学者やお医者さんになること。

坂上栄美子

(終戦当時4歳 居住地：兵庫県佐用郡佐用町自宅)

I 終戦の日、その前後の1ヶ月

Q：終戦の日の前後で覚えていることは？

父の戦地（パラオ）からの復員。昭和20年（1945年）12月深夜、いきなり起きられ、髭だらけで硬い服を着た人に、抱きすくめられた。その恐怖から、父としてなつくまでに長い年月を要した。

晩年、父が「おまえは可愛がらせてくれない子だった」とぼつりと言った。後を促すと、父は次のような話をした。激戦地パラオで、銃弾が脇腹を貫通した。周りは死者や負傷者ばかりだったが、川を渡れば病院があることは分っていた。でも、多くは川を渡らず、死んでいった。「1歳そこそこで別れたおまえを見ないで、このまま死ぬわけにはゆかぬ」と思って、腹部を押さえて川を渡った。なんとか病院まで辿り着き、数少ないパラオからの生還者となった。終戦の年の冬にやっと帰ったが、おまえはなつかず、近所へ行っては「怖いおじさんが来て、帰らないで困っている」と言っつまわっていた。こんな話だった。

私は私で、戦後生まれた年子の妹弟が父の膝の上で遊んでいるのを、少し離れて淋しく見ていた記憶がある。

母も亡くなり、老人施設で暮らす父を時々見舞っては、色々な話をした。父の認知症が進んでいく中、やっと父と娘になれたような気がした。父と娘の戦後は、随分長かった。

Ⅲ 戦争中のこと

Q：戦争で生活環境は変わりましたか？ どこに住んでいましたか？

兵庫県の子の農家（自宅）。伯父伯母の3家族が出入りして、出征中の父を除いても、10人以上のこともあった。

Q：ご家族のこと、お世話になった人のこと

父の生死も不明の戦争末期、幼児だった私だけが家族の笑う種だったと、後年聞かされた。

Ⅳ 戦争後のこと

Q：家族構成は？ どこに住んでいましたか？

父の復員、妹弟の誕生。疎開の伯母夫婦は戦後5年くらいそのまま残っていたので、11人家族だった。

Q：どんな服装でしたか？

22年（1947年）の小学校の入学式に、母の肩掛けで作ったビロートの赤いワンピースを着た。鮮やかな黄色に赤い襟のセーラー服を、よそ行きに着た記憶がある。外国からの支援物資だったのだろうか。

Q：食べものこと

戦前都会暮らしだった伯母が、やっと手に入ったパンで作ってくれたサンドイッチは、味になじまず食べられなかった。伯母のがっかりした顔を、今も覚えている。昼間庭で遊んでいた鶏が、夕餉のすき焼きになる。今でも鶏肉は食べられない。

Q：学校、勉強、先生、友達のこと

小学校へ入学すると、疎開のまま残ったり、土地に居ついたりした都会の子と一緒にになった。都会の子は夏でも普段にソックスを履くことや、初めての学級写真（小

3年)で都会の女の子がにつこり笑っていることが不思議だった。

Q: 読んだ本、好きだった本は? 尊敬していた人は?

小学校3年生の冬、近所のおばさんに百人一首のカルタ取りを教えてもらった。そのおばさんのことを、みんなは「せんそうみぼうじん」と言っていたが、意味は分からなかった。早く百人一首を覚えたいと思った。

木村和子

(終戦当時3歳 居住地:父の任地 満州)

I 終戦の日、その前後のこと

Q: 何歳でしたか? どこに住んでいましたか?

3歳10か月。満州。

II 戦争前のこと

Q: 家族構成は? どこに住んでいましたか?

昭和10年(1935年)父は長兄にすすめられ満州で職に就き、母と生まれたばかりの長男と3人で生活を始めました。私も姉、妹3人とも、満州で生まれました。

III 戦争中のこと

Q: どんな服装でしたか?

母の話や写真を見ると、姉妹皆裕福な服装をしています。

Q: 食べ物のこと

現地の人たちが食料を運んできて、地下室は缶に入った明太子や大きな肉の塊など、常時たくさん入っていたそうです。

IV 戦争後のこと

Q：家族構成は？ どこに住んでいましたか？

21年（1946年）5月に満州から引き揚げ舞鶴に着いた私たちは、父の実家岡山に身重な母を気遣いながら家族6人身を寄せました。

Q：どんな服装でしたか？

母は生活も少し落ち着いた頃、洋服も手編みのセーターなども、作ってくれました。お正月には必ず新しい洋服が枕元に置いてあり、新しい洋服が着られるお正月が楽しみでした。

Q：食べもののこと

母が軒に吊るした柿が干し柿になる前に、育ち盛りの兄が食べてしまい、がっかりしたのを覚えています。

Q：悲しかったこと、辛かったことは？ 叱られたことは？

着のみ着のまま岡山の実家に辿り着いた時、父の長兄は畑に出て留守で、義姉からはすぐには上がるようにという言葉が出なかったと、母から聞かされました。後に父はお世話になった長兄を幾度も東京に招き、恩返しをしていました。私もこの伯父が大好きでした。東京オリンピックの開会式にも招待し、父も満足そうでした。

Q：学校、勉強、先生、友達のこと

岡山から今度は母の実家、佐賀でしばらくお世話になり、その後父の仕事で広島に転居しました。そこで23年（1948年）に小学校へ入学しましたが、入学式の写真では、私は靴を履かせてもらいましたが、ゴム草履、下駄、裸足の子供もいて、そんな時代だったようです。学校は楽しく、裏の先生宅に遊びに行ったり、ゴム段で遊んだり、幸せな日々でした。

Q：読んだ本、好きだった本は？ 尊敬していた人は？

本は好きでした。学芸会では、先生がナレーター役を決めたので、何度も家で練習しました。

河井尚子

(終戦当時1歳10か月 居住地…京都府疎開先)

Ⅲ 戦争中のこと

Q：戦争で生活環境は変わりましたか？ どこに住んでいましたか？

父は結婚後間もなく昭和18年（1943年）初めにシベリアへ出征。私は東京で父のいない家で生まれ、京都の疎開先へ移住。

Q：ご家族のこと、お世話になった人のこと

母も一人っ子のため、父の知人を頼って、祖母、母、私の3人でひっそり暮らしていた。

Q：どんな服装でしたか？

おかつぱ頭。

Q：食べものこと

牛乳が入手しづらく、山羊の乳を飲んだと聞いている。

母が着物を売って食料品に換えていた。

Q：楽しみ、大切に思っていたことは？ 大事にしていたものは？

父の写真。

Ⅳ 戦争後のこと

Q：家族構成は？ どこに住んでいましたか？

疎開から千葉県市川市の伯父のいる隣の寮に居候、母と2人きり。

Q：家の中で記憶に残っていることは？

物は無く、リンゴ箱のテーブル1つ。台所、トイレは共同。

Q：どんな服装でしたか？

おかつぱ。母の服からリフォームした服。

Q：食べものこと

おやつは竹の皮にはさんだ梅干を吸っていた思い出がある。

Q：楽しみ、大切に思っていたことは？ 大事にしていたものは？

父が終戦2年後にシベリアから復員し、会社に復帰し、おみやげにグリコ（おまけつき）をよく買ってきてくれた。

Q：悲しかったこと、辛かったことは？ 叱られたことは？

ジフテリア、百日咳などにかかり、医者に歩いて通ったこと。

雪の降る寒い日、長靴を欲しがったら、伯母から叱られ外に出された思い出が、鮮明に残っている。

Q：学校、勉強、先生、友達のこと

幼稚園には通えずいきなり小学校で、トイレにも1人で行けず、文字も鏡文字、絵は上下逆の人間を描くなど、シヨックは大きかった。

Q：読んだ本、好きだった本は？ 尊敬していた人は？

1年生の担任が、新卒の男の先生でとても優しく、私は夏休みに母と猛特訓し、その後順調な学校生活を送れた。

鷺崎千春

(終戦当時3か月 居住地…父の実家 愛媛県周桑郡河原津 現西条市河原津)

Ⅳ 戦争後のこと

Q：家族構成は？ どこに住んでいましたか？

家族は、父、母、祖母、妹、私、叔父たち2人、伯母、従兄妹たち4人(満州から父の姉が子ども4人と引き揚げてきた)。父の実家に住んでいた。

Q：家の中で記憶に残っていることは？

大きな台所、台所わきの生け簀、L字型の廊下、玄関の大きな龍の絵の衝立、お味噌など寝かす納戸、お米を入れていたお蔵。それからミシンが来た日のこと、父が母に一生懸命教えてあげていたのを覚えている。

Q：どんな服装でしたか？

おかつぱ。普段の服装は覚えていないが、一番のお気に入りは母の妹が作ってくれたピンクの麻のフレアーのワンピース、よそ行きだった。当時は珍しかった機械編みのセーター(ワインカラーに胸に白のひまわりが編み込まれていた)を上京のお饞別にいただいたことを覚えている。

Q：食べものこと

美味しかったものは、つきたてのお餅、母の具たくさんのお巻き寿司、満州帰りの伯母の得意な餃子。初めてチョコレートを食べた時、「こんな美味しいものあるの！」と私がとろけるような笑顔をしたと聞かされる。

Q：楽しみ、大切に思っていたことは？ 大事にしていたものは？

従兄妹たちと鬼ごっこ、かくれんぼなどして遊ぶこと、お正月前に新しい下駄を買ってくれるのを楽しみにしていた記憶がある。

Q：悲しかったこと、辛かったことは？ 叱られたことは？

小さな子どもの私には、大人の苦勞も何も分からず、辛かったことは思い出せない。6人も子どもたちがいて、父がいつも「うるさい、静かにしなさい」と叱っていたので、自分のお父さんなのに怖いおじさんと思っていた。買ってもらった新しい下駄をおろすのが勿体なくて、みんなでL字型の廊下をカタカタ歩いたら、案の定また叱られた。

Q：学校、勉強、先生、友達のこと

まだ学校には上がっていないので、従兄妹たちが友達みたいなもので（双子2組で

したから）いつも仲良く遊んでいた。

Q：読んだ本、好きだった本は？ 尊敬していた人は？

隣町にある母の実家が病院と幼稚園をしていたので、そこに行くときたくさん絵本があつて、楽しみに見ていた。何の本だったかは思い出せない。母の実家に行く時だけは父がとても可愛がってくれたのを覚えている。

Q：将来の夢は？

多分「やさしいお母さん」になるのが夢だったのだと思う。お母さんごっこが好きで、母の着物を引っ張り出してよく着ていた。

後記

私たちは、七十年前はまだ一人では生きる力のない少女でした。周囲の人たちに守られてあの時代を生き延び、今日まで恙なく生きてこられた幸運な存在です。一人で生きる力がなということとは、逆に、誰の助けも得られず、一人では生きられなかった少女たちもたくさんいたはずです。編集をしながら、世界中のそういった少女たちのことを考えました。

ご寄稿くださった皆様、ありがとうございます。3か月は多忙でしたが、多くのことを学ばせていただきました。

「戦後」という時間が、七十年だけではなく、八十年九十年百年と続くことを願いながら、この文集を皆様にお届けします。

また、本書の制作にあたり、株式会社繁松の葛西亮氏と藤山陽子氏には大変なご尽力をいただきました。ここにお礼申し上げます。

2015年7月25日

編集委員チーフ 坂上栄美子

編集委員 青木怜子

進士多佳子

中山正子

鷺崎千春

一般社団法人 大学女性協会
東京支部会報『ともしび』特集号
終戦七十年特別企画
昭和二十年八月十五日 あの頃わたしは
—少女たちの戦争証言—

発行日
2015年7月25日

編著・発行
一般社団法人 大学女性協会 東京支部
〒160-0017 東京都新宿区左門町 11 番地 6-101
Tel. 03 (3358) 2882 Fax. 03 (3358) 2889
Email: jauw@jauw.org URL: <http://www.jauw.org>

編集協力・装丁
一般財団法人 知恵の継承研究所

制作協力・印刷・製本
株式会社 繁松